
Si je tombe dans l'amour avec vous

篠宮 かおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i j e t o m b e d a n s l ' a m o u r a v e c
v o u s

【Nコード】

N 9 8 9 5 X

【作者名】

篠宮 かおる

【あらすじ】

他サイトに別名で掲載していた作品を、題名をフランス語にして、加筆修正をした物です。

夫は社長、妻は一般社員。

二人の関係は崩壊寸前。

「お願い、私を愛してるなら別れて・・・。」

不器用な夫婦のラブストーリー。

♪ 0 動き出した歯車。(前書き)

お引越し作業中です。

♪ 0 動き出した歯車。

<愛してる>

そんな言葉は、私達夫婦の間には、最初から存在していない。

左薬指でさりげなく輝く指輪は、物言わぬ冷たい鎖。

その鎖に刻みこまれている言葉は、想いの籠っていない愛の言葉。

— L' amour qui est destin? —

真実味のない、当てつけの様な言葉。

日本語に訳せば>運命の恋<。

フランス語にしてあるのは、私に対する嫌味。

私、菜々宮^{ななみや}吉乃^{よしの}、26歳は、結婚して三年目の、どこにでもい
そうな普通の一般社員。

それに引き換え私の戸籍上の夫は、今、最も世間で話題の中心に
なっている若手実力派の社長。

見た目も然ることながら、言動から視線まで、全てが最高品質で、
文句のつけようのない所がまた逆に腹立たしい所。

鋭い眼は、常に私以外を見つめていて、微かに掠れ、良く響く甘
い声は、ベットの中で聞けば、程よい甘さを含む媚薬にも匹敵し、
魅了される。

そして、ガッシリしている割には、決して太っていない鍛え上げ
られた身体。

それで35歳となれば、玉の輿を狙っている女性社員にとっては、最高の獲物である事は間違いない。

きやあきやあと、やけに煩く、甲高い媚びた奇声をあげる先輩達を尻目に、私は与えられた仕事を全うしようと、美女の集団に囲まれている夫を見て見ぬふりをし、その横を堂々と通り過ぎた。

家では夫婦でも、一步でも家から出れば、その瞬間から私達は他人になる。

（まあ、家でも他人だけどね・・・？）

そんな事を思いながら、歩いていると、声を掛けられた。

「あら、菜々宮さん。アナタいつからそこにいたの？」
全然気付かなかったわ。

と、勝ち誇った笑みを浮かべ、小馬鹿にされ、蔑まれるけど、もうそんな程度の幼稚な虐めでは何とも思わないし、感じない。
逆に、そんな事しか出来ない人を憐れみたくもなる。

（どこがいいのよ、あの人の。）

でも、言い返し、反論するのも面倒だし、億劫。
なら。

「すみません・・・。」

小さく、怯えた声で謝り、頭を下げ、下に俯いて走り抜ける。
それが愉快だったのか、女性の甲高い声が聞こえた。

「アレでも同じ女かしら。見た？あの子、今日は化粧すらしてなかったわ。」

大袈裟に声をあげ、私をバカにし、優越感に浸っていた女性は、自分の隣に立っていた男性に甘えるように凭れ掛った。

その男性は、私が勤務している会社の現社長であり、戸籍上の私の夫である、綾橋^{あやはし} 智さん^{さとし}、35歳。

でも、胸は痛まない。

そんな光景に胸を痛めていた可愛い私は、結婚して2ヶ月目にして死んでしまった。

今では涙も出なければ、溜息さえ漏れない。

「吉乃、大丈夫か？顔色悪いぞ？」

出勤して早々、疲れ果てて頭を抱えていた私を気遣い、声をか掛けてくれたのは、同期で入社した営業部のエース・長瀬^{ながせ} 類^{るい}、28歳。

同期の誼で、私が営業部から総務部に異動した今でも、こうして仲良くしてくれている。

（いけない、今は会社なのに・・・。）

気付かれないように、そっと自然に笑顔を浮かべる。

「類は今日も、相変わらず朝から元気ね・・・？」

「まあ、営業は体が資本だからな。それより、本当に大丈夫か？お前また痩せたんじゃないのか？」

節だった指が、私の頬を滑っていく感覚が懐かしくて、不覚にも泣きそうになってしまった。

お互いが大切過ぎて、親友以上になれなかった私達。

後悔していいと言えは嘘になるけど、今の私は、昔の弱い私じゃない。

彼にも、彼の人生がある。

大きな手の平に手を絡めるように手を重ね、私はもう一度笑顔を浮かべた。

「大丈夫よ？ 私には愛する旦那様がいるから。類は知ってるでしょ？」

嘘。

愛なんかない。

だけど、類は優しいから、だから嘘を吐く。

あの人に対して抱いている感情があるとするのなら、それは深い諦めの様なもの。

愛しさもなければ、悲しさや憎さも感じない。

『無関心』と言う言葉が近いだろうか。

密やかな逢瀬を終えた私は、パソコンに向かい、ひたすらキーボードを叩くように弾く。

緩くウェーブが掛かっている柔らかめの長い髪が、他人の視線か

ら私の表情を覆う様に隠す。

さっき、類に「痩せたんじゃないか？」と、指摘された時は驚いて、一瞬、呼吸をするのを忘れてしまう位、驚いた。

確かに最近、私は最近痩せた。

でも、バレるとは思ってもなかった。

（あの人は気付かないのにね・・・。）

近しい人より、昔の想い人が私の変調に敏いなんて。

私が痩せる理由は拒食症気味による少食で、その拒食症気味の原因は、環境の変化によるストレスと、心因性のものだと言病で判断された。

私を担当してくれた先生は、そのストレスの原因を取り除かなければ、後々、私が悲しむ事になると、はっきり断言した。

そして最後に、精神科の先生も紹介してくれて、くれぐれも興奮しないようにと、注意した。

ふと、顔を上げ、何気なく辺りを見回した私は、見たくもない光景を目にしてしまい、無意識の内に唇から血が出るほど、強く噛み締めていた。

（ああ、やっぱり。結婚なんてしなければよかった。）

私が偶然にも見てしまったモノは、戸籍上の夫が、綺麗で、魅力的な女性とキスしている所だった。

結婚して、今年の10月で三年。

それは結婚した時から、僅かに軋み、隙間だらけだった私達夫婦の擦れ違う歪んだ関係が、いよいよ変化する刻ときを悟り、今にも大きく動きだそうとする瞬間でもあった。

♪ 1 亀裂と発症（前書き）

この話から色々手直しが入ります。

♪、1 亀裂と発症

涙は三年前に枯れ果てたのだと、ずっと思いこんできた。だけどそれは私の単なる思い込みだったらしい。

両頬に静かに伝わる、熱くも冷たい心の雫は、止まる事を忘れたかのようにずっと流れ続けている。

（何を泣く必要があるの・・・。）

寝室は結婚して三ヶ月目に別々となり、夫婦として身体を重ね合わせた記憶も一度としてない。

なのに私は今、それを悔しく、惨めに感じている。

昨日、あの後、私は正午までに仕事を何とか予定通りにこなし、早退し、病院を受診した。

その病院は、昨年の秋から定期的に受診している所で、受診したのは精神内科。

私が診察室に入った瞬間、私を担当してくれている先生は、厳しい声で「やめなさい」と言葉を発した。

私には、先生がどうしてそんな事を言うのか判らなかった。

先生はそんな私の心理状況もお見通しだったのか、静に囁くように言葉を発した。

最近、泣いた記憶は？と。

私は首を横に振り、覚えてないと答えを返した。

先生は痛ましげな表情を浮かべながらも、最近あった事を事細か

く聞いてきた。

これも治療の一環だからと、辛くても話してくれるね、と、言われれば、私は望まれるがままに話した。

そして、ついさつき職場で見たことも、ありのまま淡々と話せば、先生は大きな溜息を吐いて、それが原因か、と、本当に小さく呟いて、私に聞いてきた。

「旦那さんとは別れられない？」

別れられなければ、近い内に確実に倒れると言われた私は、それでも別れられないと、無意識に答えていた。

一夜明け、目覚めた今、その理由が解った気がした。

いくら口先で愛がないと言っていたとしても、私はいつか。

（ああ、私って何処まで救いようがないの・・・。）

そう。

心の中ではいつも、いつか、きっと、と、思い、願っていたのかも知れない。

でも、それももうそろそろ限界。

心が、身体が、そして何より私自身が、声無き悲鳴を上げ、今にも狂ってしまいそうだった。

ベットから降り、姿鏡の前に立つ。

鏡の中には、女性らしさの一欠片もない、貧相な身体つきの私がいた。

「吉乃、貴女、どうしたいの・・・？」

鏡の中の私は弱々しく、誰だって抱きたくない、鶏ガラより粗末な女にしか見えなかった。

鏡の中にいる私自身に声をかけても、答えが返ってくる訳でもないのに、それでも私は答えが欲しい為、自問自答を繰り返す。

（とりあえず、食事作らなきゃね・・・。）

そう思いながら、着替える。

その着替えている時でさえ、私の頭の中は、暗い思いと考えが常に支配している。

今の生活を捨てるのは簡単。

でも、その後の私の生活は？

不況な世の中のこのご時世、再就職なんて簡単に出来ない。

離婚だって、離婚後の住居や仕事、住み易い環境を整えてからの方が良いに決まっている。

大きめなトレーナーをクローゼットから出し、ジーンズと合わせれば、身体の線は簡単に隠せる。

長い髪は適当にアップし、バレッタで留める。

そのバレッタは、結婚が決まったお祝に、と、類が、特別にオーダーメイドしてまで、注文買い取りし、贈ってくれたモノで、一番気に入ってるモノ。

最後に、指輪をつけようと、ジュエリーボックスに手を伸ばし掛け、やめる。

（心もないのに、わざわざ自分から鎖をつけてどうするのよ・・・
――。）

自分の愚かさや滑稽さに吐き気がする。

そんな気分をなんとか押し殺し、ガチャリと、寝室からリビングへと通じる扉を開くと、そこにはもう笑うしかない光景が、今や遅しと、私を待ち受けていた。

「お邪魔したみたいですね。どうぞ、私の事はお気になさらないで下さい。」

如何にもこれからという場面に出くわしてしまった私は、喚く事より、微笑を浮かべ、黙認する事を選んだ。

指輪をしていないだけで、私はひどく精神的に楽だった。

（最初から、こうしていれば良かったんだわ。）

現に、名前だけの偽りの夫に睨まれている今も、全然怖くもなければ、悲しくて辛くもない。

自分でも気付かない内に、自然と笑みが浮かんでくる。

「吉乃・・・？」

その笑顔の意味が解らなかったのか、名前だけの夫・智が、苛立った表情から困惑した表情で、私を見つめ、自分の身体にしな垂れ掛っていた妖艶な美女を引き剥がし、私と正面から向き合った。

そして、ゆっくりと伸ばされてきた手を、私は大きな音を立て、打ち払っていた。

「私に触らないで!!」

叫んだ瞬間、目眩が私を襲った。

(・・・っ、こんな時に・・・。)

だけど私はその襲ってきた突然の目眩を、気力と興奮から無視し、近くにあったガラスのフォトフレームを掴み、智に投げつけた。

投げつけたフォトフレームには、私と智のウェディング姿の写真が収まっていた。

粉々に砕け散ったフォトフレームは、私達夫婦の関係の様だった。

最初から解っていた。

私達夫婦の間に、『愛』などと言う、愚かで、甘い感情がないことなど。

(なのに、なのに・・・っ。)

結婚して二ヶ月位までは、確かに恋はしていた。

ただし、それは恋に恋にしていただけ。

荒れ狂う心を抑える為、私は自分自身に暗示をかける。

私が恋していたのは、幻で、類だけ。

この人になんて、恋なんかしてない。

(そうよ、恋なんてしてない。)

「ああ、何よ。その目は。貴方はいつもそう。私をいつもそうやってバカにして！！気に食わなかったのよ・・・っ。」

貴方の顔が、と、続く筈だった私の言葉は、無理して抑えつけていた強烈な発作により、声にならなかった。

胸を掻き毟るほどに、辛く、息苦しい発作は、私の身体からの命がけのSOS。

両膝をリビングの床につけ、右手で身体を支え、左手で胸元を押さえる。

（ああ、だからだったのね。）

決して興奮してはならないと言われ続けた意味が、今、初めて解った気がする。

死にたくないのに、死神の甘美な囁きが私を誘い、私はその囁きに誘われるがまま、意識を手放した。

♪、 **1 亀裂と発症（後書き）**

一端、区切ります。

♪、2 キス（前書き）

短いですが、更新。

♪ 2 キス

まだ、ダメよ……。

まだこちらに来てはダメよ……。

私の愛しい――。

生と死の空間で彷徨っていた私を現実に戻してくれたのは、どこかやさしく、慈愛に満ちた知らない声と、頬に感じた痛みだった。

その頬の痛みに目を開くと、そこには何故かアノ人達がいた。

(ど、どうして、いるのよ!!)

いたのは、菜々宮の母と姉。

「吉乃……？ 吉乃！！良かった。あなた、智さん、吉乃が目醒了ましましたわ。」

恐怖で凍りついた私の身体を、母は涙で潤んだ瞳を細め、嬉しげに微笑んで見せ、私の身体を起こし、ベットも起こし、甲斐甲斐しく世話を焼いた。

傍から見れば、美しい家族愛に見えるこの光景。

私はその光景を守る為に、固まった表情筋を動かし、微笑んで見せた。

「お母さん、私、少し寝過ぎちゃった？」

掠れた小さな声は、母と姉の気に召さなかった様だった。

「吉乃、アンタ憶えてないの？アンタはね、過労で倒れたのよ。智さんが病院に連れてきてくれなかったら、危なかったのよ！？」

姉は私の胸元を、ぐっ、と、力を込め驚掴み、揺さぶった。

「い、痛いよ、翠ねえ。分かったから放してよ。」

いつもこうだ。

諦めながら、抵抗しつつもそのまま揺さぶられていた私は、逸らした視線の先で、初めて戸籍上の夫と目があつた。

智は何故か酷く憔悴していて、私が自分を見ている事に気付くと、顔を歪め、手を伸ばしてきた。

後から思いだせば、私はこの時初めて、智の顔を見たと思う。

不安そうに歪められた顔は、確かに私を案じていてくれたいた。

静に、ねっとり絡み合う視線。

結婚して、恐らく初めて絡み合った視線。

そしてそれは、私に戸惑いと熱を生じさせた。

「あれ？吉乃、アンタ熱でもあるの？顔が真っ赤よ？」

「ふえっ！？」

(そ、そんな・・・。)

私は姉の言葉を否定しながら、まるで智の視線から逃げるかのように布団を被った。

だけど、病院の布団は薄くて頼りない。

私はいとも容易く姉に布団を捲られ、姉を恨んだ。

返して、と、繋がる筈だった言葉は、あっさりと固まってしまった。

(どうして、キスされてるの!?)

すっかり混乱してしまっていた私は、抵抗す事さえ忘れ、智から与えられた、熱く、性急なキスに溺れ、気がついた時には胸元が肌蹴られ、ベットの上で羞恥に悶えていた。

キスに溺れながらも、それとなく家族の姿を探したけど、家族の姿は既になく、病室には私の乱れた吐息だけが甘く響く。

「ん・・・、やつ・・・。」

思考がついていかない。

首筋に感じた痛みと、ちゅっと、濡れた音で、更に何も考えられなくなった。

「吉乃、吉乃・・・っ。」

フロントホックのブラジャーに、大きな手が掛かった時、甘く、乱れた空気を邪魔するかのよう、病院に一人の女性が現れた。

「智さん、迎えに来ちゃった。」

艶やかで、自信に満ちた、私とは正反対の魅力的な女性の登場で、私は瞬時に正気に立ち返っていた。

乱された病衣を手早く直し、ベットから降りる。

淫らなこの身体が、堪らなく嫌だった。

「ちょっとトイレに行ってきます。」

「吉乃、戻ってこいよ？」

「・・・・・・・・・・。」

（アナタは何処まで私を苦しめるの・・・？）

私が返事をしない事に、何かを察知したのか、智は私と目を合せ、念を押すように「行ってこい」と言いながら、肩を軽く叩いた。

病室から出た私は、当てもなくなく院内を歩いた。

（どうして抵抗しなかったの？）

答えなら解っていた。

だけど、考えずにはいられなかった。

歩きながら考えているのは、つい先程までの事。

キスされた瞬間は驚きで、段々と深くなっていくキスは、女としての本能が働いてしまったのか、浅ましくも止められなかった。

抵抗できなかったのは嬉しかったから。

（なんだ、嬉しかったの？私は。あんなに嫌だったのに・・・、あんなに・・・。）

報われない恋はしないと、あの時に誓っていたというのに。

自分で自分が情けなくなってくる。

ぼろぼろと勝手に溢れてくる涙で、前が見えなくなってきた私に、神様は私に更なる試練を科そうとしていた。

だからだろうか。

私が気付かない内に智につけられ、首筋に咲いた紅い花は、励ますかのように中々消えなかった。

♪ 3 宣告

泣くだけ泣いて、そのせいで腫れてしまった瞼。

こうして泣いている間にも、運命の時は静に迫っていた。

泣いている間、無意識の内に歩き回っていたせいか、私に宛がわれた病室までは、随分と距離があった。

ふらふらと病室まで歩いていた私は、寒気を覚えて立ち止まった。と、その時。

「菜々宮さん、丁度良かった。少し良いですか？」

「どうしたんですか？加賀見先生。」

私を呼び止めたのは、私の担当医の加賀見先生だった。その加賀見先生に、いっになく真剣な瞳で見つめられ、嫌な予感がした。

「ここじゃ、ちょっと・・・。」

案の定、加賀見先生は私の顔を見て、気まずげに顔を歪め、逸らした。

（いや、いやよ・・・。）

ついていけば、嫌な事を告げられる。

頭では分かっているのに、足が勝手に動く。

加賀見先生はまだ若いながらも、名医として有名で、彼の手に掛かれば、どんな患者も明るくなると。

けどそんな加賀見先生でも、時には残酷な宣言をしなければならぬ時だってある。

それがたまたま。

そう、偶然だっただけ。

その残酷な宣告を受ける患者が、私だったと言うだけ。

加賀見先生に連れて来られた所は、小さな誰もいない部屋だった。

備え付けのソファ―に座る様に促され座った私に、加賀見先生は憐みの籠った瞳と口調で話し始めた。

「悪かったね。でも、菜々宮さんは家族には知られたくなかっただろうから。」

これから話す事は、全部菜々宮さんの為だからね？

微笑んでいたつもりだったのかも知れない。

だけど、先生は涙を流していた。

「菜々宮さんは、俺が今まで診てきた患者さんの中で、一番強くてか弱い女性でね。それは精神面だけじゃなくて、身体の方もそうだ

った。」

先生が淹れてくれたホットココアの湯気が、私を慰めるかのように優しく揺れる。

「菜々宮さん、正直に言うと、このままでは君には妊娠は無理だ。妊娠しても子供は胎内で充分に育たないし、それ以前に妊娠する確率は、今は限りなく0%に近い。」

「・・・・・・・・。」

（う・・・・・・・・そ・・・・・・・・、よ・・・・・・・・。そんなのウソ。）

「例え不妊治療をしたとしても、君の身体はもたない。」

口では待って、と、言っている筈だった。

だけど、実際はガタガタと震えているだけだった。

（聴きたくない、聴きたくない！！！）

恐怖で震えているのに、それでも加賀見先生は、神様は、情け容赦がなかった。

「菜々宮さん、君はスキルス胃癌の可能性があるそうだ。もしそうなれば、余命はもって一年、早くて半年だ。」

スキルス胃癌・・・・。

それはとてつもなく進行の早い、救いようのない死に直結する様

な病。

嘘だと、夢だと叫びたかったし、言って欲しかった。

だけど両目から溢れ出す熱い涙が、現実だと私に知らしめる。

「治療は出来る限り手を尽くすけど、この手の病を克服する事はまず難しい。一度、精密検査をしてみないと・・・。」

加賀見先生の声は聞こえなかった。

「・・・っ、先生っ、時間を・・・っ、考える時間を、私に下さい・・・。」

やっとの事で絞り出した声は、絶望の色に染まっていた。
それほどまで、私は追い込まれていた。

（我ながら、なんて醜いのかしら・・・。）

死にたくないと思うのはどうしてだろう。

その時、私の頭に浮かんだのは、あの人の顔だった。

（どうして・・・。）

それを否定したくて、認めたくなくて、そして泣きたくなくて、私はその人の顔を頭から追い払う様に、頭を左右に振り、ソファーから立ちあがった。

「先生、この事は、絶対に何がなんでも、誰にも言わないでお願い下さい。」

「菜々宮さん、もしかして、君は、旦那さんと……。」

この人はなんて聡いのだろう。

「ええ。別れるつもりですから……。綾橋には他言無用にお願いします。」

つくづく、私は幸せに縁がないらしい。

加賀見先生は私の暗い笑みを見て、本当に無念そうに、ギュッと目を閉じた。

私が時間が欲しいと言ったのは、未練を断ち切る為であり、心の整理をする為。

「先生？私はね、菜々宮の人間でもないんですよ……。？アノ人達は、私が気付いてないと思ってるんです。」

バカみたいでしょ？

スツと、立ち上がった私が、家族の話をした理由を悟ると、先生は更に悲壮な表情を浮かべ、「解った」とただ一言だけ呟き、そのまま黙り込んだ。

少しだけ出歩くだけだった筈が、思わぬ話のせいで、私は夕方になるまで小部屋でぼんやりしていた。

余命を宣告され、家族の話をした後、直ぐに立ち去るつもりだったから、私はずっと立ち尽くしたままだったけど、加賀見先生は、回診に行ったのか、既にいなくなっていた。

どのくらいの間そうしていただろう。

コンコン、と、響くノックの音に、私は小部屋の時計を見て驚いた。

時刻は18時を過ぎ、夕食の時間だった。

「菜々宮さん、夕飯の時間ですよ?。」

ノックの主は、綺麗で健康そうな看護師だった。

「すみません、今すぐ戻ります。」

「そうなさって下さい。ご家族の方が心配なさってますよ?。」

（家族・・・?）

家族って誰の事?

ああ、そうか。

看護師の言葉に、フフと、暗い笑みを漏らした私は、心配して捜しに来てくれた看護師を促し、一緒に部屋へと戻り、偽りの笑顔

を浮かべた。

病室にいたのは、想像していた通りの人達だった。

血の一滴の繋がっていない姉に、偽りの両親。そして、姉の優しい旦那様。

（そう言えばこの人は、区役所に勤めていたような・・・。）

「なに？吉乃ちゃん。僕の顔に何かついてる？それとも好きになっちゃった？」

私が顔を黙って見ていた事に何を思ったのか、姉の旦那はふざけた様な事を言った。

いつもならその程度の冗談は、笑いながら流していたけど、今日はダメだった。

今日は疎ましく、そして腹立たしい。

「寝言は寝てからにして下さい。貴方は菜々宮家の婿なんですよ。それを自覚してらっしゃるんですか？」

一度決壊した思いは止まらない。

自分でもらしくないと思いつつ、辛辣な言葉を止める事は出来なかった。

「帰って。二度と姿を見せないで。あなた達の顔を見るだけで、お

かしくなるのよ!! 今日限りで縁を切って!!」

奇しくも、それは初めてあの人達に対する反抗だった。

看護師を証人にして、夕飯のお盆を激情のままひっくり返し、酷い人格を見せつけた私は、布団を被って丸くなった。

暗闇は私を守ってくれる。

家族から伝わってくるのは、憤りと苛立ち、そして、表向きの感情である戸惑いだけ。

看護師は加賀見先生から私の事情を聴いていたのだろう。

ひっくり返された食事を片付けながら、事務的な口調でアノ人達に帰る様に促した。

「お引き取り下さい。これ以上興奮させられるとこちらが困りますので。」

「私達は家族なんですよ!？」

――ドクリツ……。

心臓が嫌な言葉を聴き、悲鳴を上げる。

(助けて……、助けて――。)

「お引き取り下さい！！警備員を呼びますよ。」

恐怖で怯えていたその時、力強い牽制の声が響いた。

その力強い声は、私を必死に守ろうとしているのか、決して揺るがなかった。

幸い、私の病室は個室だった為、他の人達に迷惑をかける事はなかった。

看護師とアノ人達の互いに譲らぬ問答は、私の担当医の加賀見先生の登場によって、あっけなく終わりを迎えた。

加賀見先生は、布団を被っている私の頭を優しく撫で、静に微笑む気配がした。

「お嬢さんは明日には退院なさいます。そうですね、吉乃さん。」

その言葉には幾つもの含みがあった事は、その時は、私と加賀見先生、そして、その場にいた看護師にしか解らなかった。

♪ 4 距離（前書き）

暗いです。ひたすら暗いです。

♪ 4 距離

（神様、アナタは意地悪ですね……。）

退院した私を待っていたのは、以前の生活となら変わり映えない毎日と環境で、相変わらず私は一般社員で、あの人は社長で、たとえ会社ですれ違ったとしても、他人のフリ。

偶然二人つきりになっても、甘い雰囲気にはならない。

けど、今の私には皮肉だけれど、それが逆にありがたい。

きつと今以上の関係になってしまったら、私は死ぬのが怖くなる。

もう一度、愛などと言う愚かで醜悪な感情を知らない人形になってしまえば、辛くはない筈。

（大丈夫、大丈夫。私は大丈夫。愛なんて、知らない——。）

「吉乃、大丈夫か？　なんかおかしいぞ？」

鬱々と、自分の思考の淵に沈んでいた私は、心配して私に声をかけてきてくれた類の言葉に、「そんな事ないわよ」と、言いたかったのに、あまりの不安定さに、つい本音を口にしてしまっていた。

「ねえ、類。私達、なんで別れちゃったのかな……。恋人じゃなかったけど、付き合ってたのに、約束までしてたのにね……。」

——ごくりッ

類が息を呑むのが判った。

（ごめんね、類。）

人生をやり直せるのなら、やり直したい。

でも、ゲームじゃないんだから、それは叶わない。

悲しみと絶望にも似た、鬱々とした思考に沈んでいた私を、現実
に引き戻してくれたのは懐かしい香りだった。

「なら、なら、やり直すか？お前さえ望めば、いつだって俺はお前
を受け入れてやる余裕はある。俺だって、好きで別れた訳じゃない。
けどな、お前はアイツと別れられるのか？」

誰もいない休憩室。

ほのかに香る煙草の匂い。

たったそれだけなのに、私は昔を鮮明に思い出した。

初めてキスした日、映画を見に行った日、照れながら、二人っき
りで永遠を誓った日。

「るい、るいっ、類っ！！」

「吉乃、やめろ！！唇が切れるぞ。何かあったんだろ？ほら、話し
てみる。誰にも言わないから。」

唇を噛み、類に抱きつき我慢していた私を、類は呆気なく見破り、
優しく背中を撫でてくれた。

「昼休みもそろそろ終わっちゃうな。よし。久しぶりにあそこに飲みに行くか？」

類は意見を聴いているようで、実際は類の中では店に行く事は決定事項。

そんな些細な懐かしさも相まって、私は自然と頷き、約束のキスを交わした。

そこに、なんら罪悪感を感じていなかった。

仕事を定時に終わらせ、久しぶりに行った店は、あの頃と何も変わってなかった。

唯一変わったところと言えば、毎日口喧嘩をしていたオーナーと、バイトの女の子が結婚して、可愛い子供がいた事。

「あゝっ！！吉乃さん、久っしぶりいゝ！！元気だった？」

「おい、仕事しないんだったら帰れ。冬子^{とうし}」

「はっ？ざけんな。このクソ野郎。アタシは吉乃さんに逢いに来たんだよっ！！」

そう言いながら、頬を真っ赤に染める冬子ちゃん。

（素直じゃないけど、可愛い。）

吊り目で、私より6歳年下の冬子ちゃんは、喧嘩腰な口調で言い

返ししながら、大きなタッパーをカウンターテーブルに置いた。

多分、オーナーの為に作った夕飯だろう。

きつと、オーナーはなんだかんだ言いながら、それを食べると思う。

それは、私と智ではありえない関係。

「まあまあ、冬子ちゃん、落ち着いて？オーナーは冬子ちゃんが大切なよ、判ってあげて？」

「だな。コイツの愛情表現は、冬子ちゃん限定で無愛想なんだよ。愛されてるな？冬子ちゃん。」

私と類にフォローされた冬子ちゃんは、不平不満をぶつぶつ並べ立てながらも、満更でもなさそうに笑みを浮かべた。

——カラント・・・。

グラスの中の氷が、音を立て奏で溶け、自身の存在をアピールする。

その懸命な事さえ、今の私には欠落している。

「ところで吉乃さん、結婚したって聞いたんですけど、本当ですか？」

ざわり、と、何かが総毛だったような気がした。
多分、それは嫉妬だったのだと思う。

小さな子供を抱きながら、私の近況を聞いてくる冬子ちゃんを、ほんの少し妬ましかったけれど、私はゆっくりと頷き、自嘲の笑みを浮かべた。

「結婚はしたわ。けど、夫婦間の営みは無いわ。これは内緒だけど、時期を見て離婚するつもり。残された時間くらい、自由に使いたいじゃない？」

お酒の力を借り、口にした言葉は、涙に濡れていた。

（理由なんて、考えるまで無かったわね・・・。）

だからこそ、今の私にはお酒と類が必要だった。

「怖い、類。私、あと、1年位しか生きられないかもしれないんだって。なんで？ どうして私なの？」

スキルス胃癌の可能性があるだなんて、言えなかった。

あの家族とは自分から絶縁し、智とは会話すらしていない。

あの人には、私なんかより、キレイで健康な人が相応しい。

（子供も作れない私は、役立たずなの・・・。）

悲しい。

悔しい。

寂しい――。

いつから私はこんなにも弱くなってしまったのだろう。

「吉乃の悪い癖は、すぐに我慢するところだ。今日くらいは素直になれ。ほら、コレモ外して。」

自然な動作で、あの結婚指輪を外され、バレッタも外された。

たったそれだけ。

たったそれだけに、私は素直に泣く事が出来た。

肩を震わせ、想いのまま嗚咽を漏らし泣く私は、とても26歳の大人には見えなかっただろう。

ただ、ただ、悲しくて、寂しくて。

髪を優しく撫でくれる手が、あの人じゃない事も、少しだけ哀しくて。

「なあ、吉乃。お前はもう誰が一番好きか判ってるはずだ。だからそんなに辛いんだよ。仕方ないよな。好きなのに諦めなきゃなんないんだからさ。」

私を諭すかの様に話す類は、私が何を思っているのかを全て理解した上で、傍にいてくれる。

泣いて泣いて。

漸く涙が止まった時、時間は既に深夜の2時を過ぎていた。

「お。やっと泣き止んだな。もう大丈夫か？今日も仕事だし、そろそろ帰るか。」

ウィスキーグラスを片手に、穏やかに微笑む類を見上げ、私は涙を袖で拭って水を飲み干した。

少しだけ吐き気がしたけど、それは知らないフリをした。

「今日はありがとう、類。夏紀ちゃんにもお礼言っというて。」

「ああ、アイツも喜ぶよ。何しろ、俺と結婚する理由も吉乃が好きだからだしな。」

類の苦り切った愚痴を笑って聞き流し、私達はそこで別れた。

結婚指輪とバレッタを、昔の馴染みの店に忘れた事さえ気付かずに。

家に辿り着いた時、リビングから灯りが漏れていたけど、私は何も考えずに家に入り、そして驚いた。

リビングには、顔色の悪い智がいた。

ビールを飲んだのか、リビングにはビールの缶が散乱していた。

「まだ起きてたんですか？珍しいですね・・・。」

部屋中に散乱している缶を拾いながら、何気なく話し掛けた私は、違和感を感じて、指を見た。

（なに・・・？）

おかしい。

何かが足りない様な気がする。

そして、はっとし、疑問はすぐに解けた。

他ならぬあの人の言葉によって。

「お前こそ珍しいな、こんな時間まで。」

確かにいつもより大分遅い帰宅時間だった。

「指輪もしないで、誰といった事やら……。」

（そうよ、指輪よっ！！）

その言葉で、私は羽織っていた薄手のコートのポケットの中に手を入れたり、鞆の中を探ったりした。

鞆を探った時、密かに役所から貰って、既に記入済みの離婚届が鞆の中でグシャグシャに丸まってしまったけど、その時の私は、とにかく指輪を優先して、探していた。

そして、店に忘れた事を思い出した時、私は迷わなかった。

（確か、あの店はまだ開いてるはず……。）

拾い集めていた缶を放置し、私は真夜中の外へと飛び出して行った。

ごめんね。智・・・。

あの時、一度でもアナタの浮かべた辛そうな表情を見ていれば、私は間違った判断を下す様な事をしなかったと思う。

けど、その時の私は、指輪が心配で、まさかあの人が、智が、私を酷く切ない表情を浮かべて見つめている事も知らず、再び夜の街へと消えていった。

♪、5 離婚届（前書き）

色々変ってると思いますが、大筋は変わりませんので、変でしたら、こっそり（あくまで、優しくお願いします。）教えてください。

♪、5 離婚届

初めて智と逢った時、私は智の虞となり、同時に強い恋心を抱いたのだと、今なら素直に思える。

だからこそ、私は心に何重にも鍵を掛けた。

決して傷付かないように、期待しないように、と。

けれど、その心の鍵は既にボロボロに錆び、限界を迎え、朽ち果てる寸前だった。

ならば、残された道は、選ぶ道は一つしかなかった。

したくもない決断を、私は「あの人の為に」、と、下して、逃げた。

テーブルには、温かいご飯と、あの人が好きそうな料理。

好きそう、というのは、この三年間、ろくに会話すらしていなかったから、好きな食べ物や好みが判らないから。

同じ家に暮らしながら、会話らしい会話は殆どしなかった。

（これで夫婦だなんて・・・。）

それも今日で終わりだと思えば、少し寂しい。

その為に、今日は会社側に無理を言って休み、一日を掛けて私物

をまとめ上げ、私が住んでいた痕跡を綺麗に消した。

最後の仕上げに、私は少しだけ化粧をして、あの人を出迎える。

「お帰りなさい、智さん。」

出来る限りの笑顔を浮かべ、仕事から帰ってきたあの人を、智を迎えた。

おそらく結婚式以来の微笑みで、私は智を見上げていたのだろう。

「お仕事お疲れさまでした」

普段とは異なる私の態度に、智はじつくりと観察し、まるで壊れ物を扱うかのように抱きしめてくれた。

存在を確かめつつ、そして、決して離さないという意識が伝わってくるような、温かい抱擁。

その抱擁は、私が病気を知る前だったのなら、素直に受け入れられていた。

でも、もう私は知ってしまった。

（もう、過去には戻れない・・・。）

愚かにも、勝手に抱き返そうと動き出していた手を、ギリギリのところまで抑え、智の肩にかけ、やんわりと突き放す。

「吉乃・・・？」

ここで疑問を持たない人間なんて、誰もいない。
智だって気付いてる。
それでも私は辞めない。

「ねえ、智さん。私の事、少しだけでも愛してくれてる？」

（私は、狡い。）

憎んでくれてもいい。
いや、憎んでほしい。

解っていても、どうしてもこの手を使わずにはいられなかった私を。

（ごめんね、貴方は最初から優しかったのに。最初から最後まで・・・。）

身体を重ねなかったのは、私が初夜の日にフラッシュバックを起こして拒否したり、体調が優れなかったから。

それを私達の中に愛がないと勝手に決め付け、すり替えたのは他ならぬ私。

「智さん、離婚して下さい。」

この言葉は、私から貴方への、最初で最後の愛の言葉。

「愛してるなら、私と別れて下さい・・・。」

心の奥底では、別れたくないと泣き叫んではいるけど。

これは貴方の、智の為だから。

「私、好きな人ができたんです。お腹に、その人との子供もいます。彼となら、私、幸せになれるような気がするんです。」

極上ともいえる微笑みを、必死に作って、浮かべた。

その必死な一世一代の演技は見破られることも無く、相手を確実に傷付けた。

どれだけ時間が経った頃だろうか。

智が出した答えは、私を驚かせ、そして安堵もさせ、少しだけ狼狽させた。

「吉乃、別れるも何も、俺達は最初から夫婦でもない。だから勝手にしろ。」

（今、何て言ったの？最初から夫婦じゃなかった？）

「お前と夫婦だった事など一日たりともない。目障りだ。さっさと出て行け。」

苛烈な怒りと言葉。

その言葉が、声が、私を徐々に支配し、そして、最後に私の表情を完全に支配した。

心とは正反対の、とても穏やかで、幸せを掴んだような微笑みと口調で、私は別れの言葉を口にした。

「今日まで一緒にいて下さり、ありがとうございました。いつまでもお元気で。幸せになって下さい。」

頭を下げ、スタスタと寝室に荷物を取りに行き、一応、記入済みの離婚届をダイニングテーブルに置き、私は智に真実も行き先も告げずに、家を出た。

外は雨が降っていたけれど、それは今になって溢れ出した涙を隠すには、都合が良かった。

まるで、お風呂の浴槽が引っくり返された力のような、激しい雨に打たれながら歩き、私が辿り着いた場所は、つい先日、運び込まれたばかりの罹りつけの病院だった。

緊急搬送口兼入り口に、びしょ濡れ姿で現れた私を見つけるなり、その場に偶然居合わせた看護師さんは、私の傍まで走ってきた。

「菜々宮さん？こんな時間にどうされたんですか？」

（驚くのも、無理ないわよね・・・。）

ただでさえ、診察時間は過ぎているというのに、更に私は大きな鞆を持っている。

「まさか、入院しに来たの・・・？」

信じられない、と、その声は感情を伝えていた。

私はその言葉を肯定するようにゆっくりと頷き、決意を込めた、

しっかりとした声で返事をした。

「よろしくお願いします。もう、身体中が痛くて、我慢できないんです。」

大切なものは全て捨ててきた。

だから私はもう、何も怖くない・・・。

♪、 5 離婚届（後書き）

一端、区切ります。

次回、短いからです。

♪ 6 別れた姉の真実（前書き）

今回は利依さん視点です。

♪ 6 別れた姉の真実

私、綾橋^{あやはし} 利依^{りい}、27歳。

私には少し年の離れた兄さんがいる。

その兄さんの様子が、最近どこかおかしい。

急に実家に帰ってきたかと思えば、新築して3年しか経ってないマイホームを売ったり、（これはお父様が内々に買い取った。）得意でもないお酒に手を出してみたり。

そして一番おかしいのは、あの義姉さんを手放した事。

あらゆる手段や伝手を駆使して結婚したのに、どうして離婚したのだろう。

兄さんは義姉さんが浮気して、別れて欲しいと言われたから、別れてやったと言っているけど。

だけどね？

（そんな事、信じられる訳ないでしょ！？）

確かに兄さんは無愛想で誤解されやすい人だけど、本当はとても繊細で孤独で、誰よりも脆い人。

小さな頃から宗一^{そういち}兄さんと常に比べられ、綾橋の帝王学を叩き込まれ、完璧を求められてきた兄さん。

そんな兄さんに近づいてくる人達は、みんな綾橋の財産と名前、兄さんの容姿だけが目的だった。

兄さんもそれを知っていたから、ある時期から女性とは付き合いはしても、結婚だけは絶対しようとしなかった。

その兄さんが3年前、日本に帰国して少したった頃、初めて私達家族に結婚しても良いと、一人の女性の写真を見せてくれた。

泣き黒子が印象的な、大人しく、儚く、穏やかに微笑む可愛い女性^トだった。

それが今回浮気して、兄さんの所から去っていった義姉さん、菜々宮 吉乃さん。

義姉さんは私より一つ年下だったけど、兄さんを良く支えてくれていた。

お父様やお母様さえ知らない、食の好みも完全に把握していた。兄さんも義姉さんを本当に愛してた。

兄さんと義姉さんは、私の理想の夫婦像だった。

（なのに、どうして？ どうしてなの？ 義姉さん。）

兄さんが急に家に帰ってきた日、兄さんは離婚届を手にかけていた。

そしてその夜、私達家族は驚きのあまり、氷の様に固まってしまった。

あの、何が起きようとも決して表情を崩さない、見せない兄さん、

一部の人達からは冷酷とさえ言われている兄さんが、肩を震わせ、涙を流し、私達家族の前で泣いたのだから。

（義姉さん、どうしてなの？兄さんのどこが悪かったの？）

兄さんの事で、これ程驚いたのは、この時が初めてだった。

兄さんの初恋は、間違いなく義姉さんである、吉乃さん。

兄さんは、その初恋の相手である義姉さんから離婚届を突き付けられた。

（辛いわよね・・・、これは。泣くしかないかも。）

でも、驚くのはまだ早かった。

兄さんも変な所で人が良いのか、単純なのか、夢見がちなのか、籍も入れてなかったと、これまた爆弾発言をしてくれた。

兄さん曰く、

『本当に信頼してもらえ、許して貰えたら、籍を入れるつもりだった』

（兄さん、今時、そんな人何処にもいないから！！）

その日から、兄さんの感情や表情から「笑顔」や、「微笑み」、「喜び」は消え、昔の蠟人形みたいな、冷たい、温もりの欠片も感

じられない兄さんになってしまった。

*

私がある日、その病院にいたのは、不眠症になってしまった兄さんの為に、仕事で忙しい兄さんに頼まれ、代わりに眠剤を貰いに来っていたからだった。

だけど、私はその日の偶然を、後になって深く感謝した。

（どんだけ待たせんのよ！！予約時間過ぎちゃってるじゃない！！）

苛々と診察室の待合室で待っていた私の耳に入ってきたのは、ここには居るはずのない人の声と名前。

「菜々宮さん、本当にご家族には連絡できないんですか？これは貴女の命にかかわる重要な事なんですよ？」

「…………、良いんです。私には家族なんていませんから。」

「菜々宮さんっ！！」

（ウソ、でしょ？どうして義姉さんが・・・？）

兄さんは義姉さんが浮気して、出っ行って行ったと言っていた。

なのに、どうしてここにその『義姉さん』がいて、声がするのだろうか。

私が何も出来ないでいる間にも、義姉さんの苦しそうな声は響い

ていた。

（義姉さんが消えて、兄さんと別れて今日で二週間。）

「もう、放っておいて下さい。私の命は私のだけのもの。私が死んだって、誰も悲しんだりしないわ!!」

廊下にまで良く響く声は、どんなに願っても、間違いなく義姉さんの、弱々しく、悲しい色が混ざり合ったものだった。

「まただわ。」

「ええ。でも、あの子も可哀想な子ね。よりによって進行性の癌だなんて……」

――もう、手術も手遅れなんですって。

勝手な事を言わないで欲しかった。

（義姉さんも義姉さんよ!!）

ヒソヒソと囁き合う他の人達の言葉が、何よりも義姉さんの言葉が、私の胸を深く抉り、斬りつけ、傷付けた。

（迷ってる暇なんて、迷う必要なんて、ないわ。）

私は兄さんの眠剤も受け取らず、急いで家へ帰った。

今ならまだ間に合うかもしれない。

それは根拠も理由もない、ただの勘だった。
けれど、私はその勘を、不思議と外れる事がないと、確信していた。

♪ 7 零れた本音と、温もり

（今日で、入院してから一ヶ月。）

もう、世間では真夏を迎えるべく、梅雨入りしていて、日本独特の蒸し暑い気候に晒され、それでもこの初夏を楽しんでいる。

（だけど、私は。）

この白くも狭き、快適な牢獄に、望んで収まっている。

病院側には頼み込んで、面会謝絶にしてもらっているから、お見舞いに来る人達はいない。

いや、入院している事さえ、誰も知らないし、私も知らせてはいない。

私が入院している事を知っているのは、病院側の先生と、どんな因果があるのか、智の従弟であり、私が個人的に雇った弁護士きの田きた 紘一こういち、28歳だけ。

彼は優秀で、依頼人が私であるという事を知ると、すぐに動いてくれた。

そんな彼のおかげで、私の退職手続きは、彼を通して迅速に全てやり遂げられ、受理された。

それで、今の私に残されているのは、『菜々宮 吉乃』という名前と、性質の悪い病と、少ないと言えない預貯金だけ。

もし、生き長らえる事が出来るのなら、お金の使い道はたくさん

あるだろう。けど、死ぬのなら、残したい相手がいる。

受け取って貰えるかは分からないけど、受け取って欲しいと思うのは、私の我儘だろうか。

（虫が良すぎるかしら、ね？）

ふ、と、微かな衣擦れの音に、そんな事を考えつつ、夢と現の間を気持ち良く彷徨っていた私は、目を開いて、そこにいるはずのない人達の姿を見て、驚いた。

（どうして、いるの？）

「吉乃さんっ！！」

驚きつつも、生きる気力も、努力する心も失った私を見て、ギュッと、勢いよく、すっかり痩せ細り、女としての魅力のなくなった私の身体に抱きついてきたのは、あのお馴染みの店の【club・シークエンス】の冬子ちゃんだった。

その冬子ちゃんを呆れつつも、温かく見守っているのは、彼女と結婚したクラブのオーナー。

冬子ちゃんのいつもと変わらぬ態度と雰囲気、驚きと戸惑いに揺れていた私は、再び「吉乃さんっ」と、呼ばれた事で、漸くこれが現実なのだと思え入れられた。

「吉乃さんはなんで私達がつて、思ってるんでしょ。答えは簡単。私のお姉ちゃんが吉乃さんの担当ナースだからだよ。」

私の担当ナースは、主に二人。

女性は神向^{しんこう} 紗千^{さち}さん、男性は高江^{たかえ} 槇^{まき}さん。

二人とも、とても私に親身に接してくれている。

それで冬子ちゃんのお姉ちゃんが、私の担当ナースだというのなら、神向さんしかない。

「神向さんが？」

私の質問に冬子ちゃんは頷いた。

だけど、冬子ちゃんは神向さんと全く似ていない。

「似てないと思ってるんでしょ。当たり前だよ。私は親父の愛人の子供だし。」

冬子ちゃんは疑問に思って当然。とばかりに、私の疑問をザツクリと解決し、私の身体を解放し、表情を改めた。

その冬子ちゃんのいつもと違う雰囲気、私は嫌な予感がした。

（やめて、お願いだから、やめて。そっとしておいて。）

――やっと全部、諦められると思ったのに。

そして、その私の嫌な予想は的中した。

「吉乃さん、なんで何も言ってくれなかったんですか？そんなに私達の事、信頼できないんですか？はつきり言うと、時々、吉乃さんという虚しかったんですね、まるで私達が存在してないように

無視されて」

——ドクリツ……。

心臓が、強く、脈を打ち始める。

（やめて、それ以上、言わないで。）

私の願いは天に通じる事無く、冬子ちゃんはペラペラと話し続ける。

「知ってます？ そーゆーの、独り善がりって、ゆーんですよ？ あ、あとは自己陶醉とか。とにかく、自分だけが不幸だと決めつけて、自分が作り上げたその架空の世界で、それに酔っちゃうんです」

冬子ちゃんの言葉が痛かった。

冬子ちゃんの言葉は、否応なく私の心の扉を蹴り、殴りつけてくる。

現実から目を逸らすな。

きちんと立ち向かえ。と。

けれど人は、時としてそれを酷く厭う。

そして、私の心の番人は、扉を抉じ開けようとした無頼者を、凍てついた態度と口調で追い払う事を選んだ。

（何も知らないお前に、何が判る！！）

心を、耳を、感じ得る全ての感覚を閉ざし、抵抗する。

「何か言ったらどうですか？」

冬子ちゃんの目には、憤りの炎が爛々と宿っていて、私を強い眼差しで貫いていた。

本気で心配してくれているのが判るのに、それが逆に嫌で、憎くて、私の口から零れるのは、鬱屈した拒絶の言葉だけだった。

「誰が、心配してくれだなんて、言いました？」

自分でも、よくここまで怖い声が出せるな、と思うくらいの、暖れた、低く冷たい声は、冬子ちゃんの言葉の前には無力にも等しかった。

その証拠に、冬子ちゃんは鼻笑いを漏らすなり、激しい口火を切った。

「は？ 心配？ 笑わせんな。アタシはアンタなんかの心配なんざしねーよ。アタシは姉ちゃんを困らせてるアンタがムカつくんだよ。」

普段なら気付く、冬子ちゃんの口調の変化に、私は気付けなかった。

そこまで、私は攻め込まれ、心の余裕がなかった。

私はあからさまな冬子ちゃんの挑発に、まんまと嵌められていた。

目の前で、でかい態度で椅子に座り、挑発してくる人が憎くて、

妬ましくて仕方がない。

「・・・ったら、だったら早く帰ればいいじゃない!! こんな、もうすぐ死ぬかもしれない私なんか放っておいて!!」

（そうよ、私は誰も来て欲しくなかった!!）

私の言葉に、冬子ちゃんのキレイに整えられた眉が、ピクリ、と、微かに動いたことも私は見逃した。

「誰も私なんか死んだって、悲しまないわ!!」

「え・・・?死ぬって、どういう事・・・?」

判ってるくせに、と、私は晒った。

「白々しい。神向さんから聞いたんでしょ? 私が進行性の胃癌に侵されてるかもしれないって!! 余命も宣告されて、一年位しかないって」

私の激しい剣幕に、わらわらと人が集まってくる。

その中には、加賀見先生もいた。

「なにも知らない癖に、私がどんな思いでいたか解る!？」

脳裏に走馬灯のように駆けていくのは、女として、そして妻としての屈辱に満ちた耐え難い日々の数々。

心を空にして、愛さないように自分自身に暗示を掛け続け、騙しながら生活してきた日々。

「目の前でキスされた事はある？　ないわよね？　ない人には判らない感情でしょうね。いつかは、いつかは私を見てくれるんじゃないかって、私だけを選んで、見てくれるんじゃないかって。何度も何度も期待しては裏切られてっ……。」

ゲホっ、ゲホっ、と、咳をした瞬間、口の中に広がった鉄の味に、私は愕然とした。

ガクガクと、小刻みに震えだした自分の身体に、私は発狂しそうになった。

自分で吐いた血が、信じられない。

（怖い、コワイ、こわい。）

「吉乃さん……？」

すっかり困惑した様子の冬子ちゃんが、私の背中を擦ろうとした。だけど、私はそれを拒んだ。

「なんで私なのよ！！　なんでこんなに苦しいのよ！！　死にたくないのに、本当は愛してる好きだって言いたいのに、私だけだって言っ
て欲しいのに、どうして私なのよ！！」

どうにもならないもどかしさから、錯乱しかけた私は、ついに、言ってはならない言葉を口にしてしまった。

「疲れた……、もう、死にたい。こんなに辛いのは耐えられない……。もう、何もかもが、嫌……。」「

それは生きる事を諦めた事を意味する、負の感情、負の言葉。

（死ねば、楽になれる？）

出来る事ならば、元気になって、全てをやり直したい。

けど。

クスクスと、暗く、歪んだ笑い方をする私は、もう尋常な人間には見えなかっただろう。

実際、私には誰も近付こうとはしなかった。

冬子ちゃんさえ、私に声をかけるのを躊躇っていた。

そう・・・。

たった一人、あの人を除いては・・・。

ギュッと、いきなり抱きしめられた私は、暫く自分の身に何が起きたのか、理解出来なかった。

理解できたのは、抱きしめてくれた人の、声、香り、そして、何よりも求めていた愛しいヒトの温もりが伝わってきてから。

（うそ・・・、うそ・・・っ）

「吉乃・・・、もう我慢しなくて良い。もう、全部判ったから。だからそんなに悲しそうに、全て諦めたように泣くな。・・・、俺が

いるから。」

——守るから。

と、穏やかに言われた言葉。

抱きしめられ、感じた温もりは、私が諦めていた人のもの。

「吉乃・・・？」

（どうしよう……。嬉しい……。）

あまりにも嬉しくて、信じられなくて、夢じゃないか確かめたいのに、私の身体は智から中々離れなかった。

ついさっきまで死にたいと願っていたのに、なんて幸せなのだろう。

（夢なら、覚めないで……。）

そう願い、思った瞬間、私は猛烈な眠気に襲われ、智に抱きついて腕から、力が抜けた。

「吉乃・・・？ 吉乃！！」

智の悲痛な顔が見える。

（ああ、そんな顔しないで？ 疲れて、少し寝るだけだから。）

ゆっくりと沈んでいく意識の中、私は、かろうじて微笑んだ。

「智……、大好きっ……。」

これが限界だった。

グラッと、頭から倒れた私は、智の心配をよそに、それから三日三晩、昏々と眠り続けた。

その間見た夢は、最高に幸せで、涙が枯れるほど嬉しいモノだった。

♪、7 零れた本音と、温もり（後書き）

次回に続く。

♪、 8 名前？（前書き）

これからどんどんありえない展開に転んでいきますが、どうか批判はなしの方向でお願いします。

♪ 8 名前？

夢なら永遠に醒めないで欲しい、と、確かに私は初めて、心の底から誰かに願ったかもしれないけど。

窓からきらきらと朝日が降り注ぎ、その朝日の眩しさで眼裏を刺激され、仕方なく嫌々ゆっくりと瞼を押し上げれば、まず最初に、ここ一ヶ月間もの間にすっかり見慣れた、薄いモスグリーン色の天井が目に入ってきた。

私に与えられている病室は個室で、基本的にモスグリーンと、水色、それからオレンジ色で統一されている。

天井はもちろんのこと、壁紙やカーテンも薄いモスグリーン色で、コップや洗面具は水色、パジャマや差し入れの本のブックカバーや花は、少しでも私の気分が明るくなるようにと、全てオレンジ色系の暖色。

これらの身の回りを整えてくれたのは、紘人さん（お世話になっているから、これからは『さん』づけにする。）と、看護師の二人。

何回か眼が慣れるまで瞬きを繰り返し、枕の上で首を右に向け、目覚まし時計で時間を確認しようとした時、私の眼に飛び込んできた光景に、私は一瞬、ここが病院である事を忘れた。

私が見たものは、智の寝顔だった。

しかも髪は乱れ、寝ている時でも色気は無意識に放っている。

ここで言っておきたいのは、私と智は新婚旅行さえ行っていない
仮初の夫婦だったという事。

（何か、寝ている時も色気があるって・・・、）

寝起き、しかも今は病身の身である私には、衝撃的すぎて、そして、心臓に悪くて、目の毒にも等しいものだった。

そのせいで、目覚めたばかりだというのに、心拍が上がり、暫く何も出来なかった。

出来たのは、穴が出来るんじゃないかと思われるほど、その寝顔を見つめ、隅々観察する事だけ。

そうして、心ゆくまで観察した私は、寝乱れていた智の髪を直そうとして、初めて自分の手が、大きな智の手に、包み込むように握られている事に気づき、面映ゆうくなった。

智の手は、意外にも小さな傷や火傷の痕があり、とても社長として君臨している人の手とは思えなかった。

そこで思い出したのは、私が入社した時の社長が、綾橋のお義父様だったという事。

（私、貴方の事、何も知らないのね・・・。）

改めて、私達は何の努力もしていなかった事を思い知らされた。

そうして考え込んでいる間にも、時間は刻まれている。

眠りが浅いのか、智は私が少し身動きしただけで、鋭くも魅力的

な瞳を開いた。

（写真でも撮っておけば良かった・・・。）

ついつい、唇を尖らせてしまったのは、そんな良からぬ事を考えていたから。別に不機嫌だった訳ではない。

ただもう少し智の眠りが深く、手元にカメラがあったら、と、思っていただけ。

智は、そんな私の不貞腐れた顔がお気に召さなかったのか、私の手を離れたかと思いきや、ベットの柵を外し、枕と頭の間に腕を入れ、覆い被さるように私の唇を、自分の唇で塞いできた。

何度も言うが、今は寝起きで、しかも本来は清々しい筈の朝である・・・。

ここ最近は何雨空だった空も、今日は久しぶりの青空が広がっているというのに。

智は私がどこか冷静だったのを、感知したのだろう。

徐々に深く執拗になってくるキスに、私はすぐに酸欠状態に陥り、掴まれていなかった左手で智の背中を何度もバシバシと強く叩き、それで解放してもらえた。

唇が離れた時、智が自分の唇を舐めたのを見た瞬間、猛烈に恥ずかしかった。

顔から火が出るんじゃないかと、本気で思ったし、顔が熱かった。それを誤魔化すため、私は身体をベットのの上に起こし、何度か深

呼吸を繰り返し、本音混じりに呟いた。

「……………殺されるかと思った。」

目覚めておそらく一時間もしない内に、今度こそ死神に永遠に目を醒ませない世界へと、連れて行かれるのではないかと思った。

それは嫌だ。

いくらなんでもそれは嫌すぎるし、早すぎる。

ブチブチ文句を並び立てていた私を見ながら、智はさっきまで自分が座っていたパイプ椅子に座り直すと、足を自然に組んだ。

そして。

「何か言う事はないか？ 吉乃。」

真っ平らに近い胸元を撫でながら、羞恥心や、その他の感情を整理していた私は、智のその言葉の意味が理解できなかった。

少し考えてから、そう言えばと、思い出した。

忘れてはいたが、それでも智は古くは公家の流れを汲む、名家の跡取り息子。

世が世なら、貴族である。

なので挨拶や礼儀には、殊の外煩いし、厳しい。

さて、ここで私はなんと返した方が良いのだろう。

（呼び捨ては不味いわよね。かといって、今更、智さん、なんて呼

べないし、夫婦でもなかったんし……。そうか! !)

「おはようございます、綾橋社長」

これが正解だろうと、胸を張って答えた私に、智は「違う」と、小さく返した。

何が違うのだろう。

智は何が言いたいのだろう。

(なんなの? 違うって何?)

モヤモヤしていた私の注意を惹くように、智は私の顎を長い指で拘束し、正面を向け、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「心配したんだぞ、なんで本当の事を言わなかった……。俺だけじゃない、利依も、親父も、母さんも、みんな……。」

そつと顎を解放され、智の手はそのまま私の髪を撫で、額にかか
る髪をかき上げ、そこに小さなキスが落ちてきた。

それはまるで、小さな子に、親が宥めるような優しいものだった。

♪、 8 名前？（後書き）

事情により、一端区切ります。

♪、 9 名前？（前書き）

まだまだ先は長い・・・です。

少し原作のモノより書き足したり、書き換えてるので、原作を読める方々には申し訳ありません（原作といっても、作者が書いたものです。）

♪、9 名前？

——誰かに頭を撫でてもらうのは、類以外では、初めてだった。

ほんわかと、心が暖かくなって、無意識の内に口元が緩みかけていた私は、そこでふと、一つの疑問にぶち当たった。

三日三晩眠っていたせいで、頭を少し傾げた時、凝り固まった筋肉がゴツリツと、凄い音を立てたが、そんなことは構ってられない。

私は目覚めてから、朝に相応しくないキスを智にされた。

その智が、なぜ、どうしてここにいるのか。

（あれは、夢じゃなくて現実だったの？）

人は基本的に、自分の都合に悪い事を忘却したり、夢だと思いこむ事がある事は、知識としては知っていて、それが自分に起こる事はないだろうと、私は今まで漠然と構えていた。

しかし、現実はどうそう甘くはなかった。

浮かんできた答えと云うべきか、自分で導き出した答えに、私は自分の顔から炎が出るのではないかというくらい動揺し、とりあえず、先程から私の返事を黙って待っている智にすべく、心持、作った声と顔で謝罪した。

「心配をお掛けしまして、申し訳ありませんでした。後日、お礼に上がります。」

あくまで、生きていたらの話である。

智は私のそんなシラツとした態度と、言葉の何処がおかしいのか、ククク、と、喉の奥で笑いをもらし、乱れた髪を左手で掻き上げた。

その際、ワイシャツの袖口部分を止めていたカフスが、太陽の光を反射し、きらりと光りを弾き、紅く輝いた。

私とそのカフスに目を捕られていると、智はそのカフスを外しながら、愉快そうに言葉を紡いだ。

「随分、他人行儀だな……。覚えてるんだろう？ 吉乃。」

——ミシッ。

ベットが軋む音がし、いつの間にかまたベットの上で、耳元まで迫られていた私は、両手で顔を隠した。

左腕には点滴が挿され、腕を曲げると少し痛かったけど、そんな事は構ってられなかった。

なのに智は、そんな私を、まるで鼠を追い込んだ猫のように、からかう様に耳に息を吹きかけながら、早く名前を呼べと、催促する。

「ほら、遠慮するな……。呼んでみる、吉乃。」

安い少女漫画や、生チョコい三文小説でしか見聞きしたことのない展開に、誰が抵抗できようか。

いや、できないはずだ。

（お願いだから、そんなに近づかないでえ〜！！）

色気満載の声色で、少なからず好意を抱いている相手から、自分たちの二人以外、誰もいないところで、迫られている所を想像してみたい。

誰もが陥るであろう症状に、私も敢無く嵌った。。

熱湯で茹でられたタコの如く、首から上が全て真っ赤に染まった私は、降伏の証に言葉を発した。

「さと・・・し・・・っ？」

最後の最後で、末尾に疑問符を付けたのは、せめてもの抵抗である。

いくら普段は内心で呼び捨てにしても、実際に呼ぶとは大違いである。

（名前を呼ぶのが、こんなに恥ずかしいなんて・・・ッ）

ドクドクと早鐘を打つ心臓を宥めつつ、両手を顔から離れた私に待っていたのは、初めてみる智の表情だった。

智は蕩けんばかりの、凄絶な甘さと妖艶さを含んだ、美しい微笑みを浮かべていた。

人は誘惑には勝てない、ダメな生き物だと、私はこの短い時間の内に実感し、それを身をもって体験した。

私は甘い砂糖に誘われた蟻のように、智に全神経を向けた。

言葉なく絡み合う視線。

それに伴い、病室には相応しくない、甘い空気と雰囲気が漂う。

その雰囲気促されるまま、私は瞳を閉じ、智を受け入れ、智の後頭部に腕を回した。

重なっては離れ、離れては重なり、それが何度か繰り返されたあと、智は私の耳をペロリと舐めた。

耳を舐められた私は、その淫靡な甘さに、身体がピクリと反応してしまった。

（か、身体が熱い、恥ずかしい。）

しかし、誰もいなくて良かった、と、安堵のため息を吐こうとした時、その声はした。

「あら、目が覚めたの？」

ひゅっと、智が息を呑むのが判った。

きつと、彼も知らなかったのだろう。その証拠に、少しだけ、声が低い。

「・・・――、母さん、いつからそこにいたんですか？」

「なあゝに？ 私がいちゃあ悪かった？ さっきからよ？」

ふふふと、妖しげに、明るく笑いながら姿を現したのは、智の母親であり、私の憧れの女性でもある、綾橋 さくら さんだった。

♪、 9 名前？（後書き）

姑のさくら、登場です。

続き、投稿した方がいいですか？

まで、次回。

♪、**10 姑・さくらの策略（前書き）**

大分、細切れで改題しています（笑）

♪、10 姑・さくらの策略

綾橋のお義母様こと、綾橋 さくらさんは、50代とは思えない若々しさと、スタイル、美貌を持つ人。そのせいか、さくらさんと一緒に街を歩けば、ほぼ百パーセントの確率で声を掛けられている。

ベツトを覆う、薄い緑色のカーテンを手早くまとめたさくらさんは、顔を綻ばせ、私に歩み寄ってきた。

「さあ、吉乃さん？顔を良く見せて？」

いつも笑顔を絶やさないさくらさんは、それと同時に非常にマイペースで、人がどんな状況にしようが、遠慮は一切ない。

アレを見られ、聴かれていたんじゃないんだろうかと、モヤモヤ考えていた私は、それでも心配と迷惑を掛けてしまったのだし、と思いなおし、ゆっくりと伏せていた顔を上げた。

さくらさんは満足そうに微笑みながらも、私の頬に手を伸ばし、柔らかな手つきで私の顔を挟み込むように包んだ。

そして――。

「あああら、すっかり痩せちゃって。どうせウチのバカ息子のせいでしょうけど。ごめんなさいね、吉乃さん。」

頬にあったはずの手が、あっちをペタペタ、こっちをペタペタ、私の女として魅力のない身体のあるところを撫で擦り、

触れてくるさくらは、同性とはいえ、とても智の母親とは思えないほど躊躇いもなく、コミュニケーション能力が高いと思った。

「痛むところはない？ 具合はどう？ 吉乃さん、貴女には綾橋の女として、この綾橋の家を継ぐ子供を産んでもらわなければならないのだから、病気には負けてはいられないわよ？」

——綾橋の女。

その言葉を聞いた瞬間、私の心が急激に冷えていくのが分かった。

（私は、私だわ……。誰のモノではないのよ）

暗く淀み始めた私をそのままに、さくらは尚も熱く熱弁を続ける。

「だから、絶対病気になるか負けないで、一緒にお家に帰りましょう？ 智さんの妻は貴女しかないのだから。」

（智の妻は私しかない？）

意味が判らない。

だいたい、私と智は夫婦でさえなかったのに、今更そんな事を言われてもどうにもならない。

智にこういう事だ、という意見あいの込めた視線を向ければ、智はあやふやに笑って誤魔化した。

確かさくらは、綾橋の女としてと、言った。
でも。

(なんで、こんなに胸が痛むの?)

これが最善だと思って行動し、決行したあの日。

今更胸が痛むなんて、図々しいし、女々しい。そして何より醜い。

徐々に自己嫌悪に陥り、暗くなり、俯いていく私に、智とさくらさんは私に言葉を掛ける。

「吉乃さん? どうしたの?」

「吉乃、顔を上げろ。」

そんな事を言われても、顔は中々上げられない。

手前がってな感情だけれど、情けなくて、悲しくて、切なくて、顔なんか上げられないし、こんな顔なんか見せられない。

私の心の中で、ぐちゃぐちゃに鬩ぎ合う感情と理性。

中々顔を上げられないでいると、さくらさんは持って来た鞆の中から大きな花瓶を取り出し、それをベットから少し離れた所にあるテーブルに置いた。

花瓶は艶やかな白磁に、紅い染料で格子模様が引かれている質素なものだった。

「そうそう、言い忘れていたわ。」

さくらさんは機嫌が良いのか、鼻歌を歌いながら、まるでそれが当然だという様にけろりと言った。

「吉乃さんと智さんの婚姻届だけど、提出しておいたからね。これで名実ともに吉乃さんは私の可愛い娘よ。ああ、早く可愛い孫の顔が見たいわ♪最低、三人は欲しいわねえ。」

「・・・!!」

驚きと孫発言に何も言えず、漸く上げた顔をさくらさんの方へ向ければ、さくらさんはウキウキと向日葵の造花を花瓶に生けていた。

（なんでそんなに明るくて、楽しそうなの・・・。）

こっちは混乱してるのに・・・、と、恨みそうになった時、さくらさんはくると振り返り、にやり、と黒い微笑みを浮かべ、智を見た。

さくらさんはその黒い微笑みを湛えたまま、黄色いクマのぬいぐるみを私のベットのサイドテーブルに置き、温かいお湯の入った洗面器と、タオルを何本か用意した。

さくらさんは手早くタオルを洗面器のお湯に浸して搾り、有無を言わさぬ勢いで迫ってきた。

「さあ、吉乃さん身体を拭くから、パパッと服を脱いで頂戴？」

言う事とやる事が人と違う。

それもさくらさんの特徴だった。

さくらさんは私が着ていた病衣の紐を解き、容赦なく上着を剥ぐように脱がし、慣れた手つきで絞ったタオルで身体を拭いていく。

抵抗むなしく、剥かれた私は背中を丸めるしかなかった。その首もとで揺れる、小さな指輪。

その指輪を見たさくらさんは、更に笑みを深くした。

「まあまあ、吉乃さんったらなんて可愛いのかしら。それ、智さんが吉乃さんにあげた指輪でしょ？」

ちらりと、意地悪気に智を見て、ふふふと、笑いを漏らす。

「それはね、実は私が智さんに頼まれて、デザインから装飾まで全て手掛けた、唯一無二の特別なお嫁さんの為のモノなの。ね？智さん。」

そこで話を振られた智とバッチリと視線が合い、私は体温がドンドン上がるのが判った。

「うえ・・・？」

「あら、どうしたの？あなた達、顔色が真っ赤に染まっていますよ？」

さくらさんは策士だ。そうに違いない。

私と智が真っ赤になるのは当然だ。

私達は身体を重ねるどころか、お互いに明るい場所で肌を晒した事もないのだから。

さくらさんは冗談半分だったのだろうか、私と智がなにも反応しない所を見て、口元にタオルを持った手を持っていき、大袈裟に嘆いてみせた。

「まさかとは思うけど、智さん、貴方、まさか、まさか・・・、なの？」

さくらさんが言いたい事は、痛いほどわかる。

仮にも2・3年近くも一緒に男女が住んでいて、そういう関係になってないのは、世間一般的にはありえない。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

無言が肯定だと取ったのだろう。

さくらさんは急に両手をパンと叩き合わせ、にっこり微笑んだ。

「智さん、私、吉乃さんの病状を先生から聞いてくるから、後はヨロシクね？——全身、拭いてあげるのよ？」

ハイテンションでタオルを智に渡し、最後は智を焚きつけるように言い、私に意味の判らない「頑張って」という言葉を残し、部屋を出って言った。

（お義母様、何を頑張れと仰るのですか！！）

さくらさんが出ていった病室は、妙な沈黙が流れた。

でも、その沈黙は長くは続かなかった。

ふうーッ、と、長い溜息を吐いた智は、着ていたジャケットを脱ぎ、腕まくりをした。

カフスは既に外され、サイドテーブルに置いてあったから、行動も早かった。

洗面器に張られたお湯にタオルを浸し、固く絞り、腕を優しく拭いてくれる。

「その指輪、持ってたんだな。」

「え、ええ。」

「どうりでな……。探してもなかったはずだ……。」

静かな病室、静かな口調での会話。
でもそれが心地よかった。

この指輪は初めて貰ったものだった。

結婚指輪はダメでも、これなら赦されるだろうと、あの日、こっそりと荷物の中に忍び込ませたのは、私の微かな未練と醜い感情。

素直になれなくて、だけどこれだけとはと。

ちっとも豪華ではないけれど、単なるチューリップの華が繊細に彫られた細い指輪だけど。

「初めて逢った時に貰ったものだから・・・。」

「・・・、吉乃の好みも知らない時に贈ったモノだからな。だから、気に入って貰えるか判らなくて、苦勞もした。」

智曰く、記念日には私に何かを贈りたいと思っていきたいらしい。

けど、私が何も言わず、会話もせず、話し掛ける事も出来ず、花を贈る事しか出来なかったらしい。

そう言われてみれば、良く花束を持って帰ってきていた。

（なんだ・・・。）

今思えば、それが不器用な智らしい愛情だと、素直に理解出来、受け取れる。

クスクスと笑っていると、プチンと、ブラジャーのフロントホックが外された音がした。

「吉乃は着痩せするタイプだったんだな。知らなかった。」

（なっ！！）

淡々と身体を拭いていく智は、さらりとそんな事を言う。

私は平静を装いながら、言い返した。

「き、着痩せって。それほど大きくは・・・。たったのBだし・・・。」

「胸がデカイだけの女は好みじゃない。」

こんな状況で交わす会話は、なんだかとても気恥かしい。

恥ずかしくて顔を伏せてしまった私は、その痛みに吃驚した。

首筋、項、右耳の後ろにチクリと走る痛み。

思わず、吐息が漏れる。

「んあっ・・・、イア・・・、フう。」

その痛みは、決して痛いだけじゃない、甘い痛み。

耳元で濡れた音がし、左耳を甘噛みされた途端、私の身体は素直になっていた。

「ふぁ・・・っ、あっ・・・っ。」

クスリ、と、愉悦に染まった智の笑い声。

「吉乃は本当に耳が弱いな。」

撫でられている背中が、腹部が、むず痒くて熱い様な気がするの
は、きっと気のせいじゃない。

ゾクゾクしたり、疼いたりするのも、触れている人が好きな相手
だから。

ふるふると快感に震えていた私は、自分でも気付かない内に、快
感に蕩けた表情を浮かべていた。

それに気付いたのは、智の苦笑交じりの言葉が聞こえたから。

「今は誘うな。ほら、新しい着替えた。」

そっちが仕掛けてきたクセにと、潤んだ瞳で智を睨みながら、着替えを受け取り、身に着けた。

火照る身体に、新しい病衣はさらっとしていて心地よかった。

人心地つき、気を緩めていた私は、智の手が下半身に伸びている事に気付かなかった。

気付いた時には、どうやったのか、ズボンが脱がされ、温かいタオルで拭かれていた。

「や、恥ずかしい・・・っ。ヤメテ・・・っ」

脚を拭かれる事が、こんなに恥ずかしい事とは思わなかったし、知らなかった。

（今なら、恥ずかしさで死ぬる。）

今、私の脚を持ち上げ、拭いている手は、普段は多くの従業員とその家族の生活を支え、守る為に、パソコンや万年筆、何ヶ国もの色々な新聞のページを括っているモノ。

ふいに、その手が止まり、僅かに震えた。

「吉乃、手術で治るとしたら、お前は受けてくれるか・・・？」

不安に彩られた智の声音に、私は何も言えなかった。

「どうして、お前だったんだろうな、吉乃・・・。」

その小さな呟きを聞いて、私は決意した筈だった。

二度と貴方を悲しませたり、傷つけたり、一人にしないと。
なのに、それを私は破ってしまった。

ごめんね、智。

♪、10 姑・さくらの策略（後書き）

ギリ、18禁じゃ、ないですよね？

ああ、むず痒かった。

こんなシーンは、二度とごめんだ。

♪、**11 治癒？（前書き）**

この回から2章になります。

♪ 11 治癒？

「貴女は助かりますよ、手術さえ受けければね。」

雨が霧のように降る、六月の中旬のとある日。

私はここ1週間の間に、もはや日課に成りつつあった、加賀見先生と智と私の三人でのメンタルケアを含めた面談を終えた後、「病気の事で話があるから。」と、内科の担当の先生に、病室に戻る為にゆっくりと歩いている所を呼び止められた。

その時、私は病室まであと500Mという所にいた。

入院してからの私は、何も気力が湧くはずもなく、動く事をあまりしなかったせいか、身体の筋力は、著しく低下していた。

それを改善し、体力を取り戻すため、リハビリを兼ねた歩行訓練中に話しかけられ、私は側にいた二人に相談した末、話を聞くことにした。

入院してから、毎日体調を見ながら続けている点滴。

その点滴を下げた台の車輪をカラカラと転がしながら、先生に案内されるまま、小さいスクーリング室に、加賀見先生と智、そして私と内科の先生の四人は入り、椅子に座った。

先生は椅子に座るなり、首から下げていたPHSを手に取り、どこにかけ、二言・三言話し、「では、お願いします」と、通話を切り上げた。そして、5分後、現れた先生がなんの前振りもなく、初頭の言葉を私に言った。

「信じられませんか？でも、貴女は死なない。貴女は進行性の胃癌ではなく、普通の胃癌です。間違いありません。」

あまりにも急な事に、放心しかけていた私は、智が背中を撫でてくれた事で落ち着き、まじまじと先生の顔を見て、先生が頷くのを見て、詰めていた息を吐きだした。

どうやら、私は死なないらしいというのは、本当の事らしい。

（こう言うのって、何て言うんだっけ？青天の霹靂？）

私がまだ話が聞ける状態ではないと見たのか、先生は智に私の家族であるかを確認し、今回の大まかなあらましを説明してくれた。

先生によれば、まず、スキルス胃癌と診断されたのには、病院側のミスだと説明があり、さらにそのミスは、大病院であってもなくとも、絶対あってはならない取り違いミスで、私のレントゲン画像と血液が、他の患者のものと取り違えられ、そのまま誰も気付くことも無く、それぞれそのまま病名を宣告されたらしい。

その間違いに気付き、指摘したのは、まだ27歳の若き研修医だったという。

「胃癌だったと言うだけで、今も貴女の身体の中には病巣が根づいています。近々それを取り出せば、再発の可能性や、転移の可能性は減るでしょう。」

受けますか？と、その道の名医である先生が私に聞き質す前に、智は動いていた。

加賀見先生も、是非にと、頷いていた。

勿論、その話を聞いた綾橋の家族（智が電話で知らせた。）は、迷うことなく即答した。

手術を受けるのは、あくまで私。

なのに、その当の本人の意見も聞かない内に、智や綾橋の家族は、その名医である先生に手術を依頼してしまった。

「愛されてますね。」

にこにこ微笑むその先生は、本来、半年ぶりに休息するために来日（帰国）したというのに、私を見た瞬間、自分は何処まで行っても、つくづく医者なのだと自覚したらしい。

「これも何かの縁だね。君は私の最初の妻に似ていてね。どうしても助けたいんだ。だから一緒に頑張って、元気になろう。」

（ズルイ。）

そんな事を言われては、誰だって断る事は出来ない。

懇願されるような、子犬みたいな瞳で見つめられた私は、薄い微笑を唇に浮かせた。

♪、11 治癒？（後書き）

疲れたので、続きは後日、日を改めて。

♪、**12 治癒？（前書き）**

更新しました。

♪、12 治癒？

私の薄い微笑みを見て、先生は何を思ったのか、「少し良いかな」と言って、スーツの内ポケットから、パスケースと万年筆を取り出した。

パスケースは何年も使っているのか、あちこちに綻びがあり、所によっては擦り切れているところがある、年代物を感じさせるものだった。先生はそのパスケースを開くと、普段からそこに入れてあるのだろう写真を取り出し、私に見るように言った。

その写真を受け取り、私が息をのんだのを見て取ると、先生は昔の記憶を思い出すかのように、瞳を閉じた。

「似てるだろう？ きっと、私の娘が生きていたら、多分君みたいに可愛くて、優しい子に育っていたんだろうね。」

（生きていたら、って）

先生——建川^{たてかわ} 芳寛^{よしひろ}、56歳と名乗った男性——は、私の困惑を肌で感じ取ったのだろう。

苦い何かを呑む込むかのように、顔を歪め、苦笑を洩らした。

多分、最初の奥さんと子供の事を思い出していたのだろう。辛そうに歪められた表情が、それを物語っている。

部屋は妙な静けさに支配されていた。

建川先生は、その微妙な空気を払う様に、重い口を開いた。

「香也乃、ああ、死んだ妻の事だけどね、彼女も今の君と同じ歳で死んでしまつてね。元々、身体が弱かったのに、どうしても子供を産みたいって強情でね。多分、彼女は寂しくて仕方なかったんだと思う。その時の私は、彼女の様子の変化に気付かないくらい、毎日が忙しかった。元気だったから、いつも穏やかに笑っていてくれたから、彼女の変化に気付けなかった。」

先生の過去の過ちを懺悔する様な独白は、誰にも止められなかった。

「彼女は、中絶が出来なくなるまで私に妊娠の事実を隠して、出産した。彼女が命を掛けて産んだ子。その子さえ私は守れなかった。娘は生まれて二時間後、息を引き取ってしまった。彼女はそのショックが耐えきれなかったんだらうね。彼女も、香也乃も、私を残して、娘の死を追う様に死んでしまった。丁度、中秋の名月、十五夜の日の、綺麗な満月の夜だった。」

今でも、香也乃さんの最期の悲痛な謝罪の声が聴こえると、先生は万年筆を手の中で弄びながら、誰に言う訳でもなく、小さく呟いた。

先生の顔を見れば、表情や瞳を見れば、今でも香也乃さんが好きだと、忘れられないのだと判ったし、雄弁に語っていた。

私と智、加賀見先生、そして建川先生と内科医の先生の五人がいる部屋は、建川先生の懺悔にも近い独白が終わっても尚、静寂に支配されていた。

でも、私は心の奥で警鐘が響いているのを聞いていた。

（聞いちゃいけない、これ以上、聴いちゃったら・・・。）

心はそう必死に叫んでいるのに、頭のどこかが、本能なのだろうか、私はもつと話が聞きたいと強く願っていた。

どうしてかなんて、解らない。

ただ一つ判り、感じるのは、建川先生が私の中に、ある感情を感じさせ、植え付けた事。

カルテを読んだのだろう。建川先生は私の目を見て、強く、はっきり言った。

「綾橋 吉乃さん、君の誕生日は娘の誕生日であると同時に、私の妻と娘の命日でもある。それに君は妻に生き写しだ。絶対に助けるから、生きる事を諦めないでくれないか」

他人には思えないんだよ。と、言う言葉で、私は、古い写真と先生を見比べ、彼が言いたい事を理解した。

私は生きる事を半分くらい、どこか諦めている所がある。

建川先生はそれを見抜き、柔らかに指摘した。

昔から密かに抱いている心の違和感と疎外感、そして、・・・。

写真に目を移し、写真の中の彼女に問いかけてみる。

（私は生きていても良いの？）

そう問いかけた時、目の錯覚だとは思うが、笑いかけてくれたような気がした。

——頑張って……、私の可愛い……。

それだけで私は、生きてみようと思った。きっとそれが今の私の選ぶ道なのだからと。

私は建川先生を正面から見据え、深々と頭を下げた。

＊

三日後、私の手術は秘密裏で行われた。

秘密裏に、と言っても、私が入院している病院の先生達は、中々こんなチャンスは無いと、やれ記憶しろと、手伝わせろ、見学させてくれたのと言い争い、私の身体を使って実験しようとした。

もう、どうせ末期で助からないのだから、と。

それを聞いた建川先生と智、もちろん加賀見先生もそれを許すはず無く、激しく非難し、守ってくれた。

「医師は、時として残忍な科学者や研究員になってしまう。自分達がどうしてもこの道に入ったのかさえ忘れてしまうくらい。」

哀しい事だと、情けないことだと、野仲先生（私の内科の担当医）は、言った。

また、それはとても怖く、患者側家族にとっては、理解できないものだとも。

手術室に搬入される前、ストレッチャーの上に寝かせられ、移動していた私の手を握り、智は私に声を掛けてくれた。

「吉乃、頑張ってくれ。」

短いけれど、願いと思いが詰まった言葉。

その言葉に頷き、私は8時間にも及ぶ大手術に臨んだ。

結果は成功。

私の中に巣くっていた病巣は、見事綺麗に切除された。

手術が終わった後、私は集中治療室に入れられ、10日間、意識を戻す事無く眠り続けた。

手術が長引いた大きな要因は、出血量が多く、患部が非常に難しい所にあったからだ、後で教えられた。

そこはとても微妙なところで、一ミリでも違うところを傷つければ、死に繋がる失敗になるほどの困難な所だと。

とは言え、それは成功したからこそ言える言葉で、聴ける真実。

それより私の興味が強く惹かれたのは、10日間の眠りから覚めた瞬間、薫ってきた色々な花の香りと、目に飛び込んできた贈り物の数々。

そして驚いたのは、建川先生の不安そうな表情と、智の憔悴したというより、疲弊した顔。

「どうしたの？ 疲れてるの？」

自分で思っている声より、若干掠れている声に 眉を顰めそうになった。

酸素マスクも邪魔だ。

そんな私の百面相を嬉しそうに建川先生は見ながら、智の肩に触れた。

「良かった。智君も良かったね。これでもう安心しても良いから、休みなさい。」

労るような建川先生の視線と口調に、智は気まずげに顔を俯かせた。

その行動は、少し子供じみていた。

（か、可愛い、と、思っちゃいけないわよね！？）

笑い出したいのを堪え、無理矢理言葉を捻り出す。

「大丈夫？ 顔色、悪いわよ。会社は？ 仕事は？」

私の頬を言葉なく撫でる智の手の上に、私の手を重ね、問いかける。

私から見ても疲れているのが見て取れるのに、智は手を離そうと

しない。

どういふことだと、建川先生に説明を求めるように目をやれば、建川先生は苦笑しつつも教えてくれた。

「吉乃さんが心配だったらしくてね、10日間も目を覚まさなかったり、心肺停止も何度かあってね。智君は見えていても可哀想なくらいだったよ。もし吉乃さんが今日あたり目覚めなかったら、智君は発狂していたかもね。眠るのも怖くて、夜が来るたび言い様のない恐怖に駆られて。」

とても仕事なんか出来るような心理状況になんかなれませんよ。と、言って更に。

「愛されてますね、吉乃さん。」

面映ゆくなる建川先生の言葉に素直に頷き、私は今の想いを言葉にした。

「はい。私も同じです。たった一人の、特別な人です。いつか、子供も欲しいです。」

その前に、不妊治療もしなければならぬが、それは追々やっていけばいいだろうと、その時の私は、安易に思っていた。

と、その時、ぽたり、と熱い雫が手に落ちてきて、私は視線を智に戻した。

(え!?)

見た物が信じられなかった。

自分で自分の目を疑い、夢かとさえ疑った。それ以外、何も思い浮かばなかった。

勿論、智も人間だから涙線も感情もある。

それでも智は、普段は表情を変えない。

その智が泣いている。

私が知っている智は、あくまでも背筋を伸ばし、自信に満ち溢れ、多少傲慢で、常に会社第一主義の人だから。

今では優しい所もあると分かっているけど、先に植え付けられたイメージは健在で。

何とか元に戻って欲しくて、私の口は、石鹼水に洗い流されたのかと疑われるくらい、破廉恥な言葉がすらすらと出ていた。

「私が退院したら、やりなおして。もう私が悲しまないように、たくさん愛して。智の唯一無二の女として、永遠に。」

だから、今の内に休んで。と。

意識して未だに私の頬に置かれている智の手を、ギュッと強く握り、微笑んだ。

私の言いたい事を、伝えたい事を理解してくれたのか、智は艶やかな笑みを浮かべた。

そして、耳に囁かれた言葉は、私の顔を瞬時に染めさせる言葉だった。

——三年分、寝る間もないほど愛してやる。今の内、体力作っておけ……。

建川先生は聞こえていただろうに、素知らぬフリをしてくれ、ただただ、嬉しそうにニコニコしていた。

——そして時は流れ、2週間後。

私は無事に退院の日を迎えた。その私の隣には、私が好きな凛々しい智がいた。

♪、**12 治癒？（後書き）**

長かったら、ごめんなさい。

♪、**13 義姉とお茶と・・・。****(前書き)**

利依、再び

♪、13 義姉とお茶と・・・

義姉さんが退院して、綾橋の本宅と一緒に暮らし始め、早いものでもう一ヶ月。

最初こそ、あちこちにいる使用人に臆していたり、遠慮していた義姉さんも、最近では随分と打ち解け、たまに冗談を言い合ったりしている。

——カチリ。

微かな陶磁器の触れあう音に、お父様とお母様のスケジュール帳から（私の仕事は、お父様の第二秘書兼、お母様のアシスタント）、その音の正体の方へ注意を向ければ、温かな湯気を立たせた白磁のカップが、ガラス製のローテーブルに置かれたところだった。

カップは白く滑らかで、金色で縁取られただけの、見た目より実用性を重視して作られたもので、アンティーク品ではない。そのカップの中には、ストレートのセイロンティー。

「冷めない内に、どうぞ。」

「ありがとう、義姉さん」

持ってきてくれたのは義姉さん。

義姉さんは病氣療養という名目で会社を休養中で（お父様の権力をここぞとばかり駆使させて貰った。）、折を見て復職する方向でいるみたい。

その義姉さんの淹れてくれる紅茶は、そこいらの下手な喫茶店のものより、数万倍美味しい。

そう感じるのは、どうやら私だけではないらしく、お母様やお父様、当然兄さんもそう感じるらしく、家族で寛ぐ時は、専ら義姉さんが淹れてくれている。

冷めない内に、と、義姉さんは言ってくれているけど、実際は私がちょうどよく飲める温度で淹れてくれている事は、割と早い内から気付いていた。その心遣いが温かく、また、嬉しくて。だから一も二もなく、仕事よりお茶を優先する。

（ああ、今日も美味しい・・・。）

クセがあるから、好きか嫌いかで好みが分かれるセイロンティー。

ふくふくとした気分で、お茶の香りと味を楽しんでいると、義姉さんの格好が目に入った。

今日の義姉さんの服装は、ノースリーブの黒いワンピースの上に、レースのカーディガン。

その隙間から見えた、紅い華の痕。

（に、兄さんったら・・・！！）

異常とも、執拗とまで言える独占欲と執着心。それを外聞なく見せつける兄さん。

義姉さんは、兄さんに愛されてるという充実感と実感で、元々綺

麗だった義姉さんは、更に綺麗になった気がする。

「利依さん、どうしたの？私、どこかおかしい？」

「いいえ？義姉さんは何処もおかしくないわ。おかしいのは兄さんの方だから。」

（そうよ、おかしいわ。）

ここぞとばかり、私は義姉さん相手に愚痴や不満を言い募らせる。

義姉さんには悪いけど、あの兄さんのどこが良くて結婚したかの判らない。

同じ男でも、従兄の紘人さんの方が、断然カッコよくて、完璧だと思うのに。

（まあ、弁護士になってからは、全然逢えてないけど。）

そんな私に、義姉さんは頬を紅く染め、ふふふと笑い、紅い唇に左手の人差し指を近づけ、悪戯っぽく言った。

「それは、内緒。言えないわ。」

そう言って、あっけなく私を軽くあしらった義姉さんは、今度はむずむず、もじもじと、身体を動かし、視線を彷徨わせ始めた。

（兄さん、ごめんなさい・・・。）

私は兄さんが義姉さんを独占したい気持ちだが、今良く判った。

所々プライドの高い仕草や口調。それだけの女なら、何処にでも転がっている。でも、義姉さんはその中にも成長しきれていない、幼さと言うか、弱さが見え隠れしていて、守りたくなってしまふ。私が男だったら、兄さんより先に結婚を申し込んでいたと思う。

そんな私の様子に気づく事も無く、義姉さんは、「あの、ね？お願いがあるんだけど聞いて貰える？」と、顔を真っ赤に染め、私に聞いてきた。

もう、お茶なんか飲んでる場合ではない。

無意識に義姉さんが放つ、妖艶な色気をまともに喰らった私は、もう義姉さんの虜だった。

激しく頷いた私に、義姉さんは嬉しそうに微笑み、口を綻ばせた。

「あの、ね？私の事、名前で呼んでくれないかしら。なんだか、距離があるみたいで寂しいの」

カップをテーブルに戻しておいて良かったと思う。

恥じらいながら、照れつつお願いする義姉さんは、世界で一番可愛い。

（なんて可愛いの！！義姉さん、いえ、私の姉さんの吉乃は！！）

トクトクと高鳴る鼓動は、間違いなく私が吉乃を愛してるから。（間違っても変な意味じゃない。親愛の方の愛情だから。）

その瞳と表情はヤメタ方が良いと思う。犯罪級に可愛いから。

私の答えを今か今かと待っている吉乃。

私はハグをしたいのを腕を組むことで我慢し、にっこりと笑って頷いた。

「いいわ。判ったわ。吉乃。それより、その、凄いわね。そのキスマーク」

——兄さんの相手、大変なんじゃないの？

すっかり冷めてしまったお茶を飲みつつ、吉乃に聞けば、吉乃はあからさまにうろたえ出した。

「う、そ、そんな事・・・。」

「昨日は何回したのかしら？中々静にならなかったけど？」

「き、聞こえてたの！？利依さん！！」

慌てふためく吉乃に、私は微笑むだけ。

そんな私を見て、吉乃は「あー」だの、「うー」だのと唸りつつ、紅茶のカップに角砂糖を次々と放り込んだ。

勿論、声は聞こえなかった。聞こえるはずがない。なぜなら、兄さん夫婦がいつ同居しても良い様に、兄さん夫婦の寝室は、元々完全防音で作ってあったから。

それをわざわざ教えてあげるほど、私は人は良くない。

それに、今や兄さん夫婦の夫婦事情は、我が家の最大関心事の一つでもある。

けど、回数や頻度は、単なる私の興味。

吉乃「秘密ですよ？」と言ってから、手を開いた。

それは回数を表し、寝たのは朝方だったと、白状した。

（兄さん……。）

涙が出そうだった。

あの兄さんが、よくぞ此処までと。そして、同時に、また『吉乃』
と言う女性の特別さも、私はこの時、理解した。

兄さんがまた壊れる時があれば、それは二人が離れた時。

でも、そんなことは起きないだろうと、私は安易に思っていた。

漸く訪れた幸せで、温かな日々。

自然と頬が緩む。

吉乃が入院していると発覚するまでの日々と、お見舞いに行くま
でにかかった日々と比べるまでもない、幸福感に溢れた今の我が家。

兄さんは明日会社を丸々一日休み、吉乃とデートする予定。

まるで漫画を読んでいるかのような二人の関係だけど、兄さんの
精神状態は不安定のまま。今でも睡眠薬を手放せないし、吉乃の姿
が見えないだけで、顔色が変わる。

離婚寸前というか（実際は未入籍だった）、縁が切れてしまう寸

前だったから、それは仕方ないと思う。

吉乃もそれを解っているのか、常に気を配っている。

「明日の兄さんとのデート、楽しんできてね」

「ありがとう、利依さん。」

幸せそうに、本当に幸せそうに、嬉しそうに微笑む吉乃。それに私も嬉しくなって笑った。

でも、この時。

もし私が二人を、吉乃を止めていたら、違う未来が待っていたのかもしれない。

神様はどうして兄さんや吉乃の二人だけに、苦しみや残酷な試練や、冷酷な仕打ちを与えるのだろう。

この後に起こる、綾橋家の最大の危機を呼び込む、波乱の種が芽吹いてるとは知らず、私は悠長に年下の姉・吉乃と、会話を楽しみながら、午後のお茶の一時を楽しんでいた。

空は、明日からの未来を示すように、雨雲が空を覆い、冷たい雨がふり、夜遅くまで、雷も激しく鳴り響いていた。

♪、**13 義姉とお茶と・・・。**（後書き）

さて、次回からいよいよ動き出しますよ。

♪ 14 真夏の日の悪夢？（前書き）

さて、これからはしばらくシリアス路線がメインテーマです。
お許しください。

人生はそう甘くはありませんので。

♪、14 真夏の日の悪夢？

8月10日、水曜日。

空に雲の一つも浮いていない、良く晴れた日。

この日が、私が生涯忘れる事が出来ない、これからの騒動の幕開けになる日になるなんて、一体、誰が予想できただろう。

私は類と付き合っていた頃から、あまりデートの行き先は気にしない方だった。

ただ、一緒にいられれば幸せで、嬉しくて、行き先なんか関係なかった。だから、たまに何処に行きたいかと聞かれ、尋ねられた時は、困惑して何も答えられなくて、あやふやに笑って誤魔化していた。類もそんな私の性格を熟知していたから（類と私は幼馴染だった。）、雑誌のデートコースを忠実に守ったり、何もしない日もあった。

「吉乃、新しい靴はいらないのか？」

智が選んだデート先は某有名デパートで、いわゆる買い物デートだった。

今日の私は、髪を左サイドにまとめて流し、六分丈の白いチュニツクワンピースに、ジーンズの生地で作ったレギンスに、五センチのヒールのサンダルという控えめな服装で、智はカジュアルなパンツとジャケットというスタイルで、デパートに来ているお客さんの視線を一人占めしている。

私がボンヤリとそんな事を思いながら、靴売り場を見ていると、

それに気付いた智が、靴売り場の前で足を止め、私の足下を見て、私の返事を聞かない内から靴売り場の椅子に座らせ、何足かの靴を店員に持って来させた。

実を言えば、丁度新しい靴が欲しかった私は、智のその気遣いが嬉しくて、感激したのと同時に、愛しくも思った。

私が座ったのとはほぼ同時に置かれたのは、三足の靴。

パンプスにハイヒール、そして何故かスニーカー。

それらを手ずから試足させ、さっさと会計を済ませた智は、無表情ながらも満足気に見えた。

「何もこんなに買ってくれなくても……。私だってお金はあるんだし……。でも、ありがとう。嬉しい。」

私が今履いている靴も、実は智が買ってくれたモノ。そればかりか、今、私が身につけているもの全てが、智が買ってくれたモノ。

「あとは鞆とスーツか？ 体調が良ければ、来週から会社に復帰したいんだろ？」

紘人から聞いたぞ、と、少しだけ不愉快そうに顔を歪め、私をジロリと睨んだ智に、私は苦笑した。

（そんな顔しなくても良いのに……。）

弁護士の紘人さんとは、あれから縁が切れることなく、継続的に色々仲良くさせてもらっている。

今では雇用関係だけではなく、個人的に親しかったりもする。

（そう言えば絃人さんって、好きなヒトがいるのよね。利依さん、知ってるかしら？）

くふふふ、と、妖しげに何かを企むように笑っている私の傍らで、智は怪訝そうに私を見ながらも、鞆売り場を探していた。

そんな私達の間に、これから嵐を巻き起こすであろう波乱の使者が、静かに、しかし、確実に近付いている事に、私と智は気付いていなかった。

♪、14 真夏の日の悪夢？（後書き）

「夏の嵐」と題していた原作の話の2ページ目までですが、修正して更新しました。

この回の話から、地味に色々手直しが入ります。
よろしく願います。

♪、15 真夏の日の悪夢？（前書き）

昨日の続き。

♪、15 真夏の日の悪夢？

災厄は、人が忘れた頃に訪れると、あの人が言っていた……。

靴と鞆、スーツの全てを買い終え、次はどうしようかと相談していた時、その声は、私と智の仲を引き裂き、割り込むように聞こえてきた。

「智？ 智じゃない？ 久しぶりね。」

ふわりと漂う甘い香水の匂いに、美しさと知性を窺わせる声に、私は嫌な予感に胸を震わせた。

（やめて……、やめてっ！！）

だけど、その願いは全く聞き届けられなかった。

まるでそれは予めそうなる様に仕組まれ、定められていたかのよう
うに。

（どうして、どうしてなの！？）

虚ろになっていく私の視界と聴覚に、その可愛らしい顔と声が聴こえて来たのはその時。

「マアマ？ そのひと、だあれ？」

ちょこりと、首を傾げ、女の人を見上げる女の子の顔は、誰かに、
——智に似ていた。

女の方は女の子の問いに答える事無く、にっこりと微笑み、智の横に立っている私を眇めた瞳で見て、一瞬だけ唇をいびつな形に歪めた。

智はそれに気付く事無く、女の人を驚愕の表情で見て、そして掠れた声で、名前を呼んだ。

「万季・・・か？」

その声色は、色々な感情が渦巻いていた。

だけど私はそんな事より、智がその女の方の名前を呼び捨てしているのが、何よりも許せなく、信じられなく、信じたくなかった。

智に万季と呼ばれた女性とは、智に名前を呼ばれた事に満足したのか、智の問いに頷き、女の子を引き寄せ、挨拶をするように促した。

女の子がその時、少しだけ痛そうに顔を歪めた事を、私は自分の事でいっぱいになっていて、見逃してしまっていた。

女の子は、私と智を交互に見て、頭をぺこりと下げた。

「はじめまして、たちばな まな 4さいです。」

はっきりとした、でもその舌ったらずな甘い声も、何処か智に似通っていた。

考えたくない、信じたくないという私の心とは逆に、私の五感に残酷にも正常に機能する。

「久しぶりね、智。相変わらず無愛想なのね。」

親しげに会話する智と女のヒト。

女の子は、そんな二人を見て、嬉しそうに微笑んでいる。

智は小さな女の子の顔を見て、信じられないという声で、また、女の人に声を掛けた。

「万季、この子供は、もしかして……。」

「あらやだ、判っちゃた？そうよ、万菜は私と智、貴方の子よ。」

コロコロと笑いながら、私を見下すような視線で眺めまわし、語った言葉に、発せられた言葉に、私は一瞬にして暗闇へと突き落した。

女の子は、私の方をちらりと見て、それから母親を見て、僅かに怯んだ表情をのぞかせた後、それまでの表情を覆い隠すように満面の笑顔を浮かべ、「パパ!!」と、智に抱きついた。

それを見ていた他のお客さん達は、そんな三人を理想の夫婦だと、羨望の籠った声音と視線で羨んだ。

「見て。あの美男美女の夫婦。お似合いよね。女の子も両親に似ていて綺麗だし」

その囁きに、私の心は悲鳴を上げ、慟哭をあげた。

（やめて……、やめてっ!!）

だけど私のその悲痛な慟哭は誰にも届く事無く、残酷にも時間は勝手に進んでいく。

つい先程までは楽しかった。

楽しくて、嬉しくて、幸せで、心がふわふわで、温かくて。

なのに今は寒くて、辛くて、悲しくて。

どうにもならない孤独感と私の心の中の闇が、静に私を狂わせていく。

（ここに、いたくない……。誰か、助けて。）

智、私を見て、と、言いたかった。

でも、この時からひっそりと狂い始めていた私の心は、それを許さず、気がつけば一人でデパートを出て、ふらふらと歩き、綾橋の家に戻っていた。

別れと崩壊の時間が静に近づいていた事を、この時の私は、何処かで予知していたのかもしれない。

♪、15 真夏の日の悪夢？（後書き）

やれやれ、何とか更新出来ましたよ。

♪、**16 心の鍵？（前書き）**

更新。

♪、16 心の鍵？

どうして幸せな時間は続かないのだろう。

頭と心の中を駆け巡り、恐ろしい程の速さで蝕んでいくのは、醜い想いと感情。

物分かりのよい妻として、理解のある妻として、智が他の女といった事も問い詰めたりせず、智が自分から話してくれるまで待とうと決め、受け入れたのに。

智の過去に何があるうとも拘らない、構わない、と思っていたのに。

けれど、それは私の痩せ我慢と虚勢、醜い心を隠すためのプライドだった。

私はいつの間に、こんなにも嫉妬深い女に成り下がっていたのだろう。類の時でさえこんなには苦しまなかったし、心は乱れなかった。

（どうして、どうして、どうしてなの、智！！）

考えても、譬え自問自答を繰り返した所でも、答えが出たり、返ってくるわけではない事は理解している。それでもそれをやめられない。

鞆をソファーに放り投げ、大きなベッドにころりと横になり、身体を猫のように丸める。

普段使われていない客室のベットは、いきなりの重力で驚いたのか、ギシッ、と、軋む音を立てた。

私はそれに構うことなく、目を閉じた。
目を閉じれば思い出すのは、あの光景。

あの光景がどうしても目に焼きつき、思い出したくもないのに、勝手に思い出す。

それが苦しくて、悔しくて、切なくて、変になりそうだった。

幸せそうで、お似合いの夫婦で、家族。

（あの子、まなちゃんも、可愛かった・・・。）

悶々とした気分のまま、私はずっとそうして横になっていて、いつの間にか眠り込んでしまっていた。そうと判ったのは、誰かに身体を揺さぶられていてから。

私を起こそうとしている人は小柄なのか、手が小さかった。もしかしたら子供かもしれないなかった。

（この家に、子供はいない・・・。）

私は子供という可能性を打ち消し、そろそろと薄い瞼を開けた。すると、そこにいたのは、見覚えのある小さな子で、何故か不安そうにしている、今にも泣き出してしまいそうな顔をしていた。

（名前は確か・・・、）

喉まで出かかっているのに、名前が中々するりと出てこない。
そんな私を、小さな女の子は、不安混じりの声で私の事を気遣っ

てくれた。

「よしのお姉ちゃん、だいじょーぶ？あやめのこと、わかる？」

（そうだった、あやめちゃんだった。）

細く、白い左手を伸ばし、あやめちゃんの真っ黒な艶々とした長い髪を優しく撫でる。

あやめちゃんは、紘人さんのお姉さんの子供で、良く綾橋の家に遊びに来る。と言うのも、咲田家が綾橋家の分家だから。

「おねえちゃん、ぐあいわるいの？おなか、いたいのか？」

あやめちゃんの不安げな声や、眼差しは、素直に嬉しく感じられるし、申し訳なくも感じる。

（何やってるの、相手は子供なのに。）

大人が子供に心配を掛けてはいけない。いつでも守ってあげなくてはいけない、と、短大生時代に習ったし、現場でも教わった。

小さな子に心配を掛けたくなくて、私はまた、無意識に心に仮面をつけ、カチリと、心の鍵のダイヤルを回した。

「大丈夫よ、あやめちゃん。少し疲れて寝てただけだから。智お兄ちゃんには会った？」

「うんっ！！いま、おふろにはいつてるよ？すごくあせかいてて、ひとりでかえってきたから、ママとりいちゃんにおこられてた。」

きっと、探してくれたんだろう。誰でもいきなりいなくなれば必死で探す。

探さない人がいるとすれば、最初からその人に対し、何ら感情を抱いていないか、捨てる事を決めているかだ。

（嫌気がさすわ。）

心配すると知りつつ、浅はかな行動をとってしまった自分が嫌になる。

「おねえちゃん、ママがおねえちゃんとおはなししたいんだって。りいちゃんもまってるよ？」

自己嫌悪に駆られている私の指を、あやめちゃんは小さな手できゅっと握り、私の顔を見つめた。

そのあやめちゃんの瞳は、うるうると涙で潤んでいて、私はまた申し訳なく感じた。

私はそれを何とかしたくて、身体を起こし、ベットから降り、軽く身繕いしながら、私は明るく言った。

「じゃあ行こうか。お腹もすいたし。あやめちゃんはお飯食べた？」

あやめちゃんの小さな手と手を繋ぎ、一步一步、階段をゆっくり降り、リビングに着いた私とあやめちゃんは、そこでお風呂から上がったばかりの智と鉢合わせした。

ついさっきまで後ろめたく感じていたのに、智の顔を見た途端、私の心はまた静かに、私が知らない内に、カチリ、カチリと、ダイヤルを回し始め、頑なになり始めていた。

♪、16 心の鍵？（後書き）

変な所ですが、ここで区切ります。

♪、17 心の鍵？（前書き）

更新します。

♪、17 心の鍵？

「お帰り。ごめんね、先に帰っちゃって。」

にこりと微笑んで見せたのは、妻として、女としての余裕とくだらないプライドを智に見せつけるためと、自分の心を守るため。

今日の事は何も気にしてない。そうやって笑って見せれば、誰も私の笑顔を疑ったりなんかしない。

私が長年を経て作り上げた完璧な笑顔の裏に隠された真実を見抜ける人は、誰もいない。勿論、智も簡単に騙された。

「――いや、無事なら良い。」

髪から滴る水滴をタオルでガシガシと強く拭き取りながら、いつもより低めの声でそっけなく返事が返ってくる。

その濡れた髪を拭う動作を見て、嫌悪感を感じてしまったのは、あの女のせい。

チリッ と、心が焼けるような痛みに囚われ掛けていた私を、現実引き戻してくれたのは、いつの間にか私と手を離し、ダイニングテーブルの椅子に座っていた小さな天使だった。

「おねえちゃん、はやくはやく。」

両手にナイフとフォークを持って、私ににこにここと微笑むあやめちゃんは、私の葛藤や、大人の勝手な都合も、何も知らない。だか

ら救われる時もあれば、逆に疎ましく感じ得る時もある。

果てして今はどちらだろうかと、どうでもいい事を考えていた私の耳に飛び込んできたのは、楽しそうな女性の声だった。

「あやめは本当に吉乃ちゃんが好きなのねえ。」

ワイングラスを持ってクスクスと上品に微笑むのは、あやめちゃんのお母さん。

あやめちゃんは、その人に満面の笑みを向けた。

「うん。あやめはママのつきにおねえちゃんがすき。おねえちゃん、だれがいちばんすき？」

悪意がないからこそ、この手の質問には答えにくい。だけど、この手の答えはあの一言で解決できる。だから、私はその答えをするりと出した。

「ありがとう。私もあやめちゃんが好きよ？」

けれど、あやめちゃんは誤魔化されてくれなかった。あやめちゃんは、私が今、最も答え難い返事を要求してきた。

「じゃあ、さとしおにいちちゃんは、なんばんめ？」

——ズキッ……。

どうして胸が痛んだのかは判らなかった。

だけど、それを敢て言うなれば、その問いに答えることへの恐怖だったのかもしれない。

あやめちゃんには、本当に悪意なんてないんだろう。

あるのは、純粋な好奇心と、好意だけ。

大人みたいに、下手な腹の探り合いや、駆け引き、騙し合いや悪意なんて必要ない。

だから、こんなにも無垢で、何でも言える。

「おねえちゃん、どうしてないてるの？」

中々答えられず、固まっていた私は、その言葉に我に返り、「泣いてない」と言おうとした。けど、その前に、私は傍にいた智に、胸元に抱き寄せられ、嗚咽を漏らし泣いていた。

（なんで泣いてるの？）

悔しいから？寂しいから？寒いから？

いいえ、違う。

答えは怖いからだ。

確かに今の私と智は、以前とは比べようもなく、夫婦としての仲は改善され、修復されている。だけど、まだ、私と智の間に子供はいないし、授かる確率も低いまま。

綾橋の家の人は知らないのだろうけど、私は偶然聞いてしまい、知ってしまった。

病気になったのは仕方なく、私のせいでもない。だけど、あっち

の方は・・・。

その言葉を偶然聞いてしまった日から、私は、怖くて怖くて仕方がない。

不安は、いつ、いかなる時でも私を襲い、消えたりしない。

（ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。役に立たない妻で嫁で。）

恐怖心と本音を曝け出す事も出来ない、弱い私は、泣いていた理由も言わずに、必死で笑顔を浮かべ、あやめちゃんの質問に答えた。

「私にとっての智お兄ちゃんは、自分より大切な人なの。代わりの人なんかいないくらい、大切に、ずっと傍にいたい人で、大好きな人。」

今は何も言えないけれど、いつかは全てを話し、受け入れて欲しい人。

（ねえ、神様。）

もし、本当にいて、私の我儘を聞いてくれるのなら、もう少し私に時間と――を下さい。

永遠なんて求めないし、願わないから。

せめて、心の中から溢れるくらいの楽しさと、幸せな想い出を作れるだけの時を・・・。

それを叶えてくれるのなら、私は神であろうと、悪であろうと魂を売る。

そんな私の何かに感付いたのか、あやめちゃんが急に私に問いか

けてきた。

「おねえちゃん、しんどりなんか、しないよね？ パパみたく、きゅうにいなくなるじゃないよね？ あやめをおいてかないよね？」

あやめちゃんの必死さは可哀想だけど、やがて訪れる終焉を変える事なんて、誰にもできない。その代わり、私は精一杯生きよう。だから。

「あやめちゃん、今日はお姉ちゃんと智お兄ちゃんと、あやめちゃんの三人で寝よう？ 良いでしょ？ 智。」

涙を拭って、智に尋ねれば、智は声なく頷いてくれたけど、あやめちゃんは、私の急な申し出に驚いていた。

「おねえちゃん？」

オロオロと、どうしたらいいか、母親と私を見比べるあやめちゃん。

それでも、私は畳みかけるように、あやめちゃんに頼みこんだ。

「お姉ちゃん、あやめちゃんみたいな可愛い子が、ずっと欲しかったの。だからお願い。今日だけお姉ちゃんと智お兄ちゃんの子供になって？」

いくつかの本音と願いを口にし、あやめちゃんの必死な問いから逃げる。

きつと、約束をしてしまったら、あやめちゃんは悲しむだろうか。

全ては、あやめちゃんを傷つけない為。

そうして私はまた、間違った心の鍵を選んでいる事も気付かずに、怪しまれないように夜まで時を過ごした。

♪ 17 心の鍵？（後書き）

次回の話は、かなり変更になるかもしれません。申し訳ありません。でも、許してくれると嬉しいです。

♪、**18** 欠片を求めて？（前書き）

更新、更新♪

♪ 18 欠片を求めて？

私は限りなく卑怯で、意気地がないのかもしれない。

さらり、さらり。

深い眠りに付いている二人の髪を撫でる手を止め、窓辺に近付き、カーテンをそっと開けてみる。

まだ完全に夜は明けてはないけど、こればかりは仕方がない。

長い髪をポニーテールで一纏めにし、鞆を持ち、静に寝室を出る。

（ごめんなさい、良い夢を・・・。）

今、私がこれからしようとしている事は、誰からも理解されないかもしれない。だけど、どうしても知りたいし、自分で決めた事だから、止められても出ていく。

時間が残っている間に知っておきたい、と言うより、後悔したくないから、今、動かなければならない。

足音を忍ばせ、玄関の鍵を開け、ひっそりつと綾橋の家を出る。

と、そこで、綾橋家が飼育している犬のドーベルマンが、私の気配を察知し、ムクリと頭をあげた。でも、私が唇の前で人差し指を立てると、ふいっと目を逸らし、尻尾を振って見逃してくれた。

心の中で見逃してくれたスピネル（犬の名前）に感謝しながら、

一歩、また一歩と、歩を進める。

向かう先は決まっている。

入院中、意図せずして見て、知ってしまった建川先生の前の奥さんの写真。

似ているというだけでは、決して済まされない顔だった。

もう、戦う前から、真実を知る前から、戦わずして逃げるのは止めた。

だから私は確かめに、逢いに行ってみようと、前から決めていた。それが今日になってしまったのは、少なからず昨日の昼の事が影響している。

あれだけ顔と雰囲気似ているのであれば、と。

嫉妬と悲しみの中で芽生えたのは、動揺だけではなかった。

無性に知りたくなってしまったのだ。

私の母親は、一体どんな人だったのだろう、と。

菜々宮の家族と血が繋がっていないのは、過去にDNA鑑定で検査し、家族ではない事が立証された。

建川先生や智、綾橋の家族にはまだ伝えてはないけれど、私は密かに絃人さんに協力して貰い、先生の髪の毛を入手して貰い、DNA鑑定に2週間位前に出していた。その検査結果も、近々届くはず。

恐らく、十中八九建川先生は私の父親だろう。

残るは、彼女だけ……。

「待っていて、逢いに行くから・・・。」

私の独り言は、誰にも聞かれる事無く、夜明け前の空に吸い込まれ、消えていった。

＊

建川先生の奥さんの御墓は、ひっそりとしていて、それでいて雑草や木の根、蔓や蔦で覆われていて、荒れていて、整備されていなかった。

（どうして、こんなに荒れてるの・・・？）

建川先生のあの話振りからしてみても、このお墓の状況がそぐ合わない気がする。

腕を翳し、空を見上げ太陽は既に中天にある。

長野行きの新幹線の始発に乗れた所までは良かった。

だけど私は半ば突発的に行動し、出てきたせいか、情報はあまり持っていなかったし、こちらに知人もいる訳でもなかった。

それでも、何とかこの墓地がある御寺に辿り着けたのは、入院中に度々お見舞いに来てくれた建川先生に、それとなく御墓のある場所を聞き出し、それを覚えていたから。

結果、市内を暫くウロウロした私は、駅前でタクシーを拾い、このお寺の名前を言って乗せて来て貰った。

私の右手には、タクシーに乗る前に買った百合と菊の花束、そして左手には、水が入った桶と、その水を汲む柄杓がそれぞれある。

荒れた墓を前にして、私はどうするべきか迷った。

このまま引き返すのもアレだが、掃除するにも道具がいる。
一端、市内に引き返そうかと、思い直したその時。

「あら、珍しい。香也乃ちゃんの処にお客様なんて……。」

如何にも優しいげで、穏やかそうなご婦人の、珍しい声が聴こえ、私はそのご婦人の方に目を向けた。

そのご婦人は、私の意外と近くに立っていて、私が自分を見ている事に気付くと、ふんわりと微笑んだ。

そして。

「あらら、貴女、平さんの処の香也乃ちゃんにそっくりね。もしかして、香也乃ちゃんの親戚かお知り合い？」

香也乃ちゃん、平さん、と、親しげに言って、問うてくるご婦人に、私はポロリと、まだ調べても、確かめてもないのに、想いを言葉にし、発していた。

「母です！！ずっと探してた母です。その母の御墓がどうして……。」

どうしてこんなに荒れているのだろう。
誰にも見向きもされず、手入れもされておらず、墓石には苔が生

えてる所も見受けられる。

これでは朽ちてしまう寸前だ。

（酷い、これじゃあ可哀想過ぎる。）

人は二度死ぬと良く言う。

一度目は命の灯が消えた時。

そして二度目が、人の心から消え去ってしまった時。

ならば、香也乃さんは、私の母は、もう二度死んだことになる。

改めて墓を見て、そう思った時、私は近くに立っていたご婦人に、躊躇う事なく、頭を下げていた。

♪、**18 欠片を求めて？（後書き）**

ここで一区切り。

♪、19 欠片を求めて？（前書き）

2回目。

♪ 19 欠片を求めて？

今年の夏は一段と熱い。

額から滝の様に流れる汗をタオルで拭いながら、溜息を吐けば、暑さが一段と増したような気がする。

「あっつ……。」

お墓の掃除を始めて、なんだかんでもう二時間が過ぎようとしている。なのにまだ終わりは見えてこない。

「ご精が出ますね。きっと身仏も貴女様に感謝しておられますよ。」

熱さのあまり、木陰で一休みしようと大きな楠の蔭に入った私に、法衣を着た住職さんが冷たいお茶を出してくれた。

そのお茶をありがたく飲めば、爽やかな口当たりが美味しいほうじ茶だった。

「お若いのに感心ですね。きっとお母様も喜ばれてと思いますよ。」

「え……。？」

「おや、貴女は香也乃さんと芳寛さんのお子さんでしょ？」

違いますか？と、微笑まれ、私は困惑した。

私はそうであればいいと思っているし、実際、願っている。
でも……。

（どうして、解るの？断言できるの？）

今日初めて会って、今、初めて会話しただけなのに。

きつと、そんな私の困惑を感じ取ったのだろう。お坊さんは穏やかに微笑み、細い目を更に細めた。

「貴女は本当に香也乃さんにそっくりだ。強情で、泣き虫で、けど誰よりも強く、儚く。自分の信念の為なら、愛する人を騙してまで、その物を手に入れる。いやいや、全く驚きました。」

嬉しそうに、それでも懐かしそうに。

「これも何かの縁でしょう。これを引き取っては下さいますか？」

そう言って法衣の袂から差し出されたのは、一つのお守り袋と、紫水晶が付いた腕輪。

これは？と問えば、お坊さんは微笑みながら、「香也乃さんの遺品だ」と言った。それをどうして私に？と、さらに問えば、自分が持つてゐるより、貴女が持つてゐる方が良いからと言われ、持たされてしまった。

「信じられないかとは思いますが、香也乃さんが私の夢枕に現れまして。どうか、これを渡して欲しいと。愛されてますね」

では、ご無理をなさらずに、と、去って行く姿は、まるでこれが

定められ、最初から決まっていた事だったかのような言動だった。

私に残されたのは、古いお守り袋と腕輪の二つと、お坊さんの言葉。

暫くそれを茫然と眺めていた私は、風がさわさわと流れる音で我に返り、残りの作業をすべくタオルを首に巻いた。

＊

コトン、と、目の前のテーブルに置かれたのは、温かい湯気を立ち上らせた湯呑み茶碗。

私の髪からはまだ、ぽたり、ぽたりと、雫が垂れている。

「それにしても驚いたわ。本当に娘さんだっただなんて。」

「まだ、はっきり決まった訳ではありませんけど、多分、間違いなと思います。」

頭を下げた後、私はこの親切な人から掃除道具を借り、出来る限りお墓を掃除した。

その最中にお坊さんに話しかけられたのだ。

今の私の状況と言えば、お墓の掃除が終わって、掃除道具を返そうと、聞いておいた住所を尋ねれば、「泊って行きなさいな」と、引き留められ、ついさっき、お風呂から上がったばかりだ。

この人は香也乃さんの幼馴染で、良く遊んでいたらしい。

昔の事を、色々と自分から話してくれた。

「あ、ところで吉乃さん、お家に連絡はしなくても良いの？きっとご家族の方々も心配してらっしゃるわ。」

柱時計を見れば、確かにもう遅い時間だった。

一応、書置きを残しておいて来たとはいえ、ここは素直に提案にしたがの方が良いだろうか。

（私だったら・・・、心配するわね・・・。）

迷ったのは一瞬。

私は携帯に電源を入れ、智と利依さん、紘人さんの三人にメールを贈り、再び携帯の電源を落した。

きっと智は心配している。

けどあのまま智の傍にいたら、私は確実に爆発し、壊れ、責めていただろう。

それだけは嫌だった。

もう傷付けないと決めたのだから。

独り善がりな愛情だと言われようが、私にはこうするしかなかった。

二度と愛しい人を手放さない為に、私は今、ここにいる。

あの女と会話している時の智は、苦しそうだった。

利依さんは、私が智の初恋相手だと暴露してくれたけど、彼女に對する思いも少なからずあったと思う。

あの女は、私と一瞬目があつた時、激しい敵意を確かに向けていた。

――返して貰うわよ・・・。

如何にも、智が自分のものであるかのように。

入院する前ならば、簡単に渡していただろう。

でも私は、私達二人は生まれ変わった。

目を閉じ、私は深呼吸を何度か繰り返し、長野の夜に誓った。

決して、あの女には負けはしないと。

♪、19 欠片を求めて？（後書き）

長野編、終了。

♪、20 ひと時の団欒？（前書き）

更新、出来ました。

♪、20 ひと時の団欒？

「ただいま帰りました。」

私は何食わぬ顔で婚家に帰ったのは、もうそろそろ太陽も沈もうかという日曜の夕方。

両手には、長野の名産品や伝統工芸品などのお土産がたくさん入った紙袋や、ビニール袋。

と、言うのも、私はあの後、好意に甘えて宿をとらず、香也乃さんの幼馴染である人からの提案もあって、色々と昔話を聞きながら、思い出巡りをしたからだ。

最初は着替えも無いから、すぐに帰ろうと思っていた。けど、年上の人に、どうしてもと言われ、縋られては断れなかった。

寺の墓地で出会ったあのご婦人、――都筑^{つづき} 宇子^{たかこ}さんは、既に夫を亡くし、寂しいからと私を引き止めては、嫌々息子夫婦と同居していると思痴をこぼし、昔のアルバムも出して、色々と話し、見せてくれた。そして、何枚かの写真も折角だからと分けてくれた。

「遅くなってごめんなさい。はい、コレ。お土産。」

今の私の顔を見たら、誰でもこう例えるだろう。

――爽やかな五月晴れの様な輝いた笑顔――
と。

そんな顔でお土産の入った袋を、リビングのローテーブルの上にドサツと置けば、智の顔が不快そうに歪められた。心なしか、いつもより眉間の皺も多いような気もする。

「・・・、長野に行ってたのか？」

如何にも不機嫌そうな声で問い質され、少し胸が痛んだけれど、それは自分が悪いからその痛みは無視した。

（許してなんて、間違っても言えないわ。）

だから、なおさら私はいつもより笑顔を心がけた。

「ごめんなさい。急に一人で、何も言わないで出掛けちゃって、でも・・・、」

どうしても行きたかったの、と、続くはずだった言葉は、利依さんの激しい剣幕で遮られた。

「そうよ！！義姉さんはいつも勝手過ぎるのよ！！あのときだって、今回だって。なんで一人で長野になんて行ったのよ？」

両目を潤ませた利依さんが私に詰め寄り、私の胸元の服を掴み、私を詰った。

その利依さんの目は、寝不足なのか、泣いたせいなのか、真っ赤に染まっていた。

私はそれを見て、あえて抵抗しなかった。

詰って気が済むのなら幾らでも詰ってもいい。
殴って気が済むのなら、殴られてもいい。

だから、泣かないで欲しい。

（勝手よね。本当に。）

詰り、揺らし、泣く。

そんな興奮醒め止まらない利依さんを止め、諫めてくれたのは紘人さんだった。

ただし、私も彼にはしっかりと叱られた。

「感心しませんね、奥様。少なくとも弁護人である私には、事前に事情を説明してから行動して下さい。・・・、例の件もありますので。」

暗に仄めかされた事で、私は苦笑するしかなかった。

——結果が出たら、色々忙しくなる。もう少し考えてから行動しろ——

「・・・、ごめんなさい、本当に悪かったと思ってるわ。特に咲田さんには色々と無理難題や、無茶して貰ってるから。」

そう、本当に色々と、申し訳なく思うくらいに。

もう一度謝罪しようと、口を開きかけた私は、右手につけているブレスレットを見て、思い出した。

(そうだ、あの中には……。)

ローテブルに置いた荷物の中から鞆を取り、古いお守り袋と小さい紙袋を出し、紘人さんに渡した。

「はい、コレ。いつものお礼。役に立つかしら？」

誰にも気づかれないうちにアイコンタクトを交わし、お土産の紙袋の中身を確認させれば、紘人さんは一瞬驚いたものの、すぐにかつりと、いつもの様に微笑んだ。

「……、今回だけは、この【お土産】に免じて、許して差し上げます。ですが今回だけです。仏の顔も三度までです。」

彼は、変な所で厭味だ。

私は彼に、既にもう二度の無茶ぶりを見逃し、赦してもらっている。

(ケチくさい。心狭いんだから。)

でも、それを綾橋に知られては困るので、紘人さんは言葉を選んでくれる。

それを解っているから、心ではぶつぶつ言いながらも、私は頭を下げる。

「恩に着ます。ありがとうございます。」

頭を深々と下げた私を、満足げに見た紘人さんは、私が渡したモ

ノを鞆にしつかりと入れ、利依さんが淹れた紅茶を飲むため、ソファに腰掛けた。勿論、さりげなく利依さんの隣に。

（ほんっと、解りやすいんだか、難いんだか。）

それを見て、笑いそうになるのを誤魔化すため、いまだ不機嫌そうにしている智の胸に抱きついた。

するとどうだろう。

抱き着いて初めて解った心の充足感。

離れていた間、何となく物足りなかった感覚。

（ああ。そうなんだ。）

すとな、と、心がひどく簡単に、それだけで納得した。

それは唯一の伴侶だと、自分の心に、居るか居ないか解らない神様に誓った愛しい人の温もりが、近くになかったから。

その満たされた感覚の中で、私は穏やかな口調で、智に抱き着いたまま謝罪した。

♪、20 ひと時の団欒？（後書き）

本調子ではないので、ここで区切ります。

♪、21 ひと時の団欒？（前書き）

何かもう、サブタイトルが思い浮かばないんですけど・・・。

♪ 21 ひと時の団欒？

この人の温もりさえあれば、生きていけると思ったのは、いつからだっただろうか。

「ごめんなさい、どうしても私一人で行きたかったから。今はまだ詳しくは言えないけど、私のご先祖様に報告とお礼の挨拶してきたの。」

（私も結局は女なのね。）

狡猾で、卑怯で、計算して。そんな所をよく動物の狐に例えられる女性。自分だけはどうならないように心掛けていたのに、結局はアッサリとその手段を取ってしまった。

縋るような口調と眼差しは結婚するまでの23年間で培ってきたものだから、私本人でさえ見抜けない、限りなく本物に近い偽物。

本当に私が助けて欲しい時は、誰も気づいてはくれないし、誰も私の周りにはいない。

だから私は他人に期待しないようにずっと生きてきた。
なのに。

（期待してたの？）

ここ最近の微温湯の様な生活を送っていた私は、いつもなら背中すぐに智の両腕が回るのに、今回はそれがなかった、と悲しく思い、それがまた、私自身を卑屈にさせ、弱くさせる。

（身勝手なくせに、赦してもらおうなんて思ってなんてなかったのに。）

私と智の間に流れた沈黙は、ここ一・二ヶ月の中では、一番長かったと思う。

そのせいか、私は無意識に抱きついていていた智から離れ、後ろに一步後退し、顔を俯けていた。

まるで、以前のように冷え切った関係に戻ってしまうのではないかと、思ってしまうくらいに冷たい空気と沈黙。

その異様な緊張感を孕んだ状況を、呆気なく打破してくれたのは、いつでも無邪気で悪気のない、小さな天使のあやめちゃんだった。

「おねえちゃん、なくひつようなんてないよ？おねえちゃんはわるくないし、おにいちゃんは、おねえちゃんにおいていかれてすねてるだけだもん。」

私の身体にぴとっと張り付いてきたあやめちゃんの体温に勇気づけられ、私はそこでようやく智の顔を窺い見た。

智の表情は、いつにもまして無表情に近く、それでも眉間の皺は常より深く刻み込まれ、瞳には不満げな色が浮かんでいた。

きっと、ここは結局許してくれるだろう智に、ありがとうと本来なら言うべき処なのだろう。けど、智は視線を合わせてくれない。

これがおそらくは、智が、私が勝手な真似をしたことに対しての報復と仕返し。

（なら、私もその空気に従うまで。）

私は智の顔から視線を離し、私に抱きついてるあやめちゃんの頭に手を乗せ、その頭を優しく、でも、少しだけ拗ねたように撫で、よっ、と、力を込め抱きあげた。

「あやめちゃん、今日は一緒に寝てくれる？お姉ちゃん、一人だと寒くて寝れないの。」

あやめちゃんがとびっきりの笑顔を浮かべた時、私はあやめちゃんの体温で癒されていた。

あやめちゃんだけではないだろうけど、特に小さな子供の温もりは、私を慰め、癒し、勇気づけてくれて、幸せにしてくれる。

だから、本音が言葉として、無意識にでも出ていたのだと思う。

「私もあやめちゃんみたいな可愛い女の子が欲しかったな。」

その、諦めにも似た弱々しい呟きは、皆にも聞こえていたのだと思う。なかでも、あやめちゃんは弱々しくも、近くにいたことで、よりダイレクトに聞こえていたと思う。

私が独自に病気の事を調べているのは、弁護士の絃人さんしか知らない事で、その絃人さんは、常に私の行動に協力的で、時には助言したり、私がしたミスもフォローもしてくれる。

現に、今もざわりと、異様な雰囲気と荒れた空気になりそうなところを、自然を装い、上手い言葉で私を援護してくれた。

「産めばいいのでは？まだ若いのですから、幾らでも産めるでしょうに。世間には40歳を超えても出産する事も珍しくなくなってますから。なんなら、産み分けの方法でも調べてみては如何です？」

——不用意に、言葉を漏らすな。

鋭くも、冷たい絃人さんの眼光に、気押されないように、ごくりと、口の中に溜った唾を飲み込み、引き攣りそうになりながらも、笑顔を崩さず、恥じらいを装いつつ、頷いた。

「そ、そうよね。時間があつたら調べてみようかしら。昔から子供は、一姫二太郎、が良いって言われてるものね。」

あははは、うふふふ。

二人して能天気を装い、笑いあえるのは、弁護士と依頼主と言うだけの信頼関係だけではなく、年齢的要素もあると思う。

その証拠に、私と絃人さんの携帯のストラップや、携帯の機種まで一緒だったりする。

但し、これは全くの偶然。

結局、私と絃人さんの、本音を隠すための冗談混じりの応戦は、途中食事挟み、家族そっち抜けで交わされ、それが終わったのは夜の十時を過ぎた頃。

「では奥様、また後日挨拶に伺います。——利依さん、奥様の事を宜しく願います。」

「いちいち言われなくても、義姉さんの事はアタシと兄さんが守るわよ!！」

いつもより殺気立って応戦する利依さんに、紘人は軽く瞠目し、そして私に苦笑を向けた。

「どうやら我らが綾橋のプリンスは、ご機嫌斜めの様ですね。」

「まあ、我らがプリンスだなんて。そう思ってるんでしたら、一刻も速く事務所の一つや二つを開いて、ここまで上ってらっしゃいでなければ、どこぞの蛮族に横から盗られてしましましてよ。頼りになるナイト様？」

「……」。――

(勝ったわ!！)

私のせいでそれが出来ない、遅れているのだという、その非常に恨めし気な睨む紘人さんを、利依さんと（これは私がわざと仕組んだ。）、あやめちゃんのお母さんで、紘人さんの姉・咲田さくた 侑里音ゆりね さんに玄関まで送らせた。

「青春ねえ。若いていいわねえ。利依さん、いつになったら気付くのかしら？」

ニヤニヤと、いつもより楽しげに悪どく笑う私を、智は不愉快そうに私を見ていた。

実際、私はいつもより大分楽しかった。

何せ、今日私が初めて言い負かした紘人さんは、滅多にそのクルな表情を崩さない、【法曹界の貴公子】と渾名され、色々な感情を向けられている人なのだから。

その彼を、私が言い負かした。

（これで喜ばない人はきつと詐欺よ。詐欺。）

ふふふ、と、明るく、悦に入っているように笑えるのは、きつと、あの二人を見ているからだろう。

あの二人を見ていると、自然と某猫と鼠の、会話のないアニメを思い出し、笑ってしまえるほど、気分が明るくなる。

さぞかしあの二人が結婚し、子供でも産まれたらば騒々しいだろう。意外と、彼は焼き餅妬きだから。

（そうになったら、垂涎モノの見ものだわね。）

にやりと、悪魔の笑いを浮かべ、によきつと、悪魔の尻尾を生えさせた時（気分的に）、智のその声が聞こえた。

「随分と機嫌が良さそうだな。そんなにアイツが好きか？」

智の的外れな問い質しも気にならないほど、私はあの二人が大好きで堪らない。

「うふふふ。あの紘人さんの悔しそうな顔、見ものだったわ。人の恋って、素晴らしいわね、智。」

「吉乃、答えになってない・・・てっ、まさか？」

私の顔を再度見て、智は自分の顔をその大きな手で覆い、大きな溜息を吐いて、苦笑に近い笑みを浮かべた。

「まさか、あの利依が、あの紘人にな・・・。アイツは昔から紘人には、常に歯向かってはいたが、まさかそれが・・・」

それが好意の裏返しだと思わなかったのも、考えなかったのも、智らしいと思う。

先が思い遣られると、深く溜め息をついた智は、ソファアに座りなおし、グラスに注いであったミネラルウォーターを一気に飲み干した。

智は余程驚き、困惑したのか、立て続けに水を飲み干した。

「そんなに驚く事かしら？ 私にはあの二人が、結構お似合いだと思うんだけど。」

智が驚くほど、私は驚かなかった。

二人が従兄妹だという前に、私には、最初から互に恋しあう男女にしか見えなかった。

二人は立派な成人なのだから、私や周りの人間が心配しなくても、結婚しようと思うなら結婚できる。

出来る事なら、二人が結婚し、子供が生まれるまでは生きていたい。

でも。

思い出すのは、退院が近付いたある日の、あの日、あの時、目にし、耳にした言葉。

幾ら名医だと言われてはいても、私を蝕んでいた病魔は、悪性のモノ。

先生は再発の可能性が低くなると言っただけで、再発は絶対しないと、誰も言っていないし、断言もしていない。

智や家族達は優しすぎる。

その優しさすぎる智達の心を守るため、私は知らない振りをし、その時まで貫き通す。

私は偶然話を聞いてしまった日に、それを誓い、その翌日に、先生達には、絶対に私以外の他の人にはこの事を言わないように、必死に頼み込んだ。

私の必死さを理解してくれたのか、先生達は渋々頷いてくれた。

『奥様、この事は……。』

『判ってるわ。私達は何も見なかった、聞かなかった。茨姫の様に、時が来るまで目を瞑り、耳を閉ざし、その時まで、健康な【綾橋吉乃】を演じて、その日を迎えたいの。だから、お願い……。』

誰にも言わないで、と、私は頭を下げた。

私の隣には、絃人さんがいた。

その時の絃人さんは、私のその言動を黙殺し、誰にも言わなかった。

彼は、本気で人の嫌がる事は決してしない。

だからこそ、彼を弁護人を選んだ。

過去の日を思い出し、沈みこんでいた私を正気にさせたのは、私を包む柑橘系のパルファンの香りと、その声だった。

「何を考えてる・・・、吉乃」

（バカ！！どうして今思い出すのよ！！）

自分で自分が許せない。そんな思いを抱えつつ、私は微笑んだ。

「・・・！も、勿論、それは利依さんのドレス姿よ？あれだけ胸があるなら、ドレスは選びたい放題ね。羨ましいわ。」

反応が遅れ、私が言葉に躓いたのは、智には気付かなかったと思う。

何故なら、私が自分の薄い胸を自分で触り、残念そうに溜息を吐いた私を、智は何も言わずに目を逸らしたから。

私はだから残酷な嘘をつき続け、真実を隠し、闇に覆い隠し通す。

総ては、私を愛して、心配してくれている人達の為よ。と、自分に言い聞かせながら。

暗に神は私に告げたのだろう。

己の身に降りかかった試練に耐え、乗り越えて見せろ。

と。

この時の事を、私が幸福感に包まれ、笑いながら「私の人生は、茨の道の様だったわ」と、言う事を、この時の私は思いもしていなかった。

♪、21 ひと時の団欒？（後書き）

次から3章ですよ。

3章は短いです。

♪、22 襲来？（前書き）

お気に入り登録、ありがとうございます。

♪、22 襲来？

どうして幸せは長続きしないのだろう。

職場に何事もなかったかのように復帰し、今日でなんだかんだで10日目。

私は以前より遥かに仕事に追われ、忙しく日常を過ごしていた。

私が何事もなく復職出来たのは、会長である綾橋のお義父様と、利依さんのお陰。

二人は、私が休んだのは病気療養であり、また、疲労の為の休養であると文章に認め、辞表を受理せず、破棄していた。

それに対し、多少のいざごさはあったものの、今、私が所属している総務課部の人達は、快く迎え入れてくれただけではなく、色々と私を頼ってくれた。

年明けには主任になるようにと、内示を受けている。

「菜々宮くん、あの資料は何処にやったかな？」

そう言って、自分の机の上を探し、頭をグシャグシャに掻いているのは、課長代理の鳥居とりい 美鈴さんみすず、38歳、男性。

私はパソコン画面から視線を離さずに、鳥居さんが捜していそうな資料を頭の中で検索し、それらのありかを伝えた。

「マーケティング部の資料でしたら、今作り直しています。常務のインタビュー関連でしたら、課長のデスクの上にある赤いファイルに綴じてあります。」

「ああ、あった、あった。これか。」

助かった、と、のほほんとした笑みを浮かべながら、高速でインタビュー記事の文章を、パソコン画面に立ち上げていく鳥居さん。

（こんなに忙しかったかしら？）

総務部は比較的楽な部署だった記憶がある。

それなのに、いざ私が仕事に復帰してみれば、私を待ち構えていたのは、同僚達の涙ながらの愚痴と文句、そして、天につく程までに山積した色々なデータや、書類の山。

涙ながらに詰られ、心配され、頼られ、詰め寄られ。

私が配属されている部署は、普段は暇で、退屈で、地味な総務部。

それなのにどうしてだろうかと思えば・・・。

「もうすぐボーナスの時期ですねえ。」

と、相変わらずのほほんとした鳥居課長代理の声。

そう、ウチの会社はもうすぐボーナスが支払われる。

去年までは私はそれに全く関与していなかった。
それが今年は、課長の長期出張に伴い、私や他の人達にそれらの業務が降りかかってきた。

（課長って、実は凄かったのね・・・。）

三日前から出張に行った野島課長。

いつもどこかふわふわして、掴み所のない課長。その人がいないだけで、こんなにも忙しい。

と、そんな所に。

「お疲れ様でえゝす♪センパイ、お仕事の復帰、おめでとうございまゝすVV」

（っ、疲れる、本当に疲れる。）

マンガみたいに、語尾にハートマークを飛ばしているんじゃないかと思われるテンションで、声を掛けてきたこの奇特な女の子の後輩は、堂々と玉の輿婚を宣言し、あまつさえ、自分にとっての恋愛とは、自分を作るステータスの一つだと断言し、唯我独尊・自分至上主義の旗を大きく掲げ、いつも違う男性社員と一緒にいる。

「七海い、頑張ったンですよ？センパイが休んでた間に、社内報、2本も書いたちゃいましたあゝ。」

ぶりぶりの、その超ぶりっこな口調と、甘え、媚びた様な声の彼

女・千代田^{ちよだ} 七海^{ななみ}、20歳は、今年の春、女子短大を卒業し、新規採用された社員だ。

この彼女の見かけや言動に反し、実際の彼女は生真面目で、そして強がりの寂しがり屋だ。

それを知らない一部の女子社員から、謂れない非常に陰湿で、心ない虐めを受けている事も、誰にも言わずにひたすら耐えている。

パソコンのキーボードを、朝から休み無くカタカタと弾いていた私は、彼女の言葉を聞いて、顔を上げて微笑を浮かべた。

「そう、貴女もやれば出来るじゃない。良くやったわね、千代田さん」

私は普通に微笑んで、彼女を労っただけのつもりだった。

なのに、その途端、何故か彼女は頬を赤らめ、もじもじとし始めた。

（な、何？）

ここは照れるような所ではないし、照れるような事も言った覚えも、した覚えもない。

私が困惑し、千代田さんを見てみると、それらを見ていた他の社員は、あからさまな溜息を深々と吐き、呆れ果てた顔をした。

♪、22 襲来？（後書き）

うん、長いし、肩も痛いので、今日はここまで。

♪、**23 襲来？（前書き）**

遅れてすみません。

♪、23 襲来？

無知と無自覚は同罪だと言っていたのは、誰だっただろうか。

滑らかで、透明感のある頬を愛らしく赤く染め、もじもじしながら私を見つめる後輩と、そんな後輩を、困惑した面持ちで見つめ返す私を、なんと言っているか判らないと苦笑し、嘆息する同僚や上司達。

私は更に、その雰囲気一人でイライラした。

（一体、何なのよ。私が何かしたっていうの？）

ただでさえ仕事に復帰したてで、その上、輪を掛けたように忙しい時だというのに、無駄な時間は取られなくなかった。

そんな私の機嫌を読み取ったかのように、その基となった後輩が口を開いた。

「社長が先輩にベタ惚れなのも、七海、今なら、すっごく頷けますうゝvv」

七海いゝ、偶然観ちゃったんですよー。センパイ、昨日社長室で社長とスッゴいキスしてましたよねゝ？あれって、あのアトだったんですか？先輩の服、乱れてたしいゝ。

その口をすぐに覆ってやりたかった。

でも、その悪気なくきゃぴきゃぴはしゃいでいる彼女を、私が止めようとしたのなら、それはそうですと、自ら肯定するような事だから出来ない。

事実、私は昨日の昼休み智から社長室に呼ばれ、一応勤務中だというのに、決して口に出して話せない行為は、断り、拒みきれずに流され、してしまった記憶はある。

（死んだってそれは認められないわ！！第一、恥ずかしいじゃない！！）

それに、社長である智と私は結婚している事実を隠している。なのに、どうして・・・。

「せんぱーい、社長さんはどんな風なんですかあゝ？参考に七海にだけ教えて下さゝい。」

「千代田さん！！」

「仕事に戻りなさい！！」と、続くはずだった私の言葉尻を、彼女はさっと遮り、にこおーっ、と微笑んで、爆弾を放り投げてきた。

「あゝ、センパイ、もしかして照れてるんですかあゝ？赤くなっちゃって、可愛いですうゝ」

（くっ、なんなの！？なに言っても無駄じゃない。論破されちゃうわ。）

彼女には、口で勝てない。

私はその時既に、無意識に彼女に白旗を掲げていたのかもしれない。だから口がつい滑ってしまったに違いない。

「きっと社長さんなら、三回は平気でやっちゃいそうですねえ。」

（三回？）

「三回で済めば良い方よ……。」

そう。三回で終わればね……？

と、つい小さな声で零してしまった本音。

その本音は、本当に、小さくて小さくて、皆に聞こえるはず様な声量ではなかった。なのに、そんな私の声を、その場にいた人達は聞き耳を立てていて、結果、暫く部署内は会話に花が咲いた。

その会話の内容は、勿論、カップルや夫婦間の夜の事情やら、出会いなど多岐に渡る。

もはや、暴露大会に近いかもしれない。

出会いはいつ、何処でだとか、週に何回会ってるか、だの。

きっと、少し前の私だったのなら、そんな日常生活の、しかもそんな濃い恋愛トークには参加しなかっただろう。

だから、なおさら盛り上がったのかもしれない。彼らにも、悪意はない。

「そう言えば社長と言えば、ついさっき、結構な（化粧の濃い）美女と腕を組んで歩いてたぜ？（嫌々に見えたけど）」

「俺はキスしてるところを見た。（その後、直ぐに忌々しそうに拭ってたけどな。）」

「あっ、俺は子供という所を見た！！（複雑そうな顔で）」

彼らは顔を見合わせ、コレって浮気になるのかな？と、ちょっと騒ぎ、私の様子を窺ってきた。

私はそんな彼らに、内心とは程遠い笑みを浮かべて見せた。

腹は立たないのかと問われれば、それはすぐに『ノー』と言える。

けど。

お腹を撫で、思って、考えてしまったのは。

私には与えられてあげられない、『家族』という温もりや、穏やかさ、幸せを、あの人ならば、あの女なら、智に与えられてあげられる。

ぐっ、と、突然競り上がってきた、苛立ちと吐き気を何とかして抑えようとした時、千代田さんがそんな私の体調の変化に気付いた。

「センパイ！？大丈夫ですか？顔色真っ青じゃないですか！！誰か、救急車！！」

千代田さんの声は聞こえたけど、私は直ぐには返事が出来なかった。

♪、**23 襲来？（後書き）**

短くて済みません。後日、更新します。

♪、24 襲来？（前書き）

更新、更新。

♪、24 襲来？

ぐるぐると回る世界に、視界。
モヤモヤとする聴覚。

感じられるのは、立ってられないくらいの眩暈と、気持ち悪さと、自分の不甲斐ない身体へ対する嫌悪感。

そのあまりにも酷い眩暈に立ってられなくなった私は、傍で私の身体を支えていてくれていた千代田さんに凭れ掛るようにして、姿勢を崩した。

（ああ、やっぱり・・・。）

悲しいけれど、私の病状は良くなる処か、悪化の道を歩んでいる
としか思えない。

なのに、どんどん冷えていく身体に反し、身体の内側は必死に生きようと熱くなる。

苦しい呼吸に、乱れる鼓動。

「センパイっ！！ 菜々宮センパイ、大丈夫ですか？ しっかりして下さい。誰か、社長を呼んでっ！！」

いつものぶりぶりの甘え、媚びった千代田さんとは正反対の様子に、私がいた部屋は、一気に騒然となった。

そんな中、私と言えば、身体は苦しい、助けてと訴えているのに、頭と理性は急速に冷静になりつつあった。

そう、それはきつと、彼女が見えたから。

虚ろになりつつある意識を、強引に覚醒させ、ぐるぐると回る視界を定め、顔を上げる。

そして、目に飛び込んできたのは。

艶々とした髪が綺麗にセットされ、大きく咲いた薔薇を思わせるかのような笑みに、男性ならば、その完璧で妖艶な肢体を抱きたいと思わせる、かつての智の恋人と思われる、あの女。

「あら、何か言いたそうねえ？」

私の刺すような視線を感じ取ったのか、それとも最初から私をバカにしに来たのか、あの女は、当然の様に「返して貰うわよ。」と笑った。

気持ち悪くて、気持ち悪くて、何も言えない私を、あの女は、侮蔑と蔑みの含んだ眼差しで、毒を放ってきた。

「貴女、そんな身体で綾橋の跡取りなんて産めるの？私、知ってるのよ？貴女が子供を産めないの。だから、私が代わりに産んであげる。あなたは所詮、私の代わりだたんだから。」

——コツン、コツン。

私の方へ、確実に近寄ってくるヒールの音。

そしてついに、その足音は私の手を踏むという暴挙で止められた。

手の甲に走る痛烈な痛みに、顔が歪む。

（どうしてこんな人が・・・。）

人を人とも認めない、人を蔑む事しか知らない冷たい瞳の女、城^{たち}花^{ばな}万季^{まき}。

そんな女と、どうして智は交際していたのだろう。

（私しか好きじゃないって、言ってたじゃないっつー!!）

ドロドロと、私の中でとぐろを巻き始める黒い靄。

それを助長させているのは、こっそりと私が調べて、得た情報。

・――城花 万季と、綾橋 智の間には、一人の児女が産れている・

誰も知らないし、智だって知らない秘された事実。

それを私に教えてくれたのは、あの女と付き合いがあると言った女性。

彼女は、興信所の前で、右往左往していた私を見かけ、声を掛け、話を聞いてくれた。

とても、あの女とは縁がなさそうな人だった。

私が無反応だったことに腹を立てたのか、彼女は私の髪を鷲掴み、無理矢理顔を上げさせ、私を侮辱した。

「ふん、智ったら、何処が良かったのかしら。こんな子供みたいな貧相な女」

合せられた視線に、私は驚いた。

彼女には人としての、他者へ対する、情愛や慈しみの感情が欠片もみられなかった。

その酷な事実、あの悪夢の様な日の事をゆっくりと思い出してみよう。

そんな私の傍で、千代田さんが私の代わりにあの女に必死に応戦してくれていた事を、私は後に知った。

あの女、――万季が連れていた女の子は、4歳児にしては、その年齢にそぐわぬ、随分と小さい身体付きだった。

もしかしたら、彼女は子どもを愛せないのかもしれない。そればかりか、智の大切な家族も。

その思いが私の中で生れた時、私が思い、感じたのは。

【あなた、本当に諦められるの？】

（だって、私じゃ智の子供を産んであげられない。）

【こんな女に、渡しても良いって、本当に思ってるの？】

（だって、そうするしか……。綾橋の為には……。）

【綾橋の為？笑わせないで。あなたは怖くて逃げてるだけ。彼に嫌われるのが怖くて逃げてるだけなのよ。】

（そうよ、それがいけない事だって言うの！？）

声なき声は、私の中で高らかに笑い、そしてその真っ赤な唇を吊り上げ、私に歌い掛けるように私の耳元で囁いた。

【盗られるわよ？今度こそ、永遠に。それで本当に良いの？吉乃。】

名前を呼ばれた様な気がして、乱れて苦しい呼吸を何とか整えていた私は、その声がする方へ目を向けた。

そこには、他の人からしてみれば、何もない空間にしか見えなかった。

けど。

私には、どろりとした、得体の知れない、不気味で黒い靄に包まれたもう一人の私がいて、いるように見えていて、そのもう一人の私は、脚を優雅に組み、蠱惑的な笑みを浮かべ、暗い闇を背負い、椅子に座っているかのような姿勢で、ふわふわと浮かんでいた。

もう一人の私は、私を憐れむのではなく、私が無意識の内に避け、逃げていた本音を、容赦なく私に突き付けてくる。

【恐いのよね？また棄てられるのが。菜々宮の家みたいに利用されるだけ利用され、捨てられるのが。でも、今戦わなかったら、またあなたは逃げて、戦わないのよ。今戦わないで、いつ戦うのよ。貴女^{わたし}はいつも逃げてただけだった。やっと、幸せになる為に巡り逢えた人なのに。貴女は自分の精神^{ココロ}を守る為だけに、その人を捨てようとしているのよ。】

それでも本当に諦めきれぬのなら、離婚するのね。

そう呟くと、もう一人の私は泡のように弾けて、それと同時に黒い靄も消え失せていた。

♪、24 襲来？（後書き）

やばい、終わらない。

1月まで移転できるんだろうか。
頑張れ、自分。

♪、25 拒否（前書き）

人は何かを得る度に、別な大切な何かを失う。

それを人は『等価交換』と呼ぶ。

♪、25 拒否

その時の私には、きっと誰か、別人が乗り移っていたのかもしれない。

＊

込み上がってくる感情のまま、私はそのままそれに従い、振る舞った。

ふつふつと、私の中から込上げてきたのは、暗い感情と人を蔑む笑い。

ふふふ、と、暗く、そして、蔑みの含んだ笑いは、その場にいた人達を凍りつかせる威力には充分だった。

（私ったら、何度同じ事を繰り返せば気が済むのかしらね。）

私はまた自分の事しか考えていなかった。

あれほど、あの人を悲しませない、傷付けないと誓っておきながら、また自分だけの事を考え、卑怯にも逃げようとしていた。

（ほんと、私は自分勝手だ。）

ぎりりと、私は反抗すべく、私の髪を鷲掴んでいるあの女の手甲に、力の限り思いつきり爪を立て、睨み上げた。

ここで私が逃げては、あの誓いは無意味になってしまう。
それだけは避けなければならない。

決して離れたりなんかしないと、確かに誓ったのだから。

「誰が、誰が渡すモノですか！！貴女なんかには智は渡さないわ。大
体、智は私の夫だし、貴女を飾る安いブランド物じゃないのよ！！」

そう。私は智の妻で、智は私の夫。

そして智は、譲るとか、渡すとか、返すとか言えるような存在で
はない。

智はモノではなく、きちんとした一個人の人間なのだから。

もし本当に愛しているのなら、その相手を返せと、モノ扱いしな
いはず。

私のその突然の反撃に、私を掴んでいた人、――万季は、私の言
葉に逆上したらしく、勢いよくあいていた片手を振り上げ、そのま
ま右頬に振り下ろした。

そして・・・。

ーバチンッ

大きく、乾いた音は、総務課の部屋中に響いた。

でも、いつまでたっても、私の頬は痛みだすことも、熱くなるこ

とは無かった。

その不可思議な現象の答えを得るため、私は痛みの為、覚悟して閉じていた瞳を開け、その答えを知るなり、目を大きく丸め、口を大きく広げ、ぽかんとしてしまった。

（どうして、部長が？）

私と千代田さんを庇うようにして、私とあの女の間に入り、代わりに叩かれていたのは、総務部の部長・梨雫^{なした} 秦部長^{じん}だった。

梨雫部長は、私が無事であるかどうかを確かめると、その大きくて暖かい掌を私の頭に乗せ、ポンポンと軽く叩き撫ぜ、呆れ混じりの溜め息を吐いた。

「綾橋、社長には黙っておいてやるから、仮眠室で休んでこい。おい千代田、お前は綾橋がちゃんと休むように見張っておけ。特別に有給にしてやる。」

それが決定事項だと言わんばかりに、数人の社員達に、私と千代田さんを仮眠室に追いやらせ、一方で近くにいた女子社員に、電話で警備員を呼ぶように命じ、部長は警備員が来るまで、二・三人の男性社員らと城花万季を拘束し、不審者扱いし、どこぞへと引き連れて行った。

（流石です、部長。）

あれだけ迅速な行動、処置が出来るには、きちんと理由がある。

梨雫部長は、元暴走族の総長で、元・歌舞伎町にあるクラブのバ

ーテンダーだったのを、智にその素早い動作と知識力、行動力、判断力を買われ、ヘッドハンティングされ、去年、異例の役職付で中途入社してきた人だ。

それを知っているのは、ごく一部の限られた人達だけだ。

私がそれを知っているのは、創業者一族の伴侶だからにすぎない。

だが、とりあえずの脅威は去った。

私は休憩室のベッドに押し倒されるなり（千代田さんが私を押し倒した。）、呆気なく眠りの園へと旅立っていた。

♪、25 拒否（後書き）

明日も更新しますので、今日はここまで。

♪、26 同盟と親友（前書き）

負けたくない・・・。

ただ、それだけ。

♪、26 同盟と親友

どれだけ時間が経った頃だろうか。

煙草独特の匂いに、無理矢理意識を覚醒させられ、まだ重いと渋る臉を開けば、千代田さんが硬く、難しそうな顔つきで煙草を片手に、何か深く考え込んでいた。

「あ、センパイ、起しちゃいましたか？」

なのに、千代田さんは一瞬にして、いつもの笑顔を浮かべようとして、でも顔をクシヤリと歪め、失敗して、そんな彼女の指先は、わずかに震えていた。

煙草自体は何本目なのか、千代田さんが今持っている煙草の先端には火が付いていなかった。

千代田さんはライターを制服のポケットから出すと、外に行きませんか、と、起きたばかりの私に誘いを掛けてきて、話がしたいんです。と、小さく呟いた。

そこにいた千代田さんは、いつもの千代田さんではなく、一人で孤独に耐えている、弱い彼女の方だった。

私はまだ寝ていたいと我儘な身体に鞭を打ち、そんな彼女の誘いを迷うことなく受け、休憩室から屋上へと場所を変えた。

その際、エレベータを途中まで使い、社長室のあるフロアからは階段を使ったが、誰にも会わなかった。

千代田さんは屋上に出るなり、ライターで煙草に火を灯すなり、深く溜め息をついた。

その溜め息は、人生を諦めている敗者が吐くような、深く、悲しく、重たいものだった。

「部長って、成功者ですよ。社長にも気に入られてるし、仕事も的確で確実。しかも仕事をするのが早くて、容姿も完璧だから、女性社員には社長の次に人気がある。」

千代田さんはそこで一端言葉を区切り、煙草の煙を吸い込んだ。

今の千代田さんは、私に言葉を望んでいないのは、直ぐに判った。だから私は何も言わず、彼女の言葉に耳を傾けていた。

彼女が求めているのは、おそらく同意だけで、批判などではない。

同意できるかどうかは定かではないけれど。

千代田さんは私の言葉を求めている証拠に、ただ淡々と話し続ける。

その姿は、懺悔にも似ていた。

「実は私、部長とお見合いしたんです。だけど、私は断りました。どうしてだと思えます？ 答えは簡単ですよ。先輩と同じで、私、子供が望めない身体なんです。中2の時だったかな、私、レイプされて、妊娠して、中絶しました。その影響なのかは判らないんですけど、子供が出来る可能性は無いと言われませんでしたけど、お医者さんは難しいだろうって。」

いつもとは百八十度異なる千代田さんの姿と態度は、私には叶わぬ恋に苦悩する女性に見えた。

痛い程の沈黙が、私と千代田さんの間に流れた。でも、その沈黙も長くは続かなかった。

千代田さんは自嘲にも似た笑みを浮かべると、まるで今までため込んできたモノを吐きだすように、再び言葉を紡ぎ出し始め、己の意識に反し溢れ出してきた涙をグイッと袖で拭った。

「だから私、最初は先輩が嫌いでした。私より大人で、綺麗で、大人で、恵まれてるのに、社長にも想われてるのに、何が不満なんだった。真正面から向き合おうとしない先輩が本当に嫌いで。でも、先輩が倒れたって聞いた時、入院の原因を知った時、私、心のどこかで喜んでたんです。ああ、先輩もなんだ、って。先輩も完璧じゃなかった。私と同じだって。好きだから近付けない、距離を置きたい。――社長を騙せても、私は騙されませんよ？」

(・・・ッ)

くると振り返って、私の瞳を覗き込んでくる千代田さんの暗い瞳は、私の心の中に音も無く忍び込み、何かを探り出すように笑む。「一人で闘うのは寂しくないですか？私の血の繋がらないお姉ちゃん、家族から見放されて、一人で苦しんで逝きました。白血病で。」

――白血病。

それは血液の癌ともいわれ、癌の中でも厄介な部類で、医療が発達した今でも、完治は難しい死を伴う病。

「私は一人でもう闘えませんし、闘うのは恐くて、辛くて、寂しいんです。先輩の瞳も怖い、助けてって、一人じゃ耐えきれないって、叫んでる。」

だからお願いします、私と一緒に、私も一緒に闘わせて下さいと、絶るように言われ、私は驚き半分、納得しました。

あのいつも演じている『千代田 七海』は、恐怖心から逃れるため。

ぶりっこを演じているのは、部長から嫌われる為。

（この子は、私と一緒にだと言ってくれた。）

子供を産めないと、己の不利にも、女として恥にもなる事もさらに、前は嫌いだっただ、と本音をぶつけてくれた千代田さん。

（この子なら・・・。）

私は千代田さんの提案に承諾の意を込めて、偽りではなく、本物の笑みを浮かべ、大きく頷いた。

この瞬間、私と千代田さんの間には不思議な同盟と、親友としての情愛が芽生え、お互いの仲は結ばれた。

*

千代田さんは吃驚する位、クールな女の子だった。いや、クールというより、私より更に冷めた、冷淡な思考の持ち主で、人格だった。

「吉乃さんって、基本的に私と考え方が一緒ですよ。本当に好きになった相手には、薄くて頑丈な鉄壁の壁を作って、笑顔で騙す。それで嫌われるのを待ってるのに、嫌われたくない。我儘なことだっって判ってるのに、こっちを見て欲しい。」

すっかり打ち解けたのか、千代田さんは、あの媚びた、ブリブリで甘い声や口調で話すことなく、サバサバとした口調でマシンガントークを続けている。

聞いたところによれば、あの口調は非常に疲れる上、頭が痛くなるそう。

（それもそうよね。）

そんな千代田さんは、会話中でも煙草を離さず、常に紫煙を煙らせている。

「私があんな媚びた、馬鹿けた言動を振る舞ってれば、部長の家の方から縁談の話を断ってくれるって期待してるんです。部長と私の関係、知ってますか？血の繋がらない、叔父と姪なんですよ。」

最初は死んだ方の姉が欲しかったみたいですけど、と語る千代田さんは、仄暗い笑みを浮かべた。

更に千代田さんは、知ってますか？と、続けた。

「私って、17歳の時に今の両親と養子縁組したんです。姉の代わりに資産家に嫁ぐ人形を探してるって知らず。それが嫌で、短大卒業と同時にこっちに逃げてきたのに、部長がいて。最悪。」

「千代田さん、いいえ、七海、あなた、恋愛以前に、人と関わる事からもう嫌なのね。私もそうなの。――煙草、一本貰える？」

私の発言に、七海の瞳が、くっ、と、見開かれた。でも、それは次第にいたずらっ子の様に、楽しい光を宿し、私に煙草をくれた。

「良いんですか？ 煙草なんて吸っちゃって。癌だったんですよ？ 進行性の」

「今更よ。それに進行性じゃなくて、ただの悪性。まあ、今は再発してないけど、どっちみっち、私の寿命はたかが知れてるのよ。それに私、16歳の時から隠れて吸ってたのよ。両親はおろか、智だって気付いてないわよ。知ってるのは梨雫部長と、七海だけね。」

今時、真っ更で真っ白なヒロインなんていない。

そんなヒロインとのロマンスなんて、誰が注目するだろうか。

そんな甘々で、べたべたなロマンスが見たければ、自分で体験すればいい。

人は影があるからこそ、そこを見て恋に落ちる。また、近くにいたいとも思う。

少なくとも、私は恋がそういうものだと思います、考えている。

ふーっ、と、紫煙を思いっきり吐き出せば、頭が少しはつきりする。

喫煙自体久しぶりだからか、少し気分も浮上する。

「社長と夫婦だったのは驚きでしたけど、離婚はしないんですか？」

「どうかしら。愛されてるのは知ってるし、私も愛してるけど、それでも上手くいかなくて別れる人達はいるし。必ずしも付き合ったり、結婚したり、離婚するのが正解だとは思わない。私は今、智と夫婦だけど、それに少しだけ後悔してる所よ。騙してたり、隠してる罪悪感もあるし。」

今日みたいに、智の過去に触れる日がある度、私は夫婦ゆえに、醜い感情を胸に宿し、智を束縛する。

それでも離したくない、離れたくないと思うので、恋とは恐ろしく、厄介な代物だ。

過去は誰にも変えられないというのに。

（厄介だわ、本当に。）

すっかり短くなった煙草の火を揉み消し、七海と休憩室に戻るべく、屋上の出口へ振り向き、私は驚いた。

神様は相当、私を虐めたいらしい。

なんと、屋上の入り口には、憤りも露な、男性が二人も立っていたのだから。

♪、26 同盟と親友（後書き）

次回は明日、更新。

♪、27 あふれた闇、壊れた心？（前書き）

何とか、間に合うかも？

♪、27 あふれた闇、壊れた心？

ピカピカに磨かれたテーブルに、こまめに手入れをされた革張りのソファ―。

「何か言いたい事はあるか？二人とも。」

朗々と、でも、淡々と社長室に響く、社長としての智の声。

この社長室に入れるのは、社長に入室を許された人と、彼の秘書だけ。

その特別な空間に、私と七海、智と梨雫部長は、向き合う様にしてソファに座っている。

七海と私はあの後すぐに智と梨雫部長に引き連れられ、この社長室にやって来た。

七海は機嫌が悪いのか、ものすごく不機嫌そうにクッションを胸に抱いて、智と部長から顔を逸らしている。

そんな七海を、部長はさっきからずっと見つめている。

何も知らない人から見れば、睨んでいるとしか思えないだろう部長の瞳は、それでも、七海の事を熱く見つめている。

私に解かるのは、何故なのかは解らない。だけど、解る。

（それも切ないわね・・・。）

部長は本当に七海の事が好きな様だ。

「何も話す事なんてありません。アタシと吉乃は女のコ同士のお喋りしてただけです。ね？吉乃。」

「え？あ、そうね。普通に話してただけね。確かに。」

私の同意に、可愛い顔を仏頂面にしていた七海は、少しはにかみ、頬を桃色に染めた。

私はその反応と、七海に名前を呼び捨てにされた事が嬉しくて、頬が緩んでしまいそうになった。

でも、その微かな喜びと嬉しさを引き締める為、私は自分で自分の頬を抓った。

それと言うのも、今が尋問中だからだ。

「女のコ同士のお喋り、か。吉乃、不満があるのなら言ってみろ。」

智の、氷の如き突き刺すような視線と、口調。決して偽りや、言い訳を許さない瞳。

でも。

（全て話せるほど、人は清くない。）

誰にだって知られたくない、言いたくない事の一つや二つくらい、ある。

「昔話をしてただけよ。ねえ、七海。それなのに怒られるなんて、私達、何かしたかしら。」

「そうよね、この会社はろくにガールズトークも出来ないわ。」

私達って、可哀想。

と、二人で話を逸らす為、チクチク嫌味交じりの愚痴を吐きながらも、内心ひやひやしていた。

一体、いつ、どこから話を聞いていたのだろう。

それによって、言い訳の言葉が、取るべき態度が違ってくる。

私達の態度をどう取ったのか、智は思いつき溜息を吐き、社長室に備えてある冷蔵庫から、ミネラルウォーターを二本取り出し、私と七海に投げ渡した。

その放り投げられたペットボトルを手に二人で困惑していると、智が静かな声で「飲め」と促してきた。

「吉乃、お前は確か体調不良で、休憩室で休むように命じられていたはずだ。なのにどうして屋上で煙草を吸っている。不満があるから、煙草を吸っていたんだろう？」

「それでも不満はないと言い張るのか？」と、問われ、何と答えていいか迷った私は、結局答える事を避け、水を飲んだ。

「煙草を止めろとは言わない。だが控えろ。お義姉さん達も心配している」

ピキン、と、何かに輝が入る音が聴こえた様な気がした。

（今、なんて言ったの・・・？）

智は今、お義姉さん達、と、言わなかっただろうか。

あの日、縁を切ったはずの人達を。

不愉快さとおかしさで、くつくつと低い笑いが、失笑が漏れてしまった。

（血の？がりがない人が姉？人を打つ女が母親？娘に手を出して孕ませるのが父親だと言うの？）

確かに傍から見れば、あの人達はさぞかし理想の良い家族だった事だろう。

でも実際は、あの人達は私の家族でも、親でもなんでもなかった。

婚約が決定した時、そして、建川先生と初めて会った時、改めて以前調べた結果を、紘人さんと確認した時、私は救われた様な気がした。

ああ、私は実の父親に犯されてたのではない。

両親に愛されていた訳でもない。

私は、独りだ。

鑑定結果の書類は、月曜日に全て揃った。

その書類に記されてあった結果に、私は安堵して、悲しくなった。

顔しか知らないお母さん。

貴女は今、どんな思いをしているのでしょうか。

私を見て、悲しんではいけないでしょうか。

育てて貰った人達に、悪意しか持てない私を、感謝も出来ない冷たい娘だとは思ってないでしょうか。

都筑さんから形見分けで貰った指輪を、虚ろな瞳で見降ろす。

お母さんが初めて建川先生とデートした夏祭りで買って貰った、おもちゃの指輪。

「その指輪、綺麗。誰に貰ったの？」

七海のその声も聞こえなかった。

ただ、ピンクと翠と紫のプラスチックの石が埋め込まれた、安い指輪を見ていた。

いつもの私なら、七海の問いにも「そんな事無いわよ、貰いものよ」と、返せていただろうに、私はただずっと、何かを求めるように指輪を見続けていた。

（逢いたい、会いたい、あいたい。）

今、私は、とても貴女に逢いたい。

逢って、抱きしめて欲しい。

「どうした、具合でも悪くなったのか」

智の気遣う声が、なぜかとても神経に障った。

（何とも思っていない癖に。）

心配なんかしてない癖に。

元気な両親に妹、従兄に姪、健康な体に名誉。
全て持つてゐる人に、何が解るっていうの？)

勝手な八つ当たりだと人は言うだろうし、私も解っている。
だけど、一度溢れ出してしまった狂気は止まらない。

心も瞳も、紅い液体を流し続け、助けて、憎い、苦しいと叫んでいる。

なのに、智、アナタは・・・。

「暫く実家に帰ると良い。どうやら、今はお互いに距離が必要らしい。」

「・・・・・・・・・・っ」

私が智の問いに答えられず、智の提案に何も言わず、泣き声を押し殺している間に、智は勝手な判断を下そうとしていた。

そして。

「こんな時にも、お前は何も言わないんだな。俺は人形と結婚した訳じゃない。」

――もう、疲れた。

その一言が、私を狂わせた。

ビキビキと割れる、心の欠片。
噴出して止まらない、心の血。

（ああ、ステラレタ。アナタモワタシヲステルノネ？ワタシガワル
イカラ、キタナイカラ、ケガレテルカラ）

おかしくもないのに突如として湧きあがってきた哄笑。

（誰も、私を理解してくれない、みてくれない。）

あの日、誓った事さえも無意味になってしまった。

私は何をしたというのだろう。

何もしていないじゃないか。

浮気も、隠し子も、責めなかったじゃない。

なのに、なのに、どうして！！

「なら・・・、」

「吉乃？」

七海の不安げな声が、私の耳に留まる事無く、すり抜けてゆく。

「なら、最初っから結婚なんかしなきゃ良かったじゃない。何よ、
私だけが悪いって言うの？自分は隠し子だって居たくせに！！」

本音を心のままに言って、叫んでしまった瞬間、私の心は完全に
闇に吞まれ込み、壊れた。

それにいち早く気付いたのは、やはり、傍にいた七海だった。

「吉乃、大丈夫？」

「なにが？ よしのはへいきだよ？ だって、よしのはいつもひとりだもん。ままとぱぱがいなくてもよしのはなかなかったよ？」

ねえ、だから、ほめて？

子供還り、退行ともいえる症状に陥っていた私は、七海を母だと思ひ込んでいた。

♪、27 あふれた闇、壊れた心？（後書き）

長いなあ、次回に続く。

♪、28 あふれた闇、壊れた心？（前書き）

次回から4章になります。

♪ 28 あふれた闇、壊れた心？

（どうして抱きしめてくれないの？

私はそんなにいららない子供だったの？）

私が抱き着いてから、何も言わず、抱きしめ返してもくれない七海を、完全に顔しか知らない母と重ねていた私は、七海が私にどう反応していいか困惑しているとも知らずに、まるで幼い子供の様にどうしてかと、しつこく問い掛けていた。

「ねえ、よしののこと、きらいになったの？だからよしののことみないの？どうしたら、やさしくわらってくれるの？ぎゅっ、て、してくれるの？」

——ねえ、お願いだから、答えて。

私の執拗で幼稚な言動に、今まで困惑していた七海は、ようやく私が尋常ではないと判断したのか、それを確認すべく、智と部長に意見を求めた。

「ちよっ、ねえ、コレってヤバいんじゃないの？吉乃、アタシ達のこと、誰かと間違ってるんじゃない？」

（よしの、まちがってないもん、まちがってるのは、ママたちだもん。）

そんな意味を込め、更に七海の胸に顔を埋めれば、ようやく優しく、労わる様に七海が抱きしめ返してくれたので、壊れた私の心は安心した。

（やっぱり、ママはやさしい。ママはいそがしいんだから、メイワクかけちゃダメなのに。）

でも、嬉しくて。

ほっ、と、安堵の溜め息をついた時、その声は聞こえた。

「吉乃？」

いつも、私を苦しめる、悪魔の様な男の声。

その時の私には、智の全ては、あの忌々しい男となり変っていた。

「いやっ！！よしのにサワラナイでっ、」

いつも、いつも。

あんなに嫌だって言ってるのに。

「こんどよしのにさわったら、おまわりさんにいうんだから！！」

こうでも言わないと、あの男は止めない。

実際は言ったところで、あの男は止めなかった。

何故なら、当時の私はあの人の皮を被っていた人達に、学校以外の外出を禁じられ、半ば監禁されていたので、警察に助けを求めるのは不可能だった。

過去の記憶が蘇り、智に捨てられたと激しく思い込んだ壊れた私は、七海以外の人間を「気持ち悪い人達」と認識した。

どうしてこんな人たちが、ここに居るのが判らない。

七海に縋りながら、あの男と重なった智の手を打ち払った私は、智をあの憎い男と認識し、激しく拒絶した。

その拒否は、智が抱いていた闇を抉り、知らず知らず傷付けていた。

「・・・らい、きらい、きらいっ、みんなだいつきらい。」

いじわるなおねえちゃんも、いつもぶつおかあさまも、へんなことばかりするおとうさまも。

よしのの本当のパパとママは、きっと何処かにいる。

よしの、きいたもん。

かせいふのひとたちが、よしのがここのウチのこじゃないって。

――あら、吉乃。何をそんなに怯えてるの？

ママは最初から吉乃の傍に居たじゃないの。

不意に聞こえてきた声に、私は驚き、声を追った。すると、一人の女性が艶やかに微笑んでいた。

――なあゝに？そんな顔しちゃって。

え？

ママと一緒にいたいなの？

声にも出してないのに、その女性^{ヒト}は、私の心を読み取り、勝手に一方的な会話を続けていく。

——ママは嬉しいけど、我慢してくれる？

ママは嬉しいんだけど、きっと先生は泣いちゃうから。

（先生って、誰？）

心に浮かんだ疑問は、直ぐに答えが返ってきた。

——先生は先生よ。ママの恋人で、旦那さんで、吉乃のお父さん、パパよ。

先生はね、お医者様のクセに泣き虫なのよ？それに意地っ張りで、優しくて、笑顔が素敵なの。

って、あら、吉乃ったら、また泣く気？本当に先生にそっくりね。

勝手に溢れ出した涙を拭いもせず、ただ茫然としていた私の額をビシっ、と弾き、ころころと明るく笑うその女性。

——ねえ、吉乃。

吉乃はなんでこの人と結婚したの？

ふわりと微笑んだ女性が、ある男性を指差した。

私は本能的に、判らない、と、頭を振って応えた。

「しらない、しらない。よしの、そんなヒト、しらないもん。」

——頑固ねえ。

でも、子供の貴女には判らなくても、大人のアナタになら判ってるわよね？

真っ直ぐと突き刺さってくる視線に、私はハッとなり、自分を顧みた。

私はいつの間にか幼い私と、成長した今の私に別れ、幼い私は、女性のもとへ駆け寄り、泣きついた。

その時、七海は、急に黙り込み、失神した私の身体を慌てて支えながらも、智に噛みついていた。

勿論、その時の私に意識はなかった。

苦しそうに繰り返される浅い呼吸に、私の身体に滝のように流れ落ちる脂汗。

顔色は蒼白く、脈も飛び飛び。

「これだから男はっ！！何が疲れたよ。女一人も守れない癖に、幸せに出来もしない癖に、偉そうなこと言って。それで良くまあ隠し子やら、浮気やら。そんなんで良く社長なんてしてられるわね。見なさいよ、吉乃はこんなに痩せてるのよ？それに気付かないなんて、アンタなんて、夫失格よ。」

七海の言葉の氷の刃は、智の傷を抉り、尚且つ、そこに塩を刷り込むように容赦がなかった。

でも、智は、その時、小さく呟いていた。「あの女の子供は、俺の子ではない」と。

しかし、その言葉は七海の耳には届いては無かった。

「もし、吉乃が目覚めて、自分が忘れられていても、それは全部自己責任になるんだからね。」

七海はそれだけ言うと、智と部長を一切無視した。

＊

ふわふわ浮かんでいた人は、また、ころり、と、表情を変えた。
まるでそれが自分の事のように。

——あら、吉乃、あなた良いお友達持ったじゃない。あの子なら、
あなたを解ってくれるし、心の闇も理解してくれるわ。

（え？私の、心の闇？）

——そうよ。あなたの心の闇と、彼女の闇はとても似てるもの。
だから、焦らなくても、強がらなくても大丈夫なのよ。

その神々しい程の笑顔に、私は泣きたくなった。
でも、今、私の目の前にいる彼女も、どこか仄暗い色を瞳に浮か
べていた。

その瞳に暫く魅入られていた私は。

——ぱちん。

と、突然指が鳴らされた音で覚醒し、かと思えば、傍にいたはず

の智の姿が消えていた。

——ねえ、アナタはどうしたいの？全てを忘れたいと願うの？なら、その願い、私が叶えてあげるわよ？

辛いのは苦しいものね？

そう囁く彼女は、誘いかけるように優しく微笑み、幼い姿の私を優しく包み込む。

私は彼女の言葉に揺れていた。

（楽になれるの？あの人を忘れられるの？もう、苦しい思いをしなくて済むの？）

私はその甘い誘惑に勝てず、彼女に手を伸ばそうとした。
でも。

——愛してる・・・。

あの人の、言葉が、声が、震えるような、泣きそうな声が、した。
聞こえた。

それはほんの僅かな躊躇いだった。
時間にすれば、一秒にも満たない程の。

でも、それが私の出して、望んだ答えだったのかもしれない。

その答えが嬉しかったのか、私と瓜二つな女性は嬉しそうに笑った。

——ふふふ、あはは。あゝあ。おつかしい♪

本当に可笑しそうに、愉快そうに笑うその人を見て、私は少し不機嫌になった。

（こっちはあんなに悩んだのに・・・）

——吉乃、判ってるとは思うけど、私はもう死んでいるのよ？だから、最初からそんな魔法使いみたいな事も出来ないし、殺してもあげられない。

でも、死者だからこそ守らなければならない制約や、出来る事もあるの。

それに、私には願いがあるの……。その願いを叶える為、今、私はあなたの前に居るのよ。

薄く微笑みながら、それでも柔らかく、強く。

徐々に透き通っていくその人。

その人に手を伸ばし、抱きしめたいのに、私の体は、金縛りにあったかのように動かなかった。

——吉乃、私の愛する、たった一人の娘。

あなたは生きて幸せになりなさい。

自分の為、そして何より——の為に……。

もう、最後の方はあまり聞こえなかった。

もっと一緒にいたかったのに。

頭は拒否しているのに、それを許さないとばかりに、何かかが私

を覚醒させようと、現実世界に導こうとする。

——ふわり。

と、浮上する意識を最後に、温かく抱きしめられた事や、交わした会話の記憶は、病室で目を覚ました時には消えていた。

♪ 29 目覚めと行動？（前書き）

更新。

♪、29 目覚めと行動？

ばかりと開かれた視界。

その開かれた視界に映ったのは、私が少し前まで毎日いた部屋の景色。

でも、全く同じと言う訳でもなかった。

窓は開けられない様に鉄格子が嵌められてあり、私の手には逃げられないようなのか、銀の鎖が着いた手錠がつけられていて、窓には、何故かあるはずのものがなかった。

（なるほどね・・・）

カーテンがないのも、窓に鉄格子が嵌め込まれていて、手首に手錠が嵌められているのも、全ては自殺を防止する為なのだろう。

それから推測出来るのは、私が遂に智から見放され、厄介者として精神科病棟に放り込まれたという事。

でも、私は何故か絶望は感じていなかった。

むしろ、私を感じたのは、大きな安堵感と、自由と言う名の解放感の、狂喜にも似た感情。

これで悩む事、戦う事から逃れられる。

顔を窺い、他人に気を遣い、苦手な人付き合いや、料理もしなくても良い。

（良かったのよ、これで良かったのよ・・・。）

独りに戻っただけで、長すぎる夢から醒めただけ。

だから、今私の頬に伝わっているのは、悲しい涙なんかじゃない。
拘束されていなかった、震えている左手を天井に翳し、シーツの上
にパタリと落す。

時計もテレビも、何もない、世間から完全に隔離された空間。

（一人、本当に一人なのね・・・。）

そう改め思い、感じた時、私の中に生れたのは。

寂しい、寒い、怖い、という思いと。

——逢いたい

と言う、強い感情だった。

ならば、と、私はそれに突き動かされるかのように、今まで悩み、
先送りになっていた事を実行すべく、ナースコールを押した。

♪、29 目覚めと行動？（後書き）

短いですが、更新しました

♪ 30 目覚めと行動？（前書き）

絃人視点

♪ 30 目覚めと行動？

話したい事と、お願いしたい事があるから、会いに来て。と、俺の携帯に彼女から連絡が来たのは、彼女が強制入院させられた翌日だった。

その際に持ってきて。と、頼まれたのは主に三つ。

一つは預金などの通帳や、印鑑。

二つ目は衣類。

そして三つ目は、彼女、――奥様の出生に関する重要な書類。

それらを手早くまとめ（綾橋家の使用人には、止めてくれと泣き継られたが。）、依頼人である奥様こと、吉乃さんに会いに行ったのは、その日の午後。

「良く来てくれたわ。ありがとう。」

ふんわりあどけなく微笑む彼女には、影や悲しみの色もなく、純粹にきらきらと輝いていた。

「奥様、――いえ、吉乃さん、本当によろしいんですか？」

「ええ、良いの。漸く、漸く私は自由になれるんだから。あの忌まわしき家から解放されるのだから」

俺の問い掛けに、そう嬉しそうに微笑み、髪を切って、色を染め、ストリートパーマをかけた彼女は、もう俺の知っている弱々しい彼女ではなかった。

それに少しばかりの寂しさを感じている俺に椅子をすすめた彼女は、俺から受け取ったA4の茶封筒から数枚の書類を出し、ふつ、と微笑んで、「不思議ね・・・」と、小さく呟いた。

その呟きに俺が顔を向ければ、彼女は朗らかに説明してくれた。

「ずっと家族は別にいるとは思ってはいたけれど、まさか先生が、建川先生と、その最初の奥様が、私の実の両親だったなんてね・・・。ほんとに、ヒトの縁って不思議ね・・・。」

笑えるわ、と言いながら、彼女の表情は少しだけ苦しそうだった。

「新しい苗字は『平』にしようと思ってるの。だから・・・、」

「ええ。絶対に認めさせ、勝って、貴女をあの家から解放させて差し上げます。」

いつにない俺の断言に、彼女は表情を和らげ。

「ありがとう、絃人さん」

と、涙をほろりと一つ流した。

その涙も、恐らくは無意識の涙だったのだろう。

事実、彼女はその一粒しか涙を流さなかった。

それを見た俺は、何がなんでも彼女の為に働こうと決めた。

それからの二ヶ月は病院と葉々宮家、そして司法機関の間を行ったり来たりを繰り返し、忙しくしていた。

そんな最中だった。

その報告を聞いたのは。

彼女は嬉しそうに微笑み、本を見ては、にこにこしていた。

幸せになって欲しい。

そう願ったのは恐らく俺だけではないだろう。

なのに。

愛と運命を司る神が、何処までも彼女に対し残酷で、無慈悲なのだと思い知らされたのは、奇しくも身も凍るような雪の降りしきる、聖夜間近の昼過ぎだった。

♪ 30 目覚めと行動？（後書き）

更新。

♪
31 芽生えた命（前書き）

更新。

♪、31 芽生えた命

誰もいない、静かで、穏やかに流れる時間。

でも温かさは感じられず、感じるのは寒さだけ。

でも、それも明日で終わり。

いよいよ、明日。

明日になれば私はこの鉄筋コンクリート製の、寒く、閉ざされた鳥籠から、自由な外へと出て行ける。

精神科病棟に放り込まれて、約二ヶ月。

季節は真夏だった8月から、色彩豊かな秋・10月の下旬になっていた。

回診に来てくれる先生達は、日に日に明るくなっていく私を見て安心したのか、はたまた偶然だったのか、とりあえずその話を私にしてくれた時、私は驚き、涙を流してしまった。

先生達はそんな私を笑いもせず、笑顔で「おめでとう」と、祝ってくれた。

嬉しかったのはそれだけじゃない。

先生達は、「お祝いと、君の努力だよ」と言って、今朝の診察で私の退院を許可してくれ、辛く、寂しい入院生活を耐え抜いた事を褒めてくれた。

「因果なモノよね」

そんな言葉と共に、そつと、まだ膨らみも目立たないお腹を慈しむように撫でるようになって、一ヶ月弱。

妊娠を聞かされた時、私がまず一番最初にした事は、紘人さんを通して、綾橋のお義父様を内々に病院へ呼び出し、妊娠の報告と、今度こそ本当に離婚する為の話し合いをする為の事前の話し合いだった。

『言わなくて良い……。今まで済まなかったね。』

言い淀む私を見て、お義父様は苦笑し、一枚の離婚届をスーツの内ポケットから取り出し、私の前に差し出した。

それを受け取り、紘人さんとお義父様のいる前で開けば、既に智の署名と捺印が済まされており、あとは私が記入し、役所の窓口に提出するだけになっていた。

『息子が、智が直筆でサインしたものだ。今の息子は、もう以前の息子ではない。君が知っている息子は消えてしまった……。』

その言葉に驚き、何も言えない私に、お義父様は、この家から離れ、楽に、むしろ、楽になって、自由になって欲しいと、疲労と悲しげな笑みを湛えた表情で、年下の不出来な嫁だった私に頭を下げ、願った。

そんなお義父様を目にしてしまえば、私は何も言えず、頷くしかなかった。

（ああ、私はこんなにも思われ、愛されていた・・・。）

短く、歪な夫婦だったけれど。

いたらなく、そそっかしい義娘だったけれど。

それでも確かに、お義父様は私を家族として愛してくれていた。

その想いを無碍には出来ないし、私も後には引けないし、戻るつもりもない。

自分の為と、そして何より、私が初めて心から愛したあの人の為に。

私は智に、温かく、穏やかな幸せと、家庭を作ってあげたかった。なのに、私はその相手である智に、「疲れた」と言わせてしまった。

そんな私に、智の傍にいる資格はない。

どれだけ出張や会議が続いても、決して不満や疲れを見せなかった智。

詰っても、勝手に家出し、入院した私を責める事なく、迎え入れてくれた優しい智。

その智が疲れたというのならば、智を『私』と言う重い枷から解放してあげるのが、智の幸せの為だろう。

拒否されたと思ったあの日は、暗い絶望に支配され、心はドロドロ

口になったけれど。

でも、今は。

（私は貴女の妻ではなくなるけど。）

それでも幸せになって欲しいとは願い続ける事は出来るし、願い続ける。

『お義父様、今までありがとうございました。この子が産まれたら、一度、逢いに来て下さい。今日まで本当にありがとうございました。私はお義父様の娘になれ、智さんの妻になれ、幸せでした』

別れを決めたからこそ、代わりに得た新たな命^{ヒカリ}。

私の決意を込めた言葉に、お義父様は一切の躊躇いも見せずに涙を流し、それでも嬉しそうに「幸せにおなり」と、言ってくれ、帰っていった。

（本当に私は幸せだった・・・。）

そしてこれからも私は幸せだろう。

私はお義父様と交わしたその約束の為に、そうあらうと、前を向いて歩いて行く事を決めた。

♪ 32 新しい生活？（前書き）

ご都合主義かもしれないですね・・・。

♪、32 新しい生活？

退院当日、私は小さな荷物を持ち、バツサリと短く切り揃えた髪を秋風に靡かせ、晴れやかな気分と足取りで退院した。

その私の後ろ姿を、二人の人物が、思わしげな表情で見送っていた。

「先生、あの子は本島に良くなったんでしょうか、それに、本当に病気だったんでしょうか・・・。」

そう呟いたのは、私の担当看護師だった関口さん。

関口さんは40代には見えなくらい若くて、良く私を気にかけてくれていた。

その関口さんは、本来は産科・婦人科の看護師だったのだけれど、私の妊娠が分かった日から、特別に精神内科に出向してきた。

それも、今日で終わり。

不安げな関口さんの言葉をどう捉えたのか、関口さんの横に並び立っていた男性医師の北原は、私の後ろ姿を見ながら、言葉を紡いだ。

「さあね。でもこれだけは言えるよ。あの子は母親になった事で、驚くほど前向きになった。そして、無理をせず、年齢に見合う笑顔が増えた。心の病はそれぞれが一つとして同じモノはない。きっと、あの子はあの子なりの闇があったんだと思うよ。でも、その闇は新

しい命が宿った事で抑えられた。多分、大丈夫だよ。あの子はもう、狂わない……。」

願わくば、あの子に幸福な温かな日々を、と、私を温かな眼差しで見送っていてくれた二人。

その二人に、その残酷な報せが入ったのは、奇しくもその日の事だった。

時は緩やかに流れ、11月に入り、私は離婚届を役所に提出した。

それは驚くほどあっさりと受理され、それに伴い、紘人さんの迅速な対応と働き、そして紘人さんが熾烈な論争に競り勝ってくれたお陰で、私は特別に戸籍変更が認められ、（最終的には裁判所の判断だったけれど。）綾橋でもなく、菜々宮でもなく、『平 吉乃』になった。

「これからは二人で生きていこうね」

私のこの呟きが聞こえたのか、窓口で離婚届を受理してくれた人が、私の言動を見て、華やかな微笑みを浮かべ、そして、「おめでとうございます」と言って、真新しい母子手帳をくれた。

その母子手帳に、ネームペンで『平 吉乃』と書けば、本当に新しい自分になれたんだという嬉しい気持ちと、少しだけの罪悪感が湧いた。

平は、私の死んだ母である香也乃の旧姓で、つまり、私は死んだ

母の旧姓を勝手に貰い、なおかつ、私は智の為と思いつつ、結局は自分の為に、今は胎動も感じられない愛しい我が子から、『父親』を奪った。

もう、二度と逢う事もないのだから、関係のない人になるのだから、と。

いつかはそれを子供に責められる日が来るとは思うけど、だけど今は――。

「ありがとうございます」

ネームペンを返し、名前を書いた母子手帳を鞆に入れ、頭を深々と下げれば、私の対応をしてくれた役所の職員は、「お気をつけて」と言っ、作りモノではない、本物の笑みを見せてくれた。

それに少しだけ心が癒やされた私は、役所を出て、今現在住んでいる家へと帰宅を急いだ。

妊娠が判明した瞬間、私は自分でも驚くほど変わったと思う。

くよくよ悩みがちだった気分は晴れ、性格は前向きになり、体調も良くなった。

一度、病歴を聞かれ、素直に答えた私に、病院側は私の身体を隅から隅まで検査し、【心配なし・異常なし】という結果を私に齎してくれた。

それに少しだけ疑問を感じ、「私の身体はぼろぼろで、出産は望めても、長生きは出来ないのでは？」と、思い切って訪ねてみれば、

「そんな事はありません」と言って、それでも、「今後の為にも、念のために定期検査や様子観察は続けましょう」と、私に言葉を返した。

その言葉に、私は嬉しくて泣いてしまった。

ずっと、子供には恵まれても、命には限りがあり、産めないかもしれない、身体がぼろぼろで出産に耐えられないかもしれないと思っていたから。

それが否定された。

こんなに嬉しい事は未だ嘗てないと思っていた私に、さらに嬉しい事は続いた。

♪ 33 新しい生活？（前書き）

誤字・脱字等を見つけたら、こっそり教えてください。

♪、33 新しい生活？

一度運氣が上昇すれば、それが暫らく続くものだと思ったのは、退院した日に新しい住居を捜す為に、ふらりと、偶然立ち寄った【青木不動産】の白金支店で、丁度シェアハウスの契約に来ていた人達に遭遇し、良かったら一緒に住まないかと誘われ、そのシェアハウスの程近くに、短大時代に抑えて取った資格のお陰で、仕事を確保できた時。

その新しい仕事先は、乳児から6歳までの子供たちが集まる保育施設で、そこでの私の主な仕事は、雑用事務。

採用の理由を直接施設長に聞いてみれば、保育士の資格があり、事務の資格もあった事が、主な採用の理由だった。

その仕事先には、採用された次の日から行っていて、今日は休みを貰っていたので、役所に離婚届を出しに行っていた。

「ただいま。」

家に戻れば、私の帰りを待っていたかの様に、庭の掃き掃除をしていた女性が、タックルしてくるように抱きついてきた。

「お帰り、吉乃！！」

私に抱きついてきた女性、——大川^{おおかわ} 尚^{ひさ}、26歳——は、興奮しているのか、いつになく、頬が薄く紅潮していた。

苦笑しつつ、「どうしたの？」と、私が彼女に問えば、満面の笑

みをその顔に浮かべた。

「ねえ、見て！！私、とうとうやったのよ！！中途採用だけど、あの【AYAHASHI】に採用が決まったの。これでやっと夢が叶うわ！！」

よほど嬉しいのか、彼女、尚は、私から離れるなり、採用通知を出し、それを見ては、クルクルとその場で周り、今にも踊りだしそうな雰囲気だった。

「尚、何時まで妊婦を外に引き留めてンだよ。お帰り、吉乃サン。」

私の帰宅に気付いたのか、それともただの偶然か、アクセサリー製作師の卵・水戸部^{みとべ} 由貴^{ゆき}、男性・23歳が、庭に面したリビングの窓から顔を出し、尚を注意し、柔らかに私に微笑みかけてくれた。

このシェアリングハウスには、私を含め、五人の男女が程よい距離を保ちつつ、仲良く暮らしている。

特に、尚と由貴君は、私が偶然立ち寄った不動産屋で、アパートの張り紙を見ていた私に声を掛けてくれた当事者達だった。

他の二人も、突然の誘いに嫌な顔を一つもせず、逆にそれとなく誘ってくれた。

当然私は突然のことで、中々頷けなかった。そんな私を見かねたか、それともただ単に焦れたのか、尚は艶やかな口唇で言葉を紡いだ。

曰く。

——5人だと、家賃の支払いが楽になるから。

と。

肉食系女子で、恋愛至上主義にも見えた、その尚の思わぬ誘い文句と優しさに絆され、私はすぐに彼女と仲良くなれた。

勿論、仲良くなれたのも、他にも理由はある。

尚は非常に蠱惑的な声と肢体を持ち、そして、外見からは想像も出来ないほど、性格は真面目で、私はそこに智を見たような気がした。

彼女を見る度、胸がまるで恋をしているかのように、甘くも、苦く疼くのは、勘違いじゃない。

でも、それを認めてしまえば、私のしたことが全て無駄になってしまう。

だから、今日もその疼きを見なかった、気付かなかったふりをする。

（私には、この子がいてくれる・・・。）

寂しい、胸が痛いと思うのは、きっと気のせい。

私が密かにそう悶々としている横で、夢が叶うと嬉しそうに微笑んでいる尚は、明るくて、本当に艶やかで、優しい。

きっと彼女みたいな人こそ、智には相応しいし、それなら私も諦めが付くし、譲れる。

（譲れる・・・？）

私は自分の思考に思わず暗い嗤いを漏らした。

智は私のモノでもないし、モノでもない。

智は命があり、一個人の人間だ。

ブランド物の鞆やアクセサリー、靴や装飾品ではもいのに。

結局は私もあの女と同じなのかも知れない。

自分勝手な思考は、浅ましく、醜い上に穢れている。

本当に愚かで、浅はかで、莫迦な女だ。

暗い思考に支配され掛けた時、私の手は無意識に下腹部を撫でていた。

奇しくも、その行動が私自信の思考を諫めたのだった。

♪ 33 新しい生活？（後書き）

短いですが、更新します。

♪ 34 小さな声？（前書き）

更新。

♪ 34 小さな声？

どうして神様は私を放っておいてはくれないのだろう。

お腹を撫でながら、段々と落ち着いてきた私の様子を見計らい、尚が温かい飲み物とブランケットを、由貴君から窓越しから受け取り、庭に置いてある白い椅子に私を座らせた。

その白い椅子は全部で五脚あり、みんなで座れるように揃えたモノで、その白い椅子が囲むようにしているのが、同じデザインの丸いテーブル。

作りとしては、イギリスの庭園に置いてありそうな優雅なデザインでいて、気品があり、なおかつ、新しさも併せ持つ家具。

いつもはここに座れば気分が浮き立つのに、今日は何もときめかない。

そんな私に気付いてるのかいないのか。

「ねえ、聞いても良い？」

尚に促されるままに椅子に座り、ぼんやりと空を眺めていた私に、幾分か遠慮してるのか、尚が小さな声で私のお腹を見ながら聞いて来た。

私はそれに『是』と答え、頭をゆっくりと上下させた。

「お腹の子の父親って誰・・・？」

まさか、私の知ってる人・・・？と、不安げに聞いてくる尚に、私は無意識の内に儂い笑みを浮かべ、肯定とも否定ともいえない答えを口にした。

「この子の父親、つまりは、私のついさっきまでの夫だった人はね、尚の採用が決まった会社の社長で、綾橋の次期総帥になる人なの。」

そして、自分もその社員だった。

そう、あの日までは、私は智の妻で、社員の一人だった。

けど、今日からは違う。

今日からは全くの他人であり、知り合いですらない。

無関係で、知らない人間になる。

妊娠している事を知っているのは、病院側の一部の人達と、紘人さん、お義父様の宗梧^{そうご}さんと、ここで一緒に暮らしている人達と、職場の人達くらい。

あの日以来、私は智の顔も見えていなければ、様子も聞いていない。

疲れたと言ったのだから、関り合いたくもないのだろう。

ならば、私も出来るだけ無関心でいようと決めた。

良く、『愛情の裏返しは憎悪だ』と、言う人がいるけれど、実際は無視・無関心だと思う。

憎悪であれば、心にもまだ存在できる。だけど、無視や無関心であれば、心には残らないし、引っ掛かりもしない。

全くの無だ。

「・・・、なんで、別れたの？社長さん、あんなに完璧で、カッコイイのに。」

採用通知をぐしゃりと握り絞めた尚は、理解出来ないとその真直ぐな眼差しで語っていた。

それに少しだけ笑って、私は眼を伏せた。

「そうね・・・。あの人は完璧で、容姿も優れていて、全てが申し分がなかった。女性にも苦勞してなくて、実際、白い結婚期間の間には、何度も朝帰りや浮気の証拠も見つけた。でも、それでも離れられなかったのは、あの人が好きだったから。必要だったから。」

「それなら・・・っ、」

私は尚の言葉を視線一つで奪い、醜く嗤った。

「『疲れた』って、言われたの。私を愛するのが。家族としてやっていくのが疲れたって。あんなに完璧な人が、すぐく疲れた顔をして。最後に見たあの人の顔は、私を完全に拒絶したものだったわ。」

あんなに歪んだ顔は、今までも見た事がなかった。

今思えば、あの時に私は決めていたのだと思う。

あれ以上智に嫌われるくらいならば、私から逃げてしまおうと思っただのは。

嫌われなくては、離れてしまえと。

私は私の身勝手な欲望の為に、智の籍から自分の籍を抜いた。

「だからね、別れたの。信じられないなら、これを会長に渡す序に聞いても良いわよ」

そう言って、私が鞆から取り出したのは、一通の封筒。

この中には新しい携帯の番号と、アドレス、住所と勤め先等が書いてある手紙が入っている。

本当は自分で渡した方がいいと思っていたのだけど、無関係になると決めた以上、やたらと智の周囲をうろつくのは良くないし、気持ちが揺らいでしまうかもしれない。

暫く私と封筒を見ていた尚は、はあゝっと、思いつきり重い溜息を吐いてから、その紅い口唇を吊り上げて笑った。

「ありがとう、話してくれて。私は吉乃を信じる。――これは明日にでも会長に渡しておくわ。良かったわね、私が秘書課採用で。」

「ええ。流石だわ。尚。」

お互い顔を突き合わせ、笑い合っていた時、その小さな声は私の耳に届いた。

♪ 35 小さな声？（前書き）

更新。

♪、35 小さな声？

その声は、本当に小さくて。

小さくて、高かったからこそ、耳に残り、気付いたんだと思う。

囁くような、本当に小さな声に、私は其方の方に目を向け、飲みかけていた紅茶のカップを危うく落としかけた。

真っ黒でサラサラな長い髪を、苺の飾りが付いたヘアーゴムで頭の両サイドでまとめ、紺色の制服に身を包み、綾橋家の若いメイドと手を繋いでいる女の子。

その子は私を見止めるなり、若いメイドから手を離し、パタパタと走り寄ってきた。

「おねえちゃん!!」

ギュッと抱きついてきた、子供特有の高い体温に、私は眩暈がした。

(ど、どうして、あやめちゃんが・・・。)

突然抱きつかれ、混乱している私になり代わり、頭の切り替えが早い尚は、私の指から紅茶のカップを抜き取り、小さな女の子、――あやめちゃんと目を合わせ、微笑んだ。

「こんにちわ。お名前はなんていうの？ 私は大川 尚っていうの。」

「俺は水戸部 由貴。」

いつの間にか私の背後にいた由貴君が、私の隣の椅子に座り、爽やかに見えるように笑みを浮かべ、あやめちゃんに問いかけた。

「君は、すみれさんの知り合い？」

由貴君がこの時、私をすみれさんと咄嗟に呼んだのは、私が自分の部屋を、すみれの花をモチーフにして整えていたからで、打ち合わせや何もしていなかった。する暇も無かった。

それでもすると私の名前を誤魔化してくれた由貴君には、感謝しても感謝しきれない。

でも、あやめちゃんはそれらを全て無視し、私に必死に縋りつき、大きな声で叫んだ。

「おねえちゃんでしょ？ よしのおねえちゃんだよ？ あやめだよ。ママもおにいちゃんも、おねえちゃんがかえってくるのまってるよ？ さがしてるんだよ！？」

あやめちゃんのその言葉に、私は一瞬心が揺らぎそうになった。

あやめちゃんが「おにいちゃん」と呼ぶのは、智だけ。

その智が私を捜しているという。

でも、そんなのはあり得ない……。

思い出す智の顔は、疲労しきった、辛い顔だけ。

そんな彼が、私を捜し、帰りを待っている筈がない。

（そうよ、待ってる筈なんかないのよ・・・。）

ギリリと、唇を強く噛みしめ、助けを請うように尚を見れば、尚の瞳は、私を強く見つめていた。

——誤魔化すんなら、徹底的に誤魔化すのよ・・・。あなたは決めたんでしょ・・・？

と、その瞳は、確かに私にそう告げていた。

私はその無言の援護に覚悟を決め、声が震えないように、お腹に力を込めて、優雅に微笑んだ。

「お譲ちゃん、あやめちゃんって言うのね。でも、私はあなたのお姉ちゃんでもないし、あなたの事も知らないわ？」

私のその言葉に、真珠の様な綺麗な涙を流すあやめちゃん。

許してなんて言わない。

嫌いになってくれてもいいし、むしろ嫌いになってほしい。

私なんか、忘れてくれればいい。

だから今、私は鬼になり、夜叉になる。

「ああ、でも、園児かもしれないけど、その制服はウチの制服じゃないし、やっぱ知らない子よ。」

「なあゝんだ。すみれさんの隠し子じゃないんだ。」

「隠し子って、私の子は、この子が最初で最後よ。私が愛したあの人は、もういないんだから……。」

由貴君の助け船に乗っかりつつ、半分本音、そしてもう半分の嘘で塗り固め、頬を薄く紅く染め、睨んでみる。

それにカラカラと笑い声をあげ、「そうそう」と、如何にもたった今思い出したと言わんばかりに、茶色のトレーナーのポケットから、小さな小箱を取り出し、私の目の前でパコン、と、蓋を開けた。

「その人からの注文だったのかな？これ、出来たよ。バラの装飾が難しくて時間かかったけど、我ながら上手く出来てと思うんだけど、どう？」

その言葉に箱の中身を見れば、私が過日注文した通り、いや、それ以上の仕上がりで、その指輪は、箱の中央できらきらと輝いていた。

ぼろり、と、涙を一つ流せば、由貴君は意地悪気に唇の端をつりあげた。

彼の言いたい事は解っていた。

でも、私はあえてそれに気付かない振りをして、箱ごと指輪を受け取り、涙の痕を拭き取った。

「ありがとう」

「いえいえ、俺は仕事しただけだから。それより、この子、どうするの？すみれさん」

由貴君はあやめちゃんを右手で指差し、クツキーをサクサクと音を立て、頬張った。

私はその言葉であやめちゃんを見れば、あやめちゃんは今にも壊れてしまいそうなほど、顔を歪め、泣くのを堪えていた。

（ごめんね・・・、でも、もう戻れないから・・・。）

痛む心を見捨て、私はあやめちゃんを拒絶した。

「お家に帰りなさい、ほら、お母様が待ってるわよ？」

まだ年若いメイド、それも、私を甲斐甲斐しくお世話してくれていた人達の一人でもある彼女の方へと促せば、あやめちゃんは耐えきれなかったのか、大きな涙を流し、そのメイドを置いてきぼりにし、逃げるかのように走って行った。

その置いていかれたメイドは、私に深々と頭を下げ、何も言わずにあやめちゃんを追いかけるべく、駆け足で去って行った。

（参ったわ。流石は糸帆^{しほ}さん。）

私がしたのは愛すが故の拒絶という、生易しいものなんかじゃない。

自己満足の為だけの冷たく、残酷な拒絶。

その意を理解した上で、彼女は私の正体を見抜き、頭を丁寧に下げて行った。

多分、彼女は今日の事を誰にも何も言わないだろう。

私が無意識のうちに彼女にそう願ったから。

冷たい秋の風が、私の心にぽっかりと空いた穴を埋めるように、暫く吹き続けた。

♪、 36 消えたお姉ちゃん（前書き）

あやめちゃん視点になります。

子供なので、平仮名が多くなりますが、ご勘弁下さい。
何しろ、4歳ですから・・・。

♪ 36 消えたお姉ちゃん

お姉ちゃんが、消えた。

そんなこと、最初は信じられなかった。
でも、何月になってもお姉ちゃんは何もどってこなかった。

ひろお兄ちゃんにきいても、りーちゃん、ママにきいても、知らないって言うばかり。

さとしお兄ちゃんは、お姉ちゃんが消えた日から笑わなくなった。
泣かなくなった。

それだけじゃなくて、目の色が冷たくなったような気がするし、
変なニオイがするようになった。

それもこれもぜんぶ、お姉ちゃんのせい。

おじさまは、そう言ったあやめに、『お姉ちゃんは遠い所に行っ
たんだよ』と言って、悲しそうに、さみしそうに笑って、あやめを、
ぎゅっ、て、抱きしめた。

でもね、あやめ、知ってるの。

おじさまが毎日泣いてるの。

きのうはお姉ちゃんの写真を見て泣いてたし、その前は、お姉ち
やんの部屋で泣いてた。

それだけじゃないの。

おじさまは、さとしお兄ちゃんに話しかけようとして、けっきょ

く、やめてる。

おばさまはおばさまで、毎日泣いてさとしお兄ちゃんを責めてる。

そのたび、さとしお兄ちゃんが壊れていくような気がするの、あやめの気のせい？

おじさまは、あやめにそれを見せたくないのか、いつも、ギョって抱きしめて泣くの。

お姉ちゃんがいた頃なら、おばさまも、おじさまも、こんなじやなかった。

いつも笑っていて、ニコニコして、温かった。

（いやだ、いやだよ。）

だいすきな人達が、バラバラになって、傷つけあって、砂のお城みたいにこわれていく。

さいしよは、パパとママだった。

いつも、いつも、さみしいって泣いてたママに、パパは声もかけなくて。

ママはパパが好きだったから、それがいやで、パパと離れた。

おじいさまとおばあさまは、ママが悪いつて、ママをいじめた。だから、ママはここのお家に逃げてきた。

さいしよは、ドキドキしたけど、ここのお家の人達は優しくかった。

とくに、お姉ちゃんはやわらかくて、ふわふわで、あまいニオイ

がして、大好きだった。

さとしお兄ちゃんも、そんなお姉ちゃんがホントに大好きだったんだと思う。

幸せそうで、いつもきらきらしていて。

この生活が、ずっと続くんだと思ってた。

——なのに・・・。

ボタンって、大きな音を立てて、玄関を開け、そこにいた女の人をみて、あやめはガマンが出来なくなつて、お姉ちゃんの部屋だった部屋に逃げ込んだ。

お姉ちゃんが病院から消える少し前から、この家に住んでるあのヒトと、あやめと同じくらいの女の子。

女のコは、いつも保育園に行く前、さとしお兄ちゃんに何か言いたそうにしてるけど、何も言わない。

あやめを見て、糸帆さんを見て、けっきょく、何も言わない。

たまに、一人で泣いてる。

その時に、『ごめんなさい、ごめんなさい、すーちゃん、ごめんなさい』って言って、泣いてる。

あやめが『すーちゃんってだれ?』って、聞いたとき、女の子は、びくびくしながら『すーちゃんは、先生だよ』って言って、メイドさんの後ろに隠れた。

その時は、何とも思わなかった。

だけど・・・。

「お姉ちゃん、どうして・・・？」

今日、ぐうぜん通ったお家にいた、お姉ちゃん。

いつもみたいに、キラキラで、ふわふわな、お姫様みたいに優しく笑ってたお姉ちゃん。

髪の色は違ったけど、眼鏡はしてなかったけど、お姉ちゃんだった。

あやめが欲しかった笑顔、みんなが帰ってきて欲しいと思ってたお姉ちゃん。

（それなのに、どうしてあやめの事、知らないって言うの！？）

人違いだって、あやめの事、知らないって、自分の子供は、この子だけだって・・・。

（え・・・？）

その時、なにかあやめの中で引っ掛かった。

そしてもう一度思い出してみる、あのお姉ちゃんのことば。

——私の子は、この子だけ・・・。

最初で、最後って、悲しそうに笑ったあのお姉ちゃん。
もし、あのお姉ちゃんが、おねえちゃんなら・・・。

「お姉ちゃん、赤ちゃんいるの・・・？」

あやめみたいな子が欲しいって言ってたお姉ちゃん。
そのお姉ちゃんの欲しかった子供。
それは・・・、

「お兄ちゃんの赤ちゃんなの・・・？」

この時、あやめはもつと気をつけるべきだったんだ。
そうすれば、あんなことにはならなかったのに。

でも、この時のあやめは、お姉ちゃんの言葉の意味に夢中で、あやめの言葉を誰かが聞いていただなんて、気付いてもいなかった。

♪、36 消えたお姉ちゃん（後書き）

だいぶ、話の中身を削り、修正しました。

♪ 37 新しい職場？（前書き）

更新。

♪、37 新しい職場？

胸がズキズキと痛み、疼くのは、心を偽っているせいで、どうしようもなく寂しく、罪悪感があるから。

昨日のあやめちゃんが最後に見せたあの表情は、私が望んだものだったのに、心は血と涙を流し、荒れた。

まだ小さいのに、あの憎しみと悲しみが内交じりになった、傷ついた瞳と表情^{かお}。

それを望み、実行したのは私だと言うのに、心が声なき悲鳴を上げた。

許して、本心じゃないの。

本当は愛してるの。

戻りたいの。

抱きしめて、抱きしめられたい。

なんて自分勝手に、浅ましく、醜い黒い気持ちを持ち、償いきれない罪だと知りながらも、まだ許して欲しいと願っている。

「愛してるなんて・・・、どの口が言うのよ・・・。」

ポロリと、口から洩れたのは、暗い、暗い、淀んだ本音・・・。

そんな私の背後から、ドンっと、勢いよく抱きついて来たのは数人の園児達。

「すみれせんせーい。ピアノ、弾いてえー？」

ピンク色のエプロンにまとわりつき、「ねえ、ねえ」と、甘えるのは、あやめちゃんよりまだ小さな女の子達。

その子達の近くにいた、まだハイハイを覚えてばかりの赤ちゃんを抱き上げ、音楽室に移動し、せがまれるままピアノの前に座った。

「何が良いの？」

私のこの問い掛けに、みんなは一斉に口を開いた。と、途端に、音楽室は賑やかで、幼く、拙い声で溢れた。

その間に私は赤ちゃんを背に背負い、おんぶ帯で固定した。

「せんせい、決まったよー」

にっこりと微笑むのは、明るい女の子。

男の人が近づくと、怯えたりするけど、とても愛らしい女の子。

私はその女の子に、嘘も偽りも、何もない笑みを向け、ピアノを弾いた。

本来、私は事務員としてこの保育所に雇われた。

それが今、どうしてこんな事になっているのか。

答えは簡単。

元々、人員が足りなかった所に、保育士の資格を持った人が現れたら、経営者の誰だって事務員と兼務させるだろう。

そして止めは、誰もいないと思って弾いた、月光のピアノのソナタ。

昔はする事がなく、檻のような閉じ込められた家の中で、嫌々に弾いていたピアノ。

だけど皮肉にも、そのピアノは、いつしか類以外では、最も私を癒やしてくれる存在になっていた。

完全な恋人となれなかった類と初めて喧嘩した時、学校で虐められていた時、そしてあの獣に穢された時。

今となっては、悔いても、悔い切れない苦い過去と、思い出したくもない過去を思い出しながら・・・。

最後の音をポーンと響かせ、指を鍵盤から離れた時間こえたのは、パチパチと、小さな音を立て拍手していた小さな観客の思いの詰まったエールの音。

その時の小さな観客達がここの所長に報告した事で、私は時々（と言ってもほぼ毎日。）保育士として働くようになったのだった。

♪ 37 新しい職場？（後書き）

短いけど、ここまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9895x/>

Si je tombe dans l'amour avec vous

2012年1月13日20時56分発行